

コロナから世界維新へ

く真の英知が夜明けをもたらしく

## はじめに

我が国は、もはや政治も、マスコミも、何もかも信じられません。

たとえば「Grafter」というサイトがあります。このサイトでは「法人情報」を検索することができます。このサイトでたとえば『日本銀行』と検索してみると、『日銀』の会社法人番号や所在地などを教えてくれます。これで、お金を発行している『日銀』が、普通の株式会社と変わらないことが分かります。

では次に、このサイトで会社法人番号として、「000012010019」と半角で打ちこんで、クリックしてみると、なんと「商号 内閣府」と出てきます。「商号」とは会社の名称のことです。

そして次に、たとえ私のように英語がまったく出来ずとも、「米国証券取引委員会 (U.S. Securities and Exchange Commission)」と検索してみます。そのサイトに行くと、すぐにリサーチする箇所が見つけれられるので、そこに「JAPAN」と打ちこんでみます。すると「JAPAN」と名が付く会社がたくさん出てきます。しかしこれらの会社の中に、何ともシンプルな名前の会社が一っだけあります。「JAPAN」です。CIKナンバーは「0000837056」です。CIKナンバー (Central Index Key) とは、「米国証券取引委員会」から、個々の会社に与えられている番号のことです。この「JAPAN」という会社をクリックしてみると、2003年から現在只今も、「JAPAN」が「米国証券取引委員会」に登録されている会社であることが分かります。しかも「FOREIGN GOVERNMENTS」と書かれており、これは「外国政府」を意味しています。

つまり日本は2003年より株式会社であったわけです。会社とは誰かの利益のために存在しているものであるのです。どおりで生きづらい時代であるわけです。さあ、コロナが世界を襲う今こそ、世の中が嘘だらけであることに、気がつくチャンスです。

なお本書を制作するにあたり、編集作業に携わってくださいました、志を同じくする「武士道・草莽志士の集い」の仲間たちに、心より感謝いたします。

## 目次

はじめに

コロナ禍で密かに進む怪しい計画

水増しされているコロナ死者数

アメリカでも行われていた水増し

そもそもPCR検査に問題がある

明らかに恐怖を煽る政府とマスコミ

コロナのカギを握るオバマゲート

誘導し続けるマスコミ

緊急事態宣言は正しいのか？

悪いことばかりのマスク着用

癌から見る医学の闇

精神医学は科学ではない

精神薬は殺人鬼と自殺者を作る

恐ろしい精神医学の治療法

根本から問題がある精神医学

ワクチンに入っている奇妙な成分

ワクチン接種はホロコースト？

人類は成長の限界にいる？

地球は温暖化していない！

石油から見る地球温暖化詐欺

デイトプ・ステートは軍産複合体

真珠湾攻撃に追い詰められた日本

デイトプ・ステートの本質はマフィア

「WGIP」―入れ替えられた正義と悪

通貨発行権の金融詐欺

アメリカにおける経済的戦い

「陰謀論」とレットテルを貼ったCIA

仮面を剥がされたタルムード

ユダヤ人を自称する者たち

ルシファアを「神」と呼ぶ者たち

大衆を「大きな獣」と考える者たち

実は自由無き自由の選択だった

「誘導より虐殺が簡単」と力説する男

40秒に一人の行方不明の子ども

古来より悪魔モロクを祀る者たち

悪魔のドラッグ「アドレノクロム」

Googleの経営者の邪悪性

現代にそり立つバベルの塔

彼らが目指す新世界秩序

イエスが「蝮の子」と呼んだ者たち

悪魔の手先となった日本政府

「特別会計」・税金の詐欺

愛国心を奪ったパネルDジャパン

「3S政策」・意識を逸らされた日本人

菅政権が続けば日本は滅びる

バビロニア式借金奴隷制度

人口を5億人まで減らしたい者たち

権威への弱さが招いた人類の過ち

中国共産党と国際銀行家の関係

5Gとスーパーシティの危険性

本当のスーパーシティ構想の目的

「チップ埋め込み」を企む者

彼らが描くデストピア社会

ムーンショット計画の本当の意味

精神医学の本当の目的

トランプ革命進行中

リビアのカダフィが成したこと

経済学という驚くべき虚構

封殺されたシカゴプラン

ノーベル経済学賞の真実

お金は無から創造されていた！

お金はそもそも仮想だった！？

本当は知っていた一流経済学者

市中銀行を管理する中央銀行

B I S 規制の問題点

秘密の秘密の組織

悪魔勢力とバチカンの謎

幕末から流れ込む毒水

真の軍神の東郷平八郎

山本五十六スパイ説

軍神の定説と真相の違い

山本五十六生存説

ちよつとだけ都市伝説を

悪魔を出し抜け

特攻隊の真意「其の壱」

特攻隊員たちの手紙①

特攻隊員たちの手紙②

特攻隊員の手紙③

特攻隊の真意「其の弐」

国家にも武士道精神を

悪魔の手先「自民党」を粉砕すべし

オウムが悪魔の手先の可能性

新たなイデオロギーの創設

世界維新に向けて

あとがき

## コロナ禍で密かに進む怪しい計画

「何かおかしい」、今、世界で起きている「コロナパンデミック」について、本当は誰もが心の中で、そう感じているのではないのでしょうか？

「コロナ騒ぎ」が始まった2020年1月23日、政府は「ムーンショット計画」などという訳の分からない計画を発表しました。内閣府は2020年の初めに次のようにホームページ上で述べております。「第48回総合科学技術・イノベーション会議（2020年1月23日開催）において、ムーンショット目標が決定されましたので、お知らせいたします」と。つまり『ムーンショット計画』は都市伝説でも、陰謀論でも何でもなく、実際に政府が現在ただ今、打ち出している目標計画なわけです。この計画は内閣府のホームページでもご覧になることができます。

す。

この計画によると、2050年までに、遠隔操作できる多数のAvatarとロボットを組み合わせて、現在とはまったく異なる科学的未来社会を構築するそうです。「Avatar」とは、インドの神話の「化身」が語源ですが、現在では、ゲームやネットの中で使用する自分の「分身」のことを意味しています。つまりネットなどの仮想空間の中で、自分が設定したキャラクターのことを、「Avatar」と言うわけです。そして内閣府は「コロナ騒ぎ」が始まった2020年1月に、この『ムーンショット計画』を発表し、「ロボットとAvatarを組み合わせた科学的未来社会を構築する」などという、訳の分からないことを言い始めたわけです。

国民の目がコロナに集中している4月、5月に、この計画に先立って、すでに「スーパーシティ法案」が衆参両議院でスピード可決されています。「スーパーシティ」とは、AI（人工知能）とビッグデータを活用して、自動運転、キャッシュレス、オンライン医療、オンライン教育などを実現させた「未来都市」のことです。また、すでに政府は、コロナパンデミックに合わせて、「新生活様式」なるものを国民に要求し、オンラインでの帰省、仕事、勉強、飲み会をするように呼びかけております。そして安倍政権が終わり、菅政権になると「デジタル庁」が設置されること決定し、「脱ハンコ」、「デジタル化」の流れが出来上がっております。

極めて重要な真実を述べますが、「コロナ騒ぎ」によって、すでに『ムーンショット計画』は確かに動き始めているのです。後ほど『ムーンショット計画』の真の目的については、詳しくご説明いたしますが、内閣府はホームページ上で、この計画の目標を6つ公開しています。最初の目標は以下の通りです。

「ムーンショット目標1 2050年までに、人が身体、脳、空間、時間の制約から解放された社会を実現」

政府は何を目標にしているのでしょうか？AIロボットやAvatarを駆使して、身体からも、脳からも、空間からも、時間からも解放されている社会とは、果たしてどんな社会なのでしょうか？普通に想像してみると、映画『マトリックス』のように、人間が仮想空間の中で生きながらも、現実世界では眠り続けているような狂った社会

を空想してしまうのは、果たして私だけでしょうか？

本小冊子を書いているわたくし与国秀行も、一人の無知な人間です。しかしこれから本書が述べることは、東京大学でも、ケンブリッジ大学でも、オックスフォード大学でも決して学ばないことであり、マスコミが伝えない真実です。そしてその内容は、日本人のみならず人類の未来にとって、本当にとっても大切な話ばかりです。ですからどうか心して、読み進めてください。私も命懸けで本書を綴ってまいります。

かつて古代ギリシャの哲学者ソクラテスは言いました。「真の英知は己の無知を認めることである」と。「自分の無知を素直に認めることが、偉大なる英知に繋がっていく」、ソクラテスはそう述べたのですから、「己の無知を認める」ということは、とても尊いことです。しかしそれはなかなかできないことでもあります。なぜなら人にはそれぞれ皆、プライドがあるからです。プライドが邪魔して、たとえどんなに大切な真実であっても、目の前の真実から目を背けようとする人も、世の中には大勢おります。しかしそれでは悪を見破ることができず、この「コロナ騒ぎ」が終わることもないでしょう。

ですからどうか「自分は何でも知っている」とか、「すでに自分が知らないことはほとんどない」とか、そんなことを思わずに、共に謙虚な心でもって自らの無知を認め、偉大なる英知でもって悪に打ち勝つべく、本書を読み進めてください。

## 水増しされているコロナ死者数

では、今回の「コロナ騒ぎ」は、どこがどのようにおかしいのでしょうか？まずはそれを検証しなければなりません。

たとえば2020年10月20日現在、新型コロナウイルスの日本の感染者は9万3098人、死者数は16

72人ですが、この数は本当に多いのでしょうか？

毎年、モチを喉に詰まらせて窒息死する人は、1月だけでも約1300人です。ですから単純に考えて、「モチ」のほうが、「コロナ」よりも致死率が高いのです。では、モチを日本人が恐怖して、政府から「モチ禁止令」が出されたことがあったでしょうか？

しかも死者数だけで考えるならば、2019年のインフルエンザの感染者は1200万人を上回り、死者数は約3000人です。これは、コロナ感染者の約130倍、死者数でも約2倍です。昨年の1月だけでも、1日に50人以上の方がインフルエンザで亡くなり、1月だけで1500人以上の方が亡くなりました。しかし2019年、テレビでインフルエンザについて、わざわざ連日、感染者数や死者数を報道するようなことはなく、政府から「緊急事態宣言」も出されませんでした。

少し数字から真実を見ていくと、誰もが「何かこのコロナ騒ぎはおかしい」と、そう感じて当然なのです。ですからどうか冷静に考えてみてください。自分の身の回りでコロナに感染した人、重篤症状になった人、そして死亡した人がどれだけいるでしょうか？本当にコロナは連日、マスコミが報道しなければならぬものなのでしょうか？本当に新型コロナウイルスは恐ろしいものなのでしょうか？

実は厚生労働省がホームページで公開している資料にも、「新型コロナウイルスは風邪の一種」と書かれております。これを踏まえて、『YouTube』もされており、私も一緒にイベントをさせていただいた寺尾介伸さんという方がおられ、彼は市民団体の代表もされています。この彼の仲間が、8月中旬に、厚生労働省に電話をかけて、「厚生省は実際、コロナの危険性をどれくらいのものとして認識しているんですか？」と質問すると、厚生労働省の職員から驚くべき返答が返ってきました。

「コロナの危険性の資料は見つからない。だからコロナが危険であるという根拠があるわけではない。ただ国民には注意喚起はしている」と。つまり厚生労働省の職員が、はっきりと「新型コロナウイルスが実際にはどれだけ

危険なものなのか、それは分からない」と述べたわけです。

しかしその危険性が分からない新型コロナウイルスによって、政府から「自粛要請」が出され、「緊急事態宣言」が出されて、こうしている今も経済が破壊されて、今後、数万の会社が倒産し、数百万単位で失業者が出る事態になっております。すでに自殺した人もおります。

しかも信じがたい厚生労働省の資料をご紹介します。これは「厚生労働省」が各都道府県の地方自治体に対して送った資料であり、厚生労働省のホームページから、誰でもご覧になれる確かな資料です。この厚生労働省の資料には、次のように記されております。

「新型コロナウイルス感染症の陽性者であって、入院中や療養中に亡くなった方については、厳密な死因を問わず、『死亡者数』として全数を公表するようお願いいたします。」

つまり厚生労働省は、各地方自治体に対して、「厳密な死因は特定しなくても良いから、検査の陽性者はすべてコロナ死者数としてカウントせよ」と、まるで水増しを指示するかのような文書を送りつけていたのです。そして寺尾伸さんが、この資料を手に愛知県の県庁職員に質問すると、その職員は堂々と「たとえコロナで死んでなくても、PCR検査の陽性者はすべてコロナ死者数としてカウントする」ということを述べました。これも動画がネットに上がっています。つまりこれははっきり言って、「厚生省がコロナ死者数の水増しを地方自治体に要請していた」ということです。

そして実際に「コロナ死者数の水増し」は行われており、ネットの『NHK』のニュースでも一部取り上げられております。そのニュースは以下の通りです。

「鹿児島市は、新型コロナウイルスに感染し医療機関で治療を受けていた市内の90代女性が28日までに死亡したと発表しました。市によりますと、女性には基礎疾患があったということで、死因は新型コロナウイルスの感染とは関係ないということです。ただ、市は、厚生労働省の基準に従い、新型コロナウイルス関連の死亡者として

国に報告したということです。」

つまり厚生労働省が各地方自治体に対して、「陽性者は厳密に死因を問わず、コロナ死者数として公表するようお願いいたします」と指示を出し、そして実際にその通りのが行われていたということが、表のネットニュースでも明らかになったわけです。日本では、行政の命令によって、「コロナ死者数の水増し」が行われていたわけ

## アメリカでも行われていた水増し

「コロナ死者数の水増しが行われていた？」と聞けば、誰もが驚き、そして怒りたくなることでしょうが、しかしこれはアメリカでも起きていました。米国の議員であり、医者でもあるスコット・ジェンセン氏は、『FOX NEWS』のインタビュで、次のように答えました。

「今、コロナ患者が入院したら、病院側に1.3万ドル（140万円）が支払われ、もしもその患者が人工呼吸器を使用するならば、病院側に3.9万ドル（約420万円）支払われることになっています。

あるいはイタリアでコロナで死亡したとされる人の死亡診断書を、イタリア国立衛生研究所が再検証したところ、コロナが死亡の直接の原因だったものはわずか12パーセントに過ぎず、残りの88パーセントは、最低でも他にも一つは病状がありました。」

つまり米国ではコロナ患者が入院したら、政府から病院側にお金が支払われ、しかももしもその患者が重篤ならば、さらに多くのお金が病院側に支払われているために、お金目当ての病院がコロナ感染者をわざわざ水増しをしている、というわけです。

さらにスコット・ジェンセン医師は言います。

「アメリカの厚労省から病院に7ページの文書が届きました。その文書には、ある高齢者がたとえ肺炎で亡くなったとしても、その人が生前、接触していた息子が、もしもコロナの陽性になったら、その高齢者の死亡診断書には

『コロナが原因』と書く、ということが適切だと述べられていました。

これはこれまでの（アメリカにおける）死亡診断書の書き方ではありえないことであり、これではバスに轢かれて死亡しても、PCR検査にかけて陽性であったら、コロナで死亡したことになってしまいます。」

つまり実は米国における「コロナの死亡診断書の書き方」は、「これまでの死亡診断書の書き方」とは、まったく異なった書き方がされており、とんでもない問題があったわけです。

しかも米厚労省からスコット・ジェンセン氏のもとに届いた、コロナに関する文書には、次のように記されていたそうです。「死因をCOVID・19と計上することに関して、COVID・19が絶対的な死因と判明できないものの、その可能性や疑いが高いなら、それがある程度、確信できる範囲ならば、死亡診断書にCOVID・19と記入することが許されます」と。

つまり日本の厚生労働省が各都道府県の地方自治体に対して、「PCR検査陽性者は、たとえコロナで亡くなっていなくても、コロナで亡くなったことにするように」と、コロナ死者数の水増し指示を出していたのと同様に、米政府もコロナ死者数の水増しを、病院側に支持していたわけです。

フロリダでは、コロナで亡くなったとされる人の遺体がたくさん並べられました。しかし本物か、偽物かは分かりませんが、片手で遺体を軽々と運んでいる不思議な写真が出回っています。もし、この写真が本物ならば、黒いビニールの中に入っているのは、おそらく遺体ではなくマネキンでしょう。そうならば、まさに「コロナ死者水増し写真」です。

あるいは「コロナと戦っている医療従事者を応援しよう」という流れは、アメリカでも、日本でも行われていることですが、しかしその一方で、「実は病院はガラガラだ」という映像、もしくは医師たちの内部告発の声も次々にネットに上がっています。

## そもそもPCR検査に問題がある

現在、新型コロナウイルス感染症の陽性、陰性の診断は、「PCR検査」で行っていますが、では、果たしてこの「PCR検査」は、本当に正確なのでしょうか？

「PCR検査」を開発したのは、ノーベル賞受賞生物化学者のキャリア・マリスという人物です。「PCR」は、正式には「ポリメラーゼ連鎖反応 (polymerase chain reaction)」ポリメラーゼ連鎖反応と言います。遺伝子を人工的に細胞分裂させて複製し、親子関係などを調べる遺伝子検査、もしくは個人を遺伝子レベルで識別する犯罪捜査などに広く用いられています。

「んっ！何かおかしくない？」とここで、疑問を感じていただいて当然です。なぜなら「実はPCRはウイルスを検査するものではないのではないか？」という意見が根強くあるからです。しかし残念なことに、PCR開発者キャリア・マリスは、「コロナ騒ぎ」が始まる直前の2019年8月7日に亡くなってしまいました。そのため開発者本人の意見を聞くことはできません。しかしその一方で、ジャーナリストのジョン・ローリッセン氏の取材によれば、生前のキャリア・マリスは、「PCRをウイルス検査に使ってはならない！」と発言していたそうです。ただし、「死人に口無し」とはよく言ったもので、映像としては残っていないために、本当にキャリア・マリス本人が、そう述べていたのかどうか、その確たる証拠は見つかっていません。

しかし彼が述べたとされるこの「PCRをウイルス検査に使ってはならない！」という発言を、裏付ける証言ならば、いくつもあります。たとえば徳島大学の名誉教授に、大橋眞という方がいらっしゃいます。この方は、これまでSARSなどの感染症対策で活躍されてこられた方です。大橋名誉教授は、次のように述べておられます。「コロナ騒動の原点に立ち返ってみると、そもそも何故PCR検査をするのか」ということにあります。

新型コロナウイルスは単離されておらず、病原性も確認できていません。

新型コロナウイルスの遺伝子という情報があるだけで、それが病気を起こすかもわからないし、そのようなウイルスが本当にいるのかもわかりません。

PCR検査は、遺伝子のごく一部を見るだけなので、類似したウイルスなどの常在性ウイルスも検出する可能性  
があります。そうなるとマスク着用や自粛、3密をさけても、免疫力が弱まるとPCR陽性になる可能性がありま  
す。

遺伝子の情報が間違っている可能性が高く、新型コロナウイルスも存在しない場合には、PCR検査は単なる常  
在性ウイルスを検出しているに過ぎないこともあるわけです。

PCR検査は一体何の遺伝子を検出しているかも分からないのが現実です。  
病原体を確認しないまま、PCR検査をすることの危険性を認識するべきです。」

大橋名誉教授の話は専門的で難解ですが、しかし素人にも理解できることもあります。それはやはり「専門家の  
視点からすると、『PCR検査』がコロナウイルスの感染検査には、まったく向いていない」、ということ  
です。大橋名誉教授が「コロナにおいて、PCR検査は危険である」とまで述べていることを、マスコミはきちんと報道  
するべきなのです。

あるいは一般社団法人『疫学会』のホームページにも、次のようにあります。「Q1・新型コロナウイルス検査  
は、どのくらい正確なのですか？」と。この質問に対して、次のように返答しております。「実際の感染者に対し  
て『PCR検査』がどれほど正しく診断できているかについての正確性の計算がまだできていません」と。

「PCR検査の正確性が分からない」、こうした話を裏付ける事実として、たとえばタンザニアのジョン・マグ  
フリ大統領は、2020年5月3日、国立研究所に動物や果物、自動車燃料などを「ヒトの検体である」として検  
査に持ち込みました。検体とは、医療検査に使用する材料のことです。たとえば検体には、血液・髄液ずいそく・尿・細胞  
などがあります。タンザニアの大統領はわざわざ検体に、氏名から性別、生年月日まで付けて、PCR検査にか

ました。すると大統領が密かに持ち込んだ。パイア、ウズラの卵、ヤギの検体からも、コロナの陽性反応が出たのです。こうしたことを受けて5月4日、タンザニア政府は国立研究所の所長と幹部を停職処分しています。ジョン・マグフリ大統領は、新型コロナウイルスによる影響を一貫して軽視しております。

あるいは『米国疾病予防センター（CDC）のホームページにも、「PCR検査」の注意事項として、次のような英文があります。』  
「? Detection of viral RNA may not indicate the presence of infectious virus or that 2019-nCoV is the causative agent for clinical symptoms.」

これを和訳しますと、「PCR検査で検出されたウイルスの遺伝子は、感染性のウイルスの存在を示しているとは限らず、新型コロナウイルスが臨床症状（肺炎など）の原因とは限らない」という意味です。つまり「PCR検査の陽性⇨新型コロナウイルスの感染とは言えない。PCR検査陽性をもって、肺炎を引き起こすとも証明できない」と、『米国疾病予防センター（CDC）の「PCR検査」の説明文の中でも、明確に述べているわけです。

しかもこの説明文の中には、「PCR検査」のキットが、新型コロナウイルス以外の他の様々なウイルスでも、「陽性反応」になることまで明確に記載されています。それらの他のウイルスとは以下のものです。

「インフルエンザウイルスA型・インフルエンザウイルスB型・RSウイルスB型  
・アデノウイルスタイプ3タイプ7 ・パラインフルエンザウイルス2 ・マイコプラズマ肺炎 ・肺炎クラミジアなど」

ちなみにアメリカでは、2020年2月までは、コロナよりも、インフルエンザの方が大問題でしたが、いつの間にかインフルエンザは鎮まり、コロナの感染者と死者数ばかりが増えて、ついには「ロックダウン」までしました。普通に考えて、インフルエンザや他の理由で亡くなった方を、新型コロナウイルス死亡者とカウントしている可能性は捨てきれないわけです。日本でも2020年のインフルエンザ患者数は約720万人で、昨年と比べると500万人近くも激減しております。

先ほどもご紹介いたしました、とある市民団体の方が、8月中旬の段階で、厚生労働省に電話して、厚生労働省の職員に、「厚生労働省では『PCR陽性者≠感染者』と捉えているんですか？だとしたらその理由は何ですか？」と質問すると、驚くべき答えが返ってきました。電話応対したその厚生労働省の職員ははっきりと言います。「PCR検査の陽性者をコロナ感染者としておりますが、その科学的根拠はない」と。

今現在、多くの日本人が、「ある人に『PCR検査』をかけて、もしも陽性反応が出れば、その人はコロナ感染者である」と考えております。実際に厚生労働省も、「PCR陽性者はコロナ感染者」として発表しております。しかしその厚生労働省の職員が、「科学的根拠を以ってPCR陽性者はコロナ感染者とすることはできない」と、はっきりと認めているのです。

あるいは「PCR検査」は死滅したコロナウイルス、つまり不活化ウイルスにも陽性反応が出ることが分かっています。不活化ウイルスとは、ウイルスを熱、紫外線、薬剤などで死滅させたものことです。たとえばある人が一度、「新型コロナウイルスに感染した」と医師から診断され、そして完治したとします。そしてその完治した人が、PCR検査をもう一度受けると、再び陽性反応が出ることがあります。しかしそれはコロナに再感染したわけではなく、死滅した不活化ウイルスの一部が患者の細胞内に残っていて、「PCR検査」がそのウイルスを検出した可能性があるわけです。

さて、ここで簡単に「PCR検査」について、これまで述べてきたことをまとめてみたいと思います。

徳島大学大橋名誉教授が、「専門家の視点から、『PCR検査』はコロナウイルスの感染検査には向いていない」と述べている。実際にタンザニアの大統領が明らかにしてくれたように、「PCR検査」は、パイヤやウズラの卵、他のインフルエンザウイルスなどにも陽性反応を出した。『米国疾病予防センター（CDC）』が「PCR検査陽性が新型コロナウイルスに感染しているとは限らない」と述べている。さらには「PCR検査」が、不活化ウイルスにも陽性反応を出してしまう。

さて、これらの話をもとに考えても、明らかに「PCR検査」が、新型コロナウイルスに感染しているかどうかを検査することに向いていないことが分かります。するとこの「コロナ騒ぎ」が始まる直前に亡くなった開発者キヤリー・マリスが、「PCRをウイルス検査に使ってはならない！」と述べていたという話にも、かなりの信ぴょう性が増してきます。

## 明らかに恐怖を煽る政府とマスコミ

本来、マスコミは大橋真教授やタンザニア大統領をはじめ、様々な意見を、いろいろな角度から報道して、視聴者に判断材料を与えて、大衆に自分の頭で考えてもらうように報道すべきです。しかし実際のマスコミは、一方からのみの報道を続けて、「危険性が分からないコロナ」に対して恐怖心をかきたてて、まるでパンデミックを煽るような、そうした偏向報道を続けております。まさにそれは「大衆誘導」そのものと言えるでしょう。

たとえばフジテレビ系情報番組『バイキング』は、2020年の5月19日の放送で、許されない捏造の偏向報道を行いました。当時はまだ「緊急事態宣言」の最中であり、「間もなく緊急事態宣言が解除されるのではないか？」ということがささやかれている状況でした。そうした中でその情報番組では、5月17日の東京原宿の竹下通りの人込みの映像が映しだされました。そして結論として、コメントーターが「緊急事態宣言・自粛要請を守らず、こんな人混みならば緊急事態宣言は解除できない」と述べたのです。

しかしこの『バイキング』が報じた東京・原宿の人混みの映像は、5月17日のものなどではなく、3月のものであることが視聴者の調べですぐに明らかになりました。というのもこの映像の中に、『マクドナルド』の店舗と商品の「てりたまバーガー」が映っているのですが、この「てりたまバーガー」は、3月4日〜4月7日までの限定期間商品であったからです。

これを見つけたユーザーが、マスコミの「捏造偏向報道」を見抜いて、ネットで炎上しました。するとフジテレビのアウンサーが謝罪することになりました。なぜなら人々は、きちんと「緊急事態宣言」を守っていたために、実際の原宿はガラガラだったからです。

同じような捏造報道は、テレビ朝日の情報番組『羽鳥慎一モーニングショー』でも行われました。『モーニングショー』の5月20日の放送で、前日の19日に、千葉市JＲ蘇我駅に、大勢の鉄道ファンが集まったと報道されました。しかしこの放送に対して鉄道ファンが、詳細な分析も添えて説明したことで、ネットで炎上しました。なぜならやはりかなり前の映像を流して、「このままでは緊急事態宣言を解除できない」という論調で報道していたからです。

つまりテレビ番組が、そろいもそろって捏造による偏向報道を行って、「このままではパンデミックがおさまらない、だから緊急事態宣言を解除することはできない」という論調で報じたわけです。それはまるでマスコミは、「未だ危険性が本当は分かっていないコロナ」に対して、日本国民の恐怖を煽り立てて、パンデミックを演出したようなのです。

また2020年5月21日付けの『デイリー新潮』でも報じられたことですが、小池都政が、今回のコロナパンデミックを実際よりも深刻であるかのように発表していたことも明らかにしています。小池都知事は、「新型コロナ対応ベッド数二千床に対して、入院が必要な患者の数は2619人」と発表し、病床率は131%と述べました。

「病床率131%」では、まるですでに医療崩壊を起こしているかのようです。しかし『デイリー新潮』の記者が、東京都の感染症対策課に尋ねると、「東京都が発表している入院必要患者数は、退院した患者の数が引かれていない未調整のものである」という驚くべき答えが返ってきたのです。つまり東京都は、入院が必要な患者の数をただ合計するだけで、すでにベッドに空きが無く、医療崩壊を起こしているかのような発表を、わざわざ行ったわ

けです。

なぜなら実際には、医療崩壊はまったく起きてなく、コロナ対応ベッドには、まだ十分にゆとりがあることが明らかになったからです。しかも『新潮』の記者が、「都のデータでは現在の病床使用率がわかりません。なぜ公表されないのでしょうか」と質問すると、小池都知事は質問した記者に目もくれず、止めてあった車に乗り込んでいきました。

また、前・安倍政権は莫大なお金を使い、2度にも渡って、人気の無いアベノマスクを国民に配ってきました。そして政府とマスコミは、国民にマスクの着用を呼び掛けてきましたが、マスク着用によって熱中症になる人が例年の2倍以上になっています。しかも近年の熱中症による死亡数は、毎年1000人近くに上っています。つまり現在の水増しコロナ死者数は約1600人なのに、マスク着用による熱中症によって、二千人に増える可能性もあるわけです。これは明らかにおかしいことです。

またタレントの志村けんさんが3月23日に「PCR検査」を受けて、コロナ陽性となり、一週間も経過せずに3月29日に亡くなりましたが、3月23日の時点のコロナ感染者は、まだ154人でした。東京都の人口約1000万人の中から、わずか154人の中に、超有名芸能人が入っている確率は、まさに奇跡的です。

あるいは癌で闘病中であつたタレントの岡江久美子さんが、4月23日にコロナで亡くなりましたが、日本の総人口1億3千万人、現在のコロナ死者数が約1600人ですから、その中に超有名芸能人が二人も入っていることを考えると、やはりこの確率も奇跡的です。

このようにテレビや新聞が報じていない真実を見つめていくと、「何かおかしい」と感じて当然なのです。

## コロナのカギを握るオバマゲート

ノーベル賞受賞者のリュック・モンタニエ氏は、新型コロナウイルスについて、次のように発言しています。「新型コロナウイルスは中国の研究所で人為的につくられ事故で流出した」

また、このモンタニエ博士とタッグを組んでいる数学者のジャン・クロード・ペレズ氏によれば、「新型コロナウイルスは時計職人が行うような精密なもので、自然に存在することはあり得ない」と述べています。実際に中国の武漢には、『武漢ウイルス研究所』があります。

そして『アメリカ国立アレルギー・感染症研究所（CDC）』の所長に、アンソニー・ファウチ博士という人物がおり、彼は2年前から今回の「パンデミック」を予言していました。アンソニー・ファウチ博士は2年前に、次のように断言しておりました。

「サプライズ・アウトブレイクが起きる、トランプ政権の間にパンデミックが必ず起きる」

そしてこのアンソニー・ファウチ博士が、トランプ大統領にいろいろとアドバイスすることで、アメリカは「ロックダウン」しました。このアンソニー・ファウチ博士は、1984年から『アメリカ国立アレルギー・感染症研究所（CDC）』の所長を務め、6代に渡って大統領に感染症に関する助言を行ってきました。

しかしなぜかこのアンソニー・ファウチ博士は、危険な生物兵器の研究を中国に委託しており、『武漢ウイルス研究所』に対して、コロナウイルスの研究費として資金援助までしていました。オバマ元大統領はアメリカ国内のウイルス研究は中止させる代わりに、2014年から2019年にかけて、5年にも渡って毎年370万ドル（約4億円）の援助を中国のウイルス研究所に行っていたのです。今回の新型コロナウイルスは、コウモリからヒトに感染した事になっていますが、この武漢のウイルス研究所では、コウモリを使ってコロナウイルスに関する研究を行ってきました。アメリカ国民が支払った税金で、中国の武漢ウイルス研究所を支援するという行為は、アメリカにおいて、国家反逆罪にあたらなんでしょうか？

アメリカ・ハーバード大学の化学生物学者部長を務めるチャールズ・リーバー博士は、2011年から『武漢理工大学(WUT)』の「戦略科学者」となり、その対価として月給5万ドル(約550万円)、さらに生活費として上限15万8000ドル(約1700万円)が与えられていました。しかも彼は、研究所の費用としても150万ドル(1億7000万円)ものお金が支給されていたのです。

中国には「千人計画」というものがあります。この計画では、中国の大学の威信を高めるために、世界最高レベルの優秀な人材を、世界中から招致しております。そしてこのリーバー教授も、この「千人計画」に参加しており、武漢理工大学に名を連ねていたわけです。しかし彼はアメリカ政府に対して虚偽の報告を行っていたために、2020年1月にすでに逮捕されています。

そして今まさに「オバマゲート」という言葉も徐々に知れ渡り始めており、トランプ大統領は「オバマゲートに比べたらウォーターゲートは小さなポテトみたいなもの(取るに足らない)」と述べております。「ウォーターゲート事件」とは、ニクソン大統領が辞任に追い込まれた政治スキャンダルのことです。トランプ大統領は「オバマゲート」について、「米国史上最大の政治犯罪」と述べています。

中国・武漢にある生物兵器研究所から新型コロナウイルスが流出した可能性がある、しかもアメリカのオバマ政権がなぜか5年にも渡ってその研究所を支援していた、なおかつすでに米国ではそうした研究所や大学と関わりがあった教授が逮捕までされている、さらには『CDC』の所長アンソニー・ファウチ博士は、「サプライズ・アウトブレイクが起きる、トランプ政権でパンデミックが必ず起こる」ということを2年前から予言していた、誰がどう見ても今回のコロナパンデミックは、明らかに「おかしい」のです。

ちなみに「特許番号US7220852」を調べてみると、発明の名称として「Coronavirus isolated from humans」という英文が出てきます。これは「人間から分離されたコロナウイルス」という意味であり、2004年4月12日に出願されています。出願者は『CDC』であり、2007年5月22日に特許申請は許可され、その約1ヵ月後

の2007年6月28日には、オバマ政権の頃のアメリカ政府に、権利が譲渡されております。しかしどうやらこの特許取得されたウイルスは、今、流行中のコロナウイルスではなく、2003年のSARSだそうです。

## 誘導し続けるマスコミ

すでに述べておりますように、政府もマスコミも、国民の恐怖を煽っているようにしか見えません。たとえばあくでもウワサの範疇に過ぎませんが、『TBSテレビ』の代表取締役会長の井上弘氏は、入社式で次のように挨拶したとウワサされております。

「テレビは洗脳装置。嘘でも放送しちゃえばそれが真実」(1998年 新人の入社式での発言)

「社会を支配しているのはテレビ。これからは私が日本を支配するわけです」(2002年新人の入社式上での発言)

「日本人はバカばかりだから、我々テレビ人が指導監督してやっとなるんです」(2003年新人の入社式上での発言)

これらの井上TBS会長の発言が、本物か、それとも偽物なのか、それは定かではありません。実際に私も、「いくら何でもここまで、大つぴらには言えないだろう」と考えております。しかしこうした発言をまるで裏付けるようなエピソードならば、実は幾つもあります。

たとえばその一つに、朝の『めざましテレビ』などで活躍していた森田美さんという政治ジャーナリストの話があります。小泉元首相が郵政民営化を国民に問う衆院選挙を行った頃、森田さんは複数のルートから、アメリカの保険業界が『電通』に対して、5千億円もの巨額の宣伝費を注ぎ込み、「郵政民営化は善である」と世論誘導を行っているという情報を入手しました。

郵便貯金と簡易保険を合わせた資産は360兆円もあり、もしも360兆円の日本国民の資産を、アメリカの保険業界が入手し、そして運用できれば、『電通』への宣伝費5千億円なんて額は微々たるものです。その差は72

0倍です。

『電通』という会社は巨大広告会社ですが、『電通』こそ日本のマスコミにおけるドンです。なぜなら『電通』は、日本のすべてのテレビ局と新聞、雑誌の企画や制作などの仕事に必ず絡むと言われているからです。しかもこの会社は、世界陸上、ワールドカップサッカーなどのビッグイベントの仕掛人でもあり、その資産は約2兆円にも上り、従業員数は約2万人を誇り、「広告界のガリバー」とまで言われる世界で一番巨大な広告代理店です。

この『電通』から『共同通信』と『時事通信』が誕生しております。『時事通信』の株主筆頭も『電通』です。日本の新聞社は、ほぼ全社が『日本新聞協会』に加盟しており、この『日本新聞協会』に情報提供しているのがこの『共同通信』です。ですから『日本新聞協会』のボスも『電通』なわけです。

また民放テレビ局各社は、CM広告で利益をあげており、スポンサーなくして民放テレビは成り立ちません。つまりテレビ局というのは、視聴者からお金を貰っているのではなくて、CMを流す広告主からお金をもらっているわけです。そのために巨大広告会社の『電通』は、民放テレビにも多大な力を持っており、また公共放送である『NHK』は、国民から受信料を収集しておりますが、しかし『NHK』も『総合ビジョン』というところには番組制作を依頼しており、この『総合ビジョン』の株主も、やはり『電通』です。

ですから日本のマスコミのドンは『電通』わけです。

森田さんは様々な情報源を当たって、「アメリカ保険業界が『電通』を通じて、日本の郵政・郵便貯金を乗っ取るうとしている」ということを見抜きました。そして彼は、勇気をもって『電通』への批判を始めたのです。すると彼は干されてしまい、やがてテレビから姿を消していきました。そして実際に「テレビを見ていた人ほど、郵政民営化に賛成して、自民党に投票した」という選挙結果が出て、日本郵政は民営化ならぬ外資化していきました。

森田さんのブログによれば、彼が干された時、テレビ関係者からこう言われたそうです。

「電通を批判するということは、マスコミの仕事を自ら失うということですよ。今後は森田さんに出演者としてテレ

ビに出ていただくことはできなくなりました。森田さんはマスコミで生きる者が決してしてはならない事をしてしまいました。森田さんは虎の尾を踏んでしまいました。残念です。さようなら。」

これは一体、何が行われたのでしょうか？ こうした「誘導報道」のことを、「スピン報道」と言いますが、政府の発表、そしてマスコミの報道によって、今もなお「大衆誘導」が行われていることに、私たちはいい加減、気がつかねばならないのです。なぜならコロナにおいても、まったく同じことが行われているからです。

そして実際に「スピン報道」が行われ、「大衆誘導」が行われていることを考えると、井上弘TBS会長が「テレビは洗脳装置。嘘でも放送しちやえばそれが真実」と、発言していたように思えなくもありません。

## 緊急事態宣言は正しいのか？

徳島大学の免疫生物学名誉教授である大橋眞<sup>まこと</sup>氏によれば、こうした新型コロナウイルスなどの病原体ウイルスの存在の確認は、基本的に「コッホの4原則」というものを満たす必要があるそうです。「コッホの原則」とは、ドイツの細菌学者ロベルト・コッホによってまとめられた、感染症の病原体を特定するための指針だそうです。それは次の4点です。

1. ある一定の病気には一定の微生物が見出されること
2. その微生物を分離できること
3. 分離した微生物を感受性のある動物に感染させて同じ病気を起こせること
4. そしてその病巣部から同じ微生物が分離されること

専門的で難解ではありませんが、この4点を満たすことで、はじめて病原体として認められ、ワクチンの開発もできるのだそうです。

では、「新型コロナウイルス」はこの「コソホの4原則」をどの程度、満たしているのでしょうか？大橋名誉教授の話によれば、現時点で「新型コロナウイルス」は、第1段階さえ満たしていないのだそうです。実は未だに新型コロナウイルスについて何も分かってはいない、というのが現実なのです。すでに述べましたように、日本の厚生労働省の職員も、はつきりと「新型コロナウイルスが実際にはどれだけ危険なものなのか、それは分からない」と述べています。にもかかわらず世界各国の政府は、「緊急事態宣言」や「ロックダウン」を行っているわけです。

しかもこうした「自粛要請」や「緊急事態宣言」は、「免疫学」からすると、実におかしなことだそうです。なぜなら世の中には、ウイルスや細菌があふれているからです。たとえば「免疫学」の専門家の意見として、「赤ちゃんと産まれたらペットを飼うと良い」という意見があります。なぜなら乳児期にペットと過ごすことによって、腸内細菌が増えて、「免疫力」が高まると言われているからです。「赤ちゃんは免疫力が弱いからペットを飼えない」と思ったら、実はまったく正反対だったわけです。また、子どもは泥遊びをすることで、雑菌に触れることによって、抵抗力・免疫力を養うことができます。

つまり人間が重い重量を持つことで筋肉を鍛えられるのと同じで、私たちは細菌やウイルスに触れることによって、免疫力を高めることができるわけです。なぜなら世の中にはもとからウイルスや細菌があふれており、人間の肉体は、ウイルスや細菌などに一度感染することで、体内に抗体を作り、免疫力を高めることができるからです。そしてこの仕組みを利用しているのが、実は「ワクチン」です。ひとまず「ワクチンの良い悪い」という議論は脇に置いて話を進めてみたいと思います。なぜならワクチンというものは、ウイルスや細菌などを処理して作った薬剤のことだからです。つまり一応、「ワクチン接種」の目的として、安全にウイルスや細菌を体内に一度入れることによって免疫力を高める、という狙いがあるわけです。

では逆に、どういったことをすると、人間は免疫力を下げてしまうのでしょうか？

一つには「ストレス」です。「ストレス」とはやりたくないことをする、我慢しなければならぬことをするな

ど、こういったストレスを感じる時に人は免疫力を下げます。あるいは将来への不安、貧困への恐怖、非難される恐怖、死への恐怖なども免疫力を下げると言われています。つまり心と体は繋がっているために、心が暗く落ち込むと免疫力が下がってしまうわけです。

二つ目は「過食と運動不足」です。つまり体の健康を壊すと免疫力が下がるわけです。特に現代では添加物、遺伝子組み換え食品が増え、多くの食べ物に危険性があります。その一方で、コロナによって運動する機会も減っています。ですから「食事と運動」には注意が必要であり、健康と免疫力は密接な関係なわけです。

三つ目は「過度の除菌」です。手洗いやうがいなどの過度の除菌は大切です。しかし赤ちゃんとペットに触れたり、子どもが泥遊びをすることで免疫力が高まるように、過度に除菌して、細菌やウイルスを遠ざけ過ぎても、やはり免疫力が落ちてしまうわけです。

これまでインドネシアでは、「肌の色」と「社会的階層の高さ」が関連づけて考えられる風習から、インドネシアの人々は美白意識が高く、「日光浴は観光客のすることだ」と考えられてきました。しかし「日光浴で新型コロナウイルスを撃退できる」と話題になり、インドネシアで今、「日光浴」がブームになっています。なぜなら人間は日光を浴びることによって、「ビタミンD」という万能ビタミンを体内で生成することができますからです。元北里大学の教授で、日本細菌学会名誉会員の熊沢義雄氏は次のように述べています。

「（食事や日光浴などによって得られる）ビタミンDには、免疫系の細胞の働きを良くする作用がある」

## 悪いことばかりのマスク着用

そして医師にして科学者であるジュディ・マイコヴィッツという方も、次のように言っています。

「マスクを着けるのは、実際に自身のウイルスを活性化させてしまいます。自分のコロナウイルスを再活性化して

病気になるんです。なぜビーチをクローズするんでしょう？狂気です」

元から私たちの身の回りには、すでに旧型のコロナウイルスがあり、これが原因で風邪になることもあります。そして科学者ジュディ・マイコヴィッツによれば、コロナウイルスがたとえ新型にしろ旧型にしろ、「マスクを着けることは、かえってコロナウイルスを再活性化させてしまう」と、驚愕の事実を述べているわけです。しかもビーチをクローズすることは、「狂気の沙汰だ」とまで彼女は言っています。なぜならビーチは日光浴も出来るばかりか、砂や海水から雑菌に触れることで、私たちは免疫力を高めることもできるからです。

また、ドイツのマルガレータ・グリス・ブリソン博士によれば、マスクをして、自分が吐いた息を吸うことは、間違いなく酸素不足になるそうです。そして人間の脳は、酸素不足に非常に敏感だそうです。たとえば脳の海馬というところには、酸素が不足すると、わずか3分も生きられない神経細胞があるそうです。ですから脳の警告症状として、頭痛、眠気、目眩、集中力の低下があります。しかし脳細胞が慢性的な酸素欠乏になると、それらの症状はすべて消えてしまい、神経変性疾患へとなってしまいます。アルツハイマー病、パーキンソン病、筋萎縮性側索硬化症、脊髄小脳変性症などは、この神経変性疾患に含まれております。つまりマスクを着けて、自分が吐く息を吸うことに慣れてくると、それは酸素不足に慣れてきたことを意味し、自分の脳を破壊してしまうわけです。

さらにマルガレータ博士によれば、幼児や子どもたちにとって、マスク着用は絶対に禁物であると断言します。なぜなら子どもたちには、学ぶべきことがたくさんあるため、彼らの脳は大人よりも活発に活動しているからです。そのために若者たちの脳は、大人よりも多くの酸素を必要としています。ですからマスクを着けることを子どもたちに強要して、彼らを酸素欠乏状態に置くことは、彼らの脳の発達を阻害し、彼らの成長そのものを損なってしまうのです。その大きなダメージは、元に戻すことができないそうです。

しかもウイルスの大きさに対して、マスクの網目は50倍もあるために、実はウイルスからしてみると、マスクはスカスカ状態で通り抜け放題です。このようにマスクはウイルスには効果が無いというのに、科学者ジュディ・

マイコヴィッツによれば、マスクを着用することでコロナウイルスを活性化させ、あるいはマルガレータ博士によれば、マスクを着用して酸素不足になると、脳の神経細胞が死に、子どもの成長にはとても良くないわけです。

つまり「緊急事態宣言」や「ロックダウン」によって、国民を自宅に閉じこもらせ、人と人の関係を割いて「ストレス」を抱えさせて、日光浴もさせずに青白くさせ、そうした「ストレス」から「過食」に向かわせて、なおかつ「運動不足」にしている。そして「過度の除菌」を呼びかけて、アルコール消毒をさせて、マスク着用を呼びかけて、海水浴場まで閉鎖している。しかも経済活動を止めることで、人々の将来への不安を募らせ、貧困への恐怖をも高めさせ、テレビを点ければ一方向の恐怖を煽る報道ばかり行い、コロナ死者数を水増すことで、人々の死への恐怖まで煽っている。まさに政府が行っていることは支離滅裂なわけです。

『裸の王様』という童話では、王様は詐欺師に騙されて、「賢い者にしか見えない服」を着てパレードに出かけました。大人たちは「何かおかしい」と感じつつも、他人の目を気にしながら、「存在しない服」を褒め称えましました。しかし幼い子どもが一人現れて、恐れることなく「王様は裸だ！」と叫ぶと、次々と大人たちも「やっぱりそうだったのか！」と気がつき始め、「王様は裸だ！」と笑いはじめて、詐欺が暴かれました。実は私たちにも、この『裸の王様』と同じようなことが行われていることに、1秒でも早く気がつく必要があります。なぜならこのままでは私たちが、殺されてしまうからです。

今、日本人をはじめ世界の人々は、「二つの戦い」から絶対に避けることはできません。一つの戦いは、コロナに怯えながら毎日を過ごし、暑い中でもマスクを着けて、政府から「自粛要請」が出たり、「緊急事態宣言」や「ロックダウン」が出されたら大人しく従うという戦いです。つまり「コロナとの戦い」です。

しかしもう一つ戦いがあります。その戦いとは、「このコロナ騒ぎは何かおかしい」と、そう気がついたならば、この「コロナ騒ぎ」の背後で本当は何が起きているのか、その情報を自分から探して、そして自分の頭で考えて、自分で決断を下し、自分から行動するという戦いです。つまり「コロナの闇との戦い」です。

人類は今、「コロナと戦うか?」、「コロナの闇と戦うか?」という、この問から逃げられる人は一人もおりません。しかし「コロナの闇」と戦わなければ、私たちは集団自殺することになるでしょう。

ですからどうか「コロナの闇との戦い」にご参加ください。

この戦いは、「自由のための戦い」でもありません。

そして今回の「コロナ騒ぎ」を考える時、どうしても避けては通れないのが、やはり「医学の問題」です。そして実は医学には多くの問題点があります。なぜなら医学は必ずしも人を生かしてはいないからです。いや、すぐに信じられないかもしれませんが、しかし、本書を読み進めればご理解いただけますが、医学は時に人を治すと見せかけて、殺してさえるのです。

では、「コロナ騒ぎの真相」を探るにあたって、「癌治療」と「精神医学」の2つの面から、医学の問題点について考えていきたいと思います。すると「コロナの闇」が見えてくるのです。

## 癌から見る医学の闇

日本の中央区築地にある『国立がん研究センター』を設立した人物に、武見太郎という医師がいました。彼は『日本医師会』の会長も務め、「大臣さえ頭を下げる」というエピソードさえあり、そして一説には次のように述べたとやられております。

「15万人の医師が露頭に迷うから癌は治してはいけない」

「音声が残っているわけではないので、武見太郎という人物が、本当にこんなことを言ったのかどうか、その確証はありません。では、本当に武見太郎医師が、そんなことを言ったのか、それを検証してみたいと思います。

グラフを見れば分かりますように、日本では今、癌で亡くなる人は増えに増え続け、年間に約40万人、一日に

約千人です。しかし、実は癌は正しい治療をすれば治ります。「そんなバカな！」と思われるでしょうが、ドイツのDr. レオナード・コールドウェルという医師は、次のように豪語しています。

「90%以上の癌は数週間のうちに完治し、手術も放射線治療も化学療法も必要ない」

本当は癌は治るのに、毎日千人の日本人が癌で死んでいる、果たしてこれは何を意味しているのでしょうか？「癌細胞はブドウ糖をエネルギー源とする」、これは1931年にノーベル生理学・医学賞を受賞したオットー・ワールブルグ博士が解明し、1923年に論文で発表し、すでに証明されている科学的事実です。

「癌のエサはブドウ糖」、まずこれをご理解ください。しかし日本の癌治療では、なぜか癌細胞のエサであるブドウ糖をわざわざ癌患者に点滴しています。摘出手術（切る）、放射線治療（焼く）、抗癌剤（盛る）、これらの「癌三大治療」によって、癌患者の体力が弱まった時、日本の医療現場では、わざわざ癌のエサであるブドウ糖を点滴しているわけです。そんなことをすれば癌細胞が、さらに元気になって、別の個所に転移して、癌患者が亡くなって当然です。

また、「実はビタミンCが癌細胞を殺す」、これもノーベル賞を2度も受賞されたライナス・ポーリング博士によつて、1970年に発見された驚くべき癌の治療法です。美容や健康のために数グラムのビタミンCを点滴することがありますが、その数十倍の60グラムの高濃度ビタミンCを点滴することで、実は癌は数カ月のうちに消えていくのです。

しかしアメリカで最も権威ある総合病院『メイヨークリニック』の研究者が、一流の科学雑誌に「ビタミンC癌治療は効果がない」と発表しました。そのために、この「ビタミンCによる癌治療」は否定されてきました。そして「高濃度ビタミンC点滴治療」の代わりに抗癌剤ばかりが売れて、製薬会社を儲けさせ、そして多くの癌患者が殺されてきたのです。ちなみに一番高い抗癌剤「ペグイントロン」は1グラムで3億3170万円です。この3億円もする抗癌剤を、50 $\mu$ g（マイクログラム）で1万2192円で売っています。（※1 マイクログラムは100万分の

1グラム)。

1985年、『アメリカ国立ガン研究所(NCI)』のデヴィタ所長は、米議会において、「分子生物学的に見ても抗癌剤で癌は治せない」と証言しています。しかも世界で最初に開発された抗癌剤は、「マスタードガス」と言つて、第一次世界大戦中にドイツが開発した毒ガスでした。マスタードガスという毒ガスを使つて、細胞の分裂を抑えるという治療法が発見されたわけです。そしてその後の抗癌剤も、基本的には「細胞分裂を抑える」という人体にとつて攻撃を行う強い毒物であります。そのために抗癌剤の取り扱いは、基本的に手袋やマスク、ガウン、ゴーグル、キャップなどの防護具を使用しなければなりません。

日本の国防費がわずか年間で約5兆円なのに対して、日本の医療費は約4兆円、日本人一人当たりだと約3兆4万円です。しかもその中でも、癌利権だけでも年間約1兆5千億円ですから、どれだけ間違つた癌治療によつて誰かたちを儲けさせて、そして誰かを殺しているか分かります。

だから『癌は5年以内に日本から消える!』という書籍を書かれた医師の宗像久男さんは、日本国民にこう呼びかけるのです。「皆さん起きてくださいよ!日本人は殺されているよ!」と。

こうしたことを考えると、「国立がん研究センター」を設立した武見太郎医師会会長が、「15万人の医師が露頭に迷うから癌は直してはいけない」と述べたのではないかという話も、十分に納得できます。

癌について、私が個人的に調べてきたことを述べますと、まず癌になったら、とりあえず玄米食に変えて、一日のうちで接種するブドウ糖の量を少しでも抑えていく、もちろん甘い食べ物も絶対によめる、そして半身浴でゆつくり長い時間、湯船に浸かつて読書でもするか、時間にゆとりがあれば何度もお風呂に入つて湯船に浸かる、もちろん温泉に行くのも良い。そしてなるべくクヨクヨせず、明るく楽天的に生きるべく、感謝の心をもつて毎日をごす。もちろんお金にゆとりがあれば、高濃度のビタミンCの点滴を受けるのも良いでしょう。

## 精神医学は科学ではない

「癌治療」という面から、お金に支配されている「医学の問題点」について考えてみましたが、「コロナパンデミック」によって、ワクチン接種が目前に迫る今だからこそ、もう一段、二段、深く「医学の問題点」について考えてみたく思います。そして「医学の問題点」に深く迫るのならば、やはり「精神医学の闇」を見つめることが手っ取り早いと言えるでしょう。

たとえば足が折れて病院に行く場合、あるいはインフルエンザに罹ったかもしれないから病院に行く場合、こうした時、まず医師は検査を行って、「レントゲン」などを見せてくれて「足が折れている」、あるいは「ウイルスに感染している」と、科学的根拠を示して患者に教えてくれます。それが医学であり、そして科学というものです。科学とは誰がやっても同じ結果になるものです。これを「科学の再現性」と言います。つまりAさんが実験しても、Bさんが実験しても、同じ条件ならば同じ結果になるのが科学の大原則であり、そして医学は科学を根底に持っております。

しかし実は精神医学というものには、この「科学の再現性」が少しも存在せず、まったく科学的根拠が無いのです。実は精神医学は、単なる「仮説」に基づいて診断しているに過ぎません。この仮説のことを「モノアミン仮説」と言います。

「モノアミン」とはドーパミン、ノルアドレナリン、アドレナリン、セロトニン、ヒスタミンなどの神経伝達物質の総称のことです。このうちノルアドレナリン、ドーパミン、セロトニンという化学物質が、精神的な病と密接な関連があり、それがうつ病、パニック障害、不安障害、統合失調症などを引き起こしている、という仮説があるわけです。それが「モノアミン仮説」なわけです。つまり精神科医たちは、この仮説に基づいて、患者の話を聴いて、「貴方はうつ病です」、「貴方は不安障害です」と、診断を下して、薬を処方して、その脳内のバランスの改

善を試みているわけです。

しかしバカげた話です。なぜならその脳内の「セロトニン」、「ノルアドレナリン」、「ドーパン」のバランスなどは、科学的に測ることができないからです。CTやMRIという医療機器によって、脳内の構造を調べて、脳出血・脳梗塞・脳腫瘍などを発見することならばできます。また脳内の血流の流れを測定することもできます。しかしCTやMRIなどは、「セロトニン」などの脳内の化学物質を調べているわけではないのです。「モノアミン仮説」の話を聞けば、誰もが「医者たちは脳内のそれらの化学物質をどうにかして計測して、バランスが崩れていることを見つけ出して、ウツとか、パニック障害と診断しているのだろう」と想像するものですが、実はまったくそうではないということです。

すなわち「精神科医」と名乗る者たちというのは、単なる主観で、あるいは予測と憶測で、もしくは独断と偏見によって診断を下して、そして薬を処方しているわけです。ですから一人の患者に対して、医師によって診断結果も異なれば、診断方法も大きく異なります。たとえば相模原の障害者施設で、一人の男によって19人もの人々が殺害され、26人が負傷するという悲惨な大事件がありました。この犯人に対して4人の精神科医たちは、それぞれ合計7つもの異なる病名をつけたのです。

これなどまさに、先ほど述べた「誰がやっても同じ結果になる」という科学の大原則にかなったものではありません。このように精神医学は科学ではないのです。科学を装った似非科学、それが精神医学なわけです。しかし「内科や外科などの他の医学が科学だから、精神医学も科学なのだろう」と多くの人々が誤解、錯覚しているわけです。しかも日本では、精神疾患にかかる人の数が、ここ数十年で激増して、約420万人もいます。それは精神医学が、心の病を治していない最大の証拠と言えるでしょう。

そして米田倫康という方が書かれた『発達障害のウソ』という書籍によれば、「モノアミン仮説」と同様に、精神科医たちは今、主観と憶測と独断と偏見でもって、次々と大勢の人々に「貴方は発達障害です」と診断を下して

おります。それは「発達障害のチェックリスト」を見ても、明らかにおかしいことが分かります。こうしたことから実は日本では今、子どもから大人、あるいは生後わずか数カ月の乳幼児まで、精神科医たちによって「発達障害」という診断が、科学的根拠を持たずにされているのです。そのために発達障害の薬を飲む人も激増しております。

## 精神薬は殺人鬼と自殺者を作る

そしてさらに問題なのは「精神薬」です。うつ病は「自殺予備軍」と呼ばれることもあるというのに、うつ病の薬「パキシル」の添付文書には、はっきりとこう記されております。

「自殺に関するリスクが増加するとの報告」、「自殺企図のリスクが増加するとの報告」

米田倫康という方が書かれた『発達障害のウソ』という書籍によれば、10歳の男の子が「うつ病」、「注意欠陥多動性障害」、「行動障害」と診断されて、この「パキシル」を処方されて、2013年6月14日に自殺したそうです。しかし「パキシル」の添付文書には、こうも記されているのです。

「警告 海外で実施した7〜18歳の大うつ病性障害患者を対象としたプラセボ対照試験において有効性が確認できなかったとの報告、また、自殺に関するリスクが増加するとの報告もあるので、本剤を18歳未満の大うつ病性障害患者に投与する際には適応を慎重に検討すること。」

つまり「18歳以下のうつ病には効果が無く、自殺の可能性がある」というわけです。この薬を10歳の子どもに処方して、そして自殺させてしまうことは、本当に罪ではないのでしょうか？あるいは「ジェイゾロフト」という抗うつ薬にも、やはり同じく「自殺念慮、自殺企図のリスクが増加するとの報告がある」と明確に記されております。

名古屋市の25歳の男性は十分な診察もありませんまま、医師から処方された向精神薬を服用し続けて、依存症になっ

た末に自ら命を絶しました。この男性が向精神薬を服用し始めたのは19歳の時でした。体の不調を訴え、名古屋市内の精神科クリニックで診察を受けると、医師はわずかな時間でうつ病と診断し、「リタリン」という向精神薬を処方しました。リタリンを飲み始めた当初、この男性の表情はイキイキとし、元気を取り戻したかのように見えました。しかしすぐに不眠や体のだるさを口にして、やがて「リタリン」の服用量が増えていきました。彼は別の病院やクリニックを次々と掛け持ちして、受診して、いつしかこの「リタリン」という薬を大量に集めるようになりしました。そして彼が自殺した際、彼の部屋には、リタリンの空き瓶や大量の処方箋が散乱していました。どうやら30以上の医療機関が、彼に「リタリン」を処方しており、彼のパソコンには「リタリンをやめるためにはどうすればいいのか」と書き残されていました。

実は「リタリン」は覚せい剤と同じ中枢神経刺激薬です。そのために「リタリン」の依存症になる人が増えて、違法売買、処方箋の偽造、窃盗にまで手を出す人が出てきました。そのために安易に「リタリン」を処方していたクリニックが、次々と摘発され、密かな社会問題となりました。

精神科医の西城有朋という方が書かれた『精神科医はなぜ心を病むのか?』という書籍によれば、精神科医は一般人の5倍も自殺しているそうです。アメリカの精神科医の自殺者数は、一般人の7倍、若い成り立ての精神科医の場合は10倍の自殺率だそうです。まさに精神医学が、人の心を治せないために、精神科医こそ心が病んでいるわけです。

「パキシル」や「ジェイゾロフト」といった抗うつ薬の添付文書に、「自殺」の文字があるように、向精神薬には必ずと言ってよいほど副作用が伴うものです。そうした精神薬の副作用のことを「賦活症候群」ふかつしやうこうぐん、または「アクチベーション・シンドローム」と言います。

かつてタレントの飯島愛さんがマンションの一室で孤独死して、亡くなってから数日後に発見されたことがありました。彼女も向精神薬を飲んでいたことが分かっています。しかし遺書が無いために「自殺」ではなく「変

死」にされました。実は現在の日本では、「自殺」と断定できない場合、「変死」にされており、日本の年間の変死者の数は約15万人です。420万人も精神疾患で苦しんでいる人がいる以上、この15万人の変死者と抗うつ薬は、おそらく何らかの因果関係があるでしょう。

向精神薬を飲んで「死にたい」と思わない場合は、「殺したい」と考えてしまうこともよくあります。つまり自殺に向かわない場合、暴力や殺人に向かつてしまうことがあるわけです。実のところ近年起きている凶悪事件の背後には、かなりの確率で向精神薬が関与しています。「全日空61便ハイジャック事件」、「西鉄バスジャック事件」、「池田小学校事件」、「秋葉原通り魔事件」などが、まさにそうです。あるいはアメリカで起きた「コロナバイン高校銃乱射事件」なども、やはり向精神薬が関係していました。

そしてついに2019年3月26日、「脱法覚せい剤」とまで呼ばれる「ビバンセ」という発達障害のADHD薬が、厚生労働省によって承認されました。この「ビバンセ」という薬は、体内にある赤血球の酵素と化学反応して、「アンフェタミン」という物質に素早く変化します。「アンフェタミン」とは何かと言えば、「覚せい剤」そのものです。つまり「ADHD薬・ビバンセ」は「覚せい剤の物質」なわけです。

すなわち「精神医学大国にして、発達障害大国でもある日本」は今後、子どもたちをはじめ多くの人々に、科学的根拠の無いまま次々と「ウツ」とか、「統合失調症」とか、あるいは「発達障害」という診断を下して、時には「障害」という重苦しいレッテルを貼るばかりか、合法的に覚せい剤まで飲ませていくことになるわけです。

はつきり言って現在の日本の現状は、「悪魔的に狂っている」と言えるでしょう。

## 恐ろしい精神医学の治療法

さて、コロナが世界を襲い、そして人類全体がワクチンを接種するか否かの時代なのですから、「医学の闇」を

さらに深く知るためにも、もう一段、精神医学について考えてみたいと思います。

世界で最初の向精神薬「ソラジン（クロルプロマジン）」が登場したのは1954年です。この「ソラジン」は、もともと合成染料として開発されました。染料とはもちろん色を付ける材料のことです。そして次にこの「ソラジン」は、豚の寄生虫駆除剤として使用されました。染料が豚の身体にいる寄生虫を駆除することに役だったわけです。

そしてこの「ソラジン」を薬として人に飲ませてみると、人の運動制御機能を遮断することも分かりました。つまりこの「ソラジン」を人に飲ませると、その人は動かなくなり、やがて感情が何もなくなる、ということが分かったわけです。恐ろしいことにこの「ソラジン」は、今でも向精神薬として、多くの人に処方されています。

しかし驚くかもしれませんが、「精神医学」では、この向精神薬が開発される以前、「精神外科」に頼っておりました。「精神外科」とは、読んで字のごとく「脳を切り取る外科手術」のことです。代表的なものに「ロボトミー（前頭葉白質切截術）」というものがあります。ロボトミーの種類として、「ロボトーム」という長いメスで前頭葉を切るものもあれば、眼球の入っている頭蓋骨の部分、つまり目玉の穴から、アイスピックのような器具を脳にまで到達させて、神経繊維を無造作に切断する恐ろしいものまであります。

かつては「医学・精神外科」の美名のもとに、多くのロボトミー手術が行われておりました。しかしケネディ大統領の妹ローズマリー・ケネディがロボトミー手術を受けて、知的障害の後遺症を負うなど、世界中で数多くの問題が起こったことで、いつしかこの「ロボトミー手術」は行われなくなっていました。

これだけでも十分に恐ろしいのですが、では「ロボトミー」の前は何を行っていたのかと言えば、「電気ショック療法」、「電気痙攣療法」です。[Electro Convulsive Therapy]の頭文字を取って、「ECT」とも呼ばれるこの電気ショック精神療法は、過去数十年にわたって、ウツ病治療などに用いられてきました。しかしこの「ECT」という治療法は、「記憶喪失」を引き起こすなど、重大な副作用があるために、やがて「ロボトミー手術」に

代わったわけです。

そしてこの「ロボトミー」でも知的障害の後遺症が数多くでたために、この「ロボトミー」に代わって誕生したのが、「ソラジン」という世界最初の「向精神薬」だったわけです。ちなみに「電気痙攣療法」は、今もカタチを変えて復活して行われております。精神科医からウツなどの何らかの精神疾患と診断されると、本当に今でも「電気ショックやってみますか？」と言われるのです。

## 根本から問題がある精神医学

古く精神医学の歴史をさかのぼると、「治療」と称した単なる拷問のようになっていきます。実のところ精神医学の歴史は、拷問から電気ショック、ロボトミー手術、向精神薬へと変化していく暗黒の歴史だったのです。つまり科学的根拠を持たず、治すこともできていない精神医学は、成立からかなり問題があったわけです。

なぜなら「精神医学」は、唯物論と優生学を根拠に持っているからです。「唯物論」とは「魂など存在しない。物しか存在しない」という考え方であり、「優生学」とは、チャールズ・ダーウィンの従兄弟であるフランシス・ゴルトンによって唱えられた「優秀な遺伝子だけを残して、劣等な遺伝子は排除していくべきである」と考える思想です。スウェーデンでは、この「優生思想」を背景にして、1930年代から1970年代まで障害者に強制的な不妊手術が実施されてきました。あるいはナチス・ドイツも、この「優生思想」に基づいて、ユダヤ人を迫害したり、障害者を殺害してきました。「障害者だからって世界は酷いな」と思うかもしれませんが、実は日本でも、1948年から1996年まで存在した「優生保護法」によって、障害者に対する断種、中絶、避妊が合法的に行われてきたのです。

こうした唯物思想、優生思想をその根底に持っているからこそ、精神医学は大問題なわけです。そしてこの間違った精神医学が、根拠としている書籍が『DSM 精神疾患の診断・統計マニュアル』です。この『DSM』こそ精神科医のバイブルです。しかしこの彼らのバイブル『DSM』も、やはり科学的根拠を持たずに、精神科の医師

たちによる主観と偏見と独断でもって書かれてきました。

ネットやDVDなどで、ドキュメンタリー映画『診断・統計マニュアル：精神医学による悪徳商法』をご覧になればよく分かりますが、男性医師たちがトイレで用をしながら、「こんな精神病はどうだろう」と話し合っていて、そして会議室に戻り、多数決を行って、その精神病が認定されたこともあるそうです。小さな部屋で精神科医たちが集まって、互いに意見を出し合い、一番大きな声を出した医師の意見が通ったこともあったそうです。参加した医師の話によれば、それはむしろ会議というより、「オークション」のようだったと言います。

こうして最初はたったの3つしかなかった精神病の数は、次々に増えていき、今では374にまで増え、世界中の1億2000万人が「精神病」と診断され、そして日本でも約420万人が精神疾患と言われているわけです。ドキュメンタリー映画の中で、精神科医の言葉として次の言葉があります。

「DSMはまともではなく、この本にある多くの障害は、厳密に検証されたわけではない。患者とDSMを渡されても仕方がない。この本をもとに診断したら、少なくとも20通りの診断ができる。」

実際に、そのドキュメンタリー映画では、精神科医が診断している隠し撮りの映像があります。そこには通院者が「なぜ私は適応障害なのですか？」と問いかけても、その精神科医は「あなたを見た印象から、X線にかけて診断するわけではない、偶然のものである」としかなぐり捨てられませんでした。しかし見た目や偶然で「障害」と診断され、自殺や殺人といった副作用の可能性のある薬を処方されたら、たまったものではありません。

ジョンという7歳の少年は、わずか15分の診断で「リタリン」という薬を処方されました。わずか15分で不安障害と診断された女性もいます。10分くらいの診断で、不安とうつ障害があると診断された男性もいます。ある男性は多くの医者から異なった様々な病名を診断され、それぞれ違った薬物を与えられたそうです。本人には何も質問せず、母親にだけ幾つか質問して、「精神病」と診断を下された女性までいます。

そしてこれらの診断は、かならず精神薬に結び付きます。なぜなら精神医学は、製薬会社の利益と密接に繋がっ

ているからです。もし精神科医が、診察に来た人に対して、「貴方は何も問題はない、薬を飲む必要はない」と言ったら、自分たちの仕事が無くなってしまいます。すなわち『DSM』という書物は、診察に来た患者のためではなく、製薬会社と精神科医のためのバイブルなわけです。

しかも精神科医には多大な権限が与えられていて、誰か一人の家族の同意さえあれば、精神病院に強制入院させることも可能です。そのために日本では1日に平均約5000人が強制入院させられ、合計30万人が入院しており、50年以上、精神病院に入れられている人の数は1773人です。そのために家族が遺産目当てに精神科医と共謀して、親を強制入院させて薬漬けにすることで、本当に精神病にしようというところまで起きています。

しかも精神科病院では今、「身体拘束」が増えています。厚生労働省の調査によれば、その数はここ10年で2倍以上にも増えて、1日1万人以上の人が身体拘束されております。うつや統合失調症などの精神病は、もともと死ぬような病気ではないはずなのに、精神病院から死亡退院する人の数は、1カ月に約2000人です。全国に30万人もいる入院患者のうち、精神病を治癒して退院する人の数は、1カ月にわずかたった300人、約千人に1人、0.1%です。

この数字だけを見ても、精神医学および医学は明らかにおかしいのです。

## ワクチンに入っている奇妙な成分

さて、「癌治療」、「精神医学」の2つの面から医学の問題点について考えてみました。簡単に振り返ってみますと、癌は治るのに治る癌治療はせず、高額な抗癌剤治療などによって、1日に約10000人、年間に約40万人もの日本人が殺されている。精神医学にいたってはまったく科学的でなく、まさに似非科学そのものであり、「医学」と到底、呼べないものである。しかも向精神薬によって多くの人が殺人鬼になってしまったり、自殺してしま

ったり、ついに日本では子どもたちにもで、「ビバンセ」という脱法覚せい剤を飲ませる事態になっている。30万人もの人々が精神病院に入院しており、1日500人が強制入院しており、病院内では身体拘束させられたり、死亡退院したり、中には50年以上、入院している人もおり、治癒退院するのは1カ月にわずか300人程度……。そしてこれらの医学の闇を踏まえて、「コロナの闇」をさらに迫ってみると、実は想像を絶する世界が見え始めるのです。

改めて述べますが、「COVID-19」、「新型コロナウイルス」と呼ばれているものは、「コッホの4原則」の最初のステップさえクリアしていなく、つまり新型コロナウイルスは何も分かっていないわけです。しかし何も分かっていないにもかかわらず、なぜかアメリカの製薬会社やバイオ医薬品メーカーは、ワクチンの供給を始めると発表しています。日本の厚生労働省も、「2021年前半から全国民にワクチン接種を始めていきたい」と述べております。

では、ワクチンは本当に安全なのでしょう？

実はすでにアメリカではロバート・ケネディ・ジュニアやトランプ大統領が、これまでワクチンを問題視してきました。ケネディ・ジュニアは言います。「ワクチン接種はホロコースト（大虐殺）と同じ」と。「ホロコーストとは言い過ぎなのではないか？」と、そのように思われるかもしれませんが。ですからこのロバート・ケネディ・ジュニアの言葉を、まずは検証していきたいと思えます。

たとえば多くの製薬会社が、様々な種類のインフルエンザワクチンを販売しておりますが、インフルエンザワクチンの中には、「チメロサル」という成分が入っているものがあります。「チメロサル」とは、「水俣病」の原因になった水銀です。

あるいは添付文書を読めば分かりますが、『サーバリックス』という子宮頸がんワクチンには、「イラクサギンウワバ」という蛾の幼虫の細胞が入っています。あるいは『ガーダシル』という子宮頸がんワクチンには、成分と

して「ホウ酸ナトリウム35マイクログラム」というものがあります。この成分はゴキブリを殺すために用いられている、「ホウ酸」の主たる毒物です。

こうした子宮頸がんワクチンを接種した世界中の多くの少女たちが、急性アレルギー症状、昏睡に陥り、中には死亡したりしています。日本でも子宮頸がんワクチンを接種したことをキツカケに、多くの少女たちが副反応に苦しんでおります。年若き少女たちが突然の失神、過呼吸、けいれん、歩行障害、握力が低下したためにペットボトルのふたさえ開けられなくなるなど、苦しい副反応と今も戦っております。

皮肉にもある少女は看護師になることを夢見て、勉強や部活に励む活発な子でした。しかし「子宮頸がんワクチン」を接種したことをキツカケに、その後の人生が大きく変化してしまいました。その少女の母は涙ながらに言います。

「(娘は)四六時中、頭の中がガンガンし、自分の意思とは関係なく、しびれたり、つっぱったり、感覚がなくなったりするのが、よほどつらかったのだと思います。自分で自分(体)を叩き、『消して、消して』と言ったり、『こんな体はいらない』と言ったりすることもあり、見ていられませんでした」

あるいは『米国ワクチン情報センター』という非営利団体の調査によって、「胎児の細胞」がワクチンの成分に使われていたことも明らかになっています。これも添付文書を読むとはつきりと分かりますが、肉体的には健康であったが、精神的には病んでしまったために中絶することになった妊婦の胎児から、「MRC・5」というワクチンの原材料が開発されていたのです。

水銀、蛾の幼虫、ゴキブリ駆除のホウ酸、胎児の細胞など、誰がどう考えてもワクチンの原料は不気味なものばかりです。子どもの頃、アニメを見ていて魔女がスープを作ると、その原料はトカゲのしっぽとか、ヘビの内臓とか、カエルの眼玉とか、そうした不気味なものばかりが出てきましたが、それに勝るとも劣らないものを原料にして、ワクチンは作られているのです。

なぜワクチンが悪魔的なのか、それは本書を読み進めていけば、ご理解いただけることでしょう。

## ワクチン接種はホロコースト？

では、本当にワクチンは健康に効果的なのでしょうか？

日本では1962年から「予防接種法」によって、生徒たちを対象にしたインフルエンザワクチンの集団接種が開始されました。しかし集団接種を行った学校と、行わなかった学校の冬の欠席率を比較した結果、「差はなかった」ために、1994年からインフルエンザワクチンの集団接種は廃止となりました。

2010年11月1日の『薬事日報』というサイトによれば、新型インフルエンザが世界流行した2009年、多くの人がインフルエンザワクチンを打ちました。そして日本では、なぜか133件もの死亡例がありました。しかし専門家は、「死亡とワクチン接種との明確な関連が認められた症例はない」としています。

その一方で実は毎年、インフルエンザワクチンの接種後に、数名が亡くなっています。しかし専門家は絶対にワクチンとの関連性を認めません。元『国立衛生院』感染室長の母里啓子氏をはじめ心得ある医師たちが、子宮頸がんワクチンやインフルエンザワクチンは不要であると述べています。

たとえば1983年生まれの方は、一般的に18歳までに24種類ものワクチンを接種します。2016年生まれの人になると、わずか生後6ヶ月までに、24種類ものワクチンを接種させられています。生後2ヶ月の検診で、8種類（B型肝炎、ロタ、DTP（3種混合）、ヒブ、ポリオ、肺炎球菌）のワクチンを受けています。しかもワクチンの同時接種の安全性は、実はまだ検証されていないそうです。

これは厚生労働省公式アカウントから動画をご覧になれますが、ある男性の娘さんは、「MMRワクチン（三種混合）」が始まった1989年に生まれ、1歳10ヵ月になった時に、予防接種で「MMRワクチン（三種混合）」

を接種しました。するとその幼い赤ん坊は、ワクチン接種からわずか14日後に、重い脳症にかかり、自分では一つできない身体になってしまいました。父親の男性は言います。

「無心に命の灯りをともし続ける娘の姿に励まされながら暮らしてきました。しかしあの時代、『MMRWワクチン』さえなかったらと残念でなりません。」

トランプ大統領も、ツイッターで次のようにつぶやいております。「健康な子どもが医者を訪れ、沢山のワクチンを大量に打たれ、体調を崩す。自閉症だ。なんと多くの症例がある事か！」と。あるいは2018年10月25日、『CDC（米保健福祉省疾病対策センター）』において、予防接種に関する委員会が開催され、看護師として20年間も勤務されたローリ・シミネリさんが、涙ながらにスピーチを行いました。

「私は地元の病院から引退したばかりです。私の同僚も、私自身も、誰もインフルエンザ予防接種の効果は信じてはいません。私は（看護師を）引退して良かったと思います。なぜなら今、こうして（CDCの）あなた方に話すことができるからです。」

私が働いていた時に同じことを話したら職を失っていたことでしょう。実際、多くの同僚が職を失いました。⋈  
中略

（ワクチン接種について）私の10歳になる孫の例をあげましょう。当時、彼はとても健康な状態で、美しい2歳の子どもでした。その子がワクチンを受けて突然、重度の自閉症になってしまったのを私は見ました。（動画『元看護師「インフル予防接種は効果がなく有害」と政府委員会で発言』より）

年間に40万人も殺している毒薬であり、劇薬でもある抗癌剤、人間を殺人鬼や自殺者に変えてしまう危険な賦活症候群がある向精神薬、さらには子どもにまで飲ませ始めている脱法覚せい剤ビバンセ、そしてここで述べてきたワクチンに関する様々な事柄……。これらを見ていくとロバート・ケネディ・ジュニアが述べた「ワクチン接種はホロコースト（大虐殺）と同じ」という言葉に、かなりの信ぴょう性が帯びてきます。

しかし今まさに、新型コロナウイルスを理由に、人類全体がワクチンを接種する流れが始まっており、日本では2021年の春ごろから、コロナワクチンの接種がすでに決まっております、しかももしも日本人の体に何かの副反応や異変が起きても、製薬会社は何の責任も取らず、政府が被害者に賠償することまで決まっております。つまりもしも何か問題が生じたら、税金で対応するということです。

実際に2020年10月下旬には、ワクチン接種の「努力義務」に向けて法改正も行われ、

「努力義務」とは、政府から「○○するよう努めなければならない」と法的に規定されることですが、しかし政府に背いても、法的制裁は何も受けません。しかし「努力義務」にすることによって、自然とワクチン接種する人は増えることでしょう。ワクチン接種はもう目前なわけです。

## 人類は成長の限界にいる？

「コロナや医学をめぐって一体、何が起きているのか？」、それを理解するためには、一冊の書物に目を向ける必要があります。それは『成長の限界』という書物です。スイスに本部を置くシンクタンク『ローマ・クラブ』は、1972年に第一回報告書『成長の限界』を出版しました。この書物の結論として、「温暖化」、「食料問題」、「エネルギー問題」などによって、すでに地球は限界に達しており、このまま人口が増え続けたら、地球そのものが持たない、と結論づけております。

そして『マイクログソフト』創業者のビル・ゲイツも、実はこの『ローマ・クラブ』の『成長の限界』と同じ思想を持っております。『聖書』の言葉に「悪魔も天使を偽装する」という言葉があり、あるいは『聖書』には、ルシフェルとか、サマエルという天使が随天して、悪魔になってしまう光景も描かれております。そしてこのビル・ゲイツという人物も、いつしか思想的に病んでしまったところがあります。なぜならビル・ゲイツは、2010年の

『TED』というスピーチ番組の中で、「Innovating to zero」（ゼロへの革新）」という演台で、次のように語っていたからです。

「何よりも人口が先だ。現在、世界の人口は68億人である。これから90億まで増えようとしている。

そんな今、我々が新しいワクチン、医療、生殖に関する衛生サービスに真剣に取り組めば、（人類の人口を）およそ10〜15%は減らすことができるだろう。」

つまりビル・ゲイツ氏は「成長の限界を迎えたこの地球において、人類が地球温暖化問題を乗り越えていくためには、人間が排出するCO<sub>2</sub>の量をゼロに向けていかねばならない。そしてそのためには人類の人口を削減する必要がある、その人口削減計画の手段としてワクチンが最も有効であり、ワクチンを世界中の人々が接種すれば、自然な流れで人口を削減することができる」と明確に述べていたわけです。彼のこのスピーチは、今でもネットでご覧になれます。

また2015年に『TED』に出演した時も、ビル・ゲイツは「もし次のアウトブレイクが来たら？ 私たちの準備はまだ出来ていない。1000万人以上の人が亡くなるような災害があるとすれば、それは核戦争ではなくウイルスである」と明確に述べていました。つまりビル・ゲイツは2015年の時点で、「パンデミック」が起きることを予言していたわけです。この動画もネットでご覧になれます。

そして2019年10月18日、『ジョンズ・ホプキンス健康安全保障センター』という組織が、『WEF（世界経済フォーラム）』、『ビル・アンド・メリンダ・ゲイツ財団』と共同で、ニューヨークにおいて、『EVENT 201』というものを開催しました。この「コロナ騒ぎ」が始まる直前に行われた2019年のイベントの内容は、まさにパンデミックをシミュレーションしたものでした。このイベントの動画もネットで見れます。

『WHO』への拠出金が世界で一番多いのはアメリカでしたが、しかしトランプ大統領は、『WHO』から脱退することを表明しております。そのためにアメリカが抜けた現在、『WHO』への拠出金が世界で最も多いのは、

『ビル&メリンダ・ゲイツ財団』です。そしてこの『ビル&メリンダ・ゲイツ財団』こそ、インドやアフリカなどの世界中で、子どもたちにワクチン接種を行って、数十万もの子どもたちを弛緩性麻痺にしてきました。

たとえばインドの『聖ステイブンス病院』の小児科医ネートウ・バシシュト博士とヤコブ・プリーエル博士が、『WHO』と『ビル&メリンダ・ゲイツ財団』を激しく批判しております。この二人の博士によれば、インドでは非ポリオ急性弛緩性麻痺（NPAFP）の症例が急増しており、その麻痺の原因を辿っていくと、ビル・ゲイツが慈善家気どりで贈っていたポリオワクチンが、頻繁に投与されていたことが明らかになったのです。インドでは約50万人もの子どもたちが麻痺になってしまい、すでに医師たちはビル・ゲイツを訴えております。こうした事実はロシアの国営放送でも報じられました。

この「地球」という惑星には今現在、次のように考えている人々が現実に存在し、なおかつ彼らはとてもお金持ちであるということを、まず私たちは知る必要があります。

「すでに地球は成長の限界にあり、地球温暖化を防がなければならない。そして地球の温暖化を防ぐためにはCO<sub>2</sub>を削減しなければならず、そのために人口を削減する必要がある、その最も有効な手段としてワクチン接種がある」

## 地球は温暖化していない！

たしかに「子どもの頃に比べると近年の夏は暑い」という感覚をお持ちの方もいるかもしれませんが。しかし地球45億年の歴史の中で、果たしていつの時代の気温を「ベスト」と断言できるのでしょうか？40年前の気温が最高で、現在の気温が最悪であると、一体どれだけのデータに基づけば言えるのでしょうか？

コロナが騒がれ、そして「地球温暖化」と今回のコロナを理由に、ワクチン接種がもはや目前に迫っている今だ

からこそ、我々人類は「地球温暖化」について考えなければなりません。地球は温暖化などしておりません。そもそも「地球温暖化」が詐欺なのです。この詐欺に気づかずして、地球人類に未来は無いでしょう。

「でも北極や南極の氷が溶けて、困っているシロクマの映像も見たことあるし、ツバルという南太平洋の国が水没している映像も見たことがある」と、そう思われる方もいるかもしれません。

しかし北極や南極は交互に夏と冬を迎えて、その度に氷が溶け出したり、海水が固まって氷になったり、また氷が溶けております。実はその氷が溶け出した瞬間の映像ばかりを、これまでマスコミが意図的に流して、「地球は温暖化している」と私たちを欺いてきたのです。あるいはシロクマが、ただ普通に海を泳いでいる姿の映像を流して、まるでシロクマが休む場所が無くて困っているかのようにも報道してきました。まさに「大衆誘導」です。

ツバルの映像も、これとまったく同じでトリックです。もともと海抜の低いツバルという国では、満潮になって海面が上昇することで水浸しになる土地があり、現地の人々はそうした土地と共に暮らしてきました。しかし役者をどこからか連れてきたのか、あるいは現地で演技の上手い人を見つけたのか、それは定かではありませんが、地球が温暖化して、南極や北極の氷が溶け出して水没したために、生活に苦しんでいるかのようなインタビュ映像を撮影して、これまで何度も報道してきたのです。もちろん土地の形は変わりますが、しかし北極や南極の氷が溶けてツバルが水没しているわけではなかったのです。

2009年にイギリスのイースト・アングリア大学のサーバが不正アクセスされました。そして地球温暖化問題に取り組んでいる国際的機関『IPCC』のメンバーの1000通以上のメールが持ち出されました。それらのメールの中には、地球温暖化に関するデータの偽造を示すものがあり、これは「クライメートゲート事件」として世界的に有名な事件です。

持ち出された問題の電子メールには、以下の内容があります。「『ネイチャー・トリック』が完成したところだ。最近20年のデータに実測データを加えて、1961年以降のKeithのデータの下降部分を隠した。」

ネイチヤー・トリックとは、「ホッケースティック」として有名な、突如として平均気温が上がっているグラフのことです。つまり実際のデータから、視覚化して見せるグラフにする時に、まるで地球が温暖化しているように見せかけていたわけです。この他にもデータをグラフにする時に、わざと気温を高く見せる演出が幾つも発見されています。

これまで世界中の多くの科学者たちが、「地球は温暖化している」とも、あるいは「地球は温暖化していない」とも語り、長きに渡って議論を続けてきました。しかし科学的に検証すれば、答えは一つであり、いくら一部の政治家や科学者、そして政府やマスコミが「地球温暖化」を訴えたとしても、実際には「温暖化」はしていなかったのです。もちろんどの政治家、どの科学者が、誰からお金をもらっているかは定かではありません。

## 石油から見る地球温暖化詐欺

温暖化について考える時、「石油」というものについて考えると、一つの答えが見つかります。石油から電力を作ると、CO<sub>2</sub>が出て温暖化するというのがこれまでの通説です。「だから残り少ない貴重な石油を大切に使う」という流れが世界にあり、脱石油、脱プラスチックへの流れもあります。日本でもレジ袋が有料化されました。

これまで「石油はあと30年で枯渇する」と言われ続けてきました。子どもの頃に、そのように聞かされて不安を感じた人もいるはずです。しかし石油は30年で枯渇するどころか、数千年分、もしくは数万年分あることが分かっています。つまり石油会社を営む者たちは、石油価格を吊り上げるために、「石油の残りの量は少なく、石油は希少価値があり、あと30年で枯渇する」というプロパガンダを行い、これまで私たちを騙し続けてきたわけです。

このプロパガンダのために、すべての日本人が毎日のように無駄な労力を強いられて、そしてお金を無駄にして

いることがあります。それは「エコ」と称して行わされているペットボトルのリサイクルです。ペットボトルなどのプラスチックは石油からできています。そのために「貴重な資源を大切に、地球に優しく」という甘い言葉によって、私たちは毎日のように、ペットボトルの分別を強制的に行わされ、水で洗わされています。

では、本当にペットボトルのリサイクルは地球に優しいのでしょうか？そして本当にペットボトルのリサイクルは行われているのでしょうか？

ペットボトルのリサイクルというと、おそらく多くの人のイメージとしては、「ペットボトルを二度細かくして、溶かしたり、もう一回ペットボトルを作ったり、もしくはペットボトルから服や工業製品を作る材料にしている」というものでしょう。しかし実は、ペットボトルをリサイクルをすることは、新しい石油から直接、新しいペットボトルを作るよりも、ずっと多くの石油を使わなければなりません。つまりペットボトルをリサイクルしたほうが、むしろコスト的に高いわけです。

中部大学の武田邦彦教授の調べによれば、石油からペットボトル1個作るときのコストは約7.4円、しかしリサイクルすると、輸送費用や集荷費用だけで26円もかかります。つまり輸送と集荷だけでも、リサイクルペットボトルの価格は、新品ペットボトルの価格の約3倍もかかるわけです。

これは一体どういったことでしょうか？例えばバケツの中に水を入れて、そこに赤インクを垂らしたとします。そして「赤いインクは資源だから、赤いインクだけ取り出したい」と考えても、それは無駄なことです。なぜなら赤いインクだけを取り出そうとすれば、かえって多くの費用や労力がかかり、とても困難だからです。無駄な労力とコストをかけて、赤インクだけをバケツの水から取り戻すくらいならば、むしろ新しく赤インクを作ったほうが、ずっと環境にも良く、地球にも優しいわけです。

これとまったく同様なことがペットボトルにも言えるわけです。つまりペットボトルをリサイクルして、多くの石油、労力、お金をかけずに、数千年分、もしくは数万年分はある石油から、新しいペットボトルを作ったほうが、

よっぽど本当のエコになるわけです。なぜなら使い終わったペットボトルは、実は貴重な資源ではなく単なるゴミだからです。

しかも石油製品は良く燃えるために、燃やしてしまうのが一番良いのです。実は湿気の含んだ「可燃ゴミ」だけでは、実はなかなか燃えないために、わざわざ石油をまぜて「可燃ゴミ」を燃やしているのが現状です。

「プラスチックを燃やすとダイオキシンの出る」という話もあり、日本では一時期、ダイオキシンが騒がれました。しかし実はダイオキシンは塩よりも毒性が低いことも分かっております。醤油だつて一気飲みしたら死にますが、科学的に明らかになったこととして、ダイオキシンの毒性は塩以下だったのです。にも関わらず日本では、政府やマスコミが「ダイオキシンという猛毒が」と大騒ぎして、ほとんどの地方自治体が莫大な税金を投じて、800度以上の焼却施設を持っております。良い焼却施設を持っているのですから、ペットボトルは可燃ゴミとして、燃やしたほうが良いのです。

また武田邦彦先生のお話によれば、リサイクル企業の倒産も相次いでいるそうです。そのためにペットボトルのリサイクルを行っているはずの企業でも、現実にはペットボトルのリサイクルを行わずに、集められたペットボトルを隠れて焼却処分しているところもあるようです。「環境のために」と正義感に燃えて、リサイクル企業に就職した若者たちの多くが、ペットボトルのリサイクルの現実を知って、失望していることもあるようです。

これまで日本の小学校では、頻繁に「エコキャップ運動」というものが行われてきました。この運動は、ペットボトルはリサイクルに回して、残ったキャップをたくさん集めて途上国に送る、という運動です。しかしこれも調べて見れば簡単に分かりますが、むしろキャップの送料のほうが高くつき、その送料を途上国の人たちにあげたほうが、はるかに喜ばれるのです。

いろいろなことを述べてきましたが、たとえ暑い夏が来ようとも、地球は温暖化しておりません。温暖化とCO<sub>2</sub>が関係しているのかいないのか、様々な議論がされておりますが、地球が温暖化していない以上、地球温暖化を

理由に、CO2の削減を目的に、「ワクチン接種で人類の人口を減らすべきである」と考えることは、明らかに間違っていると言えるでしょう。

## デープ・ステートは軍産複合体

では、「地球は成長の限界に達しており、人類の人口が増え過ぎているから減らすべきである」と考えている者たちというのは、果たしてどこの誰なのでしょうか？これを考えないと、真実は何も見えてきません。

日本でのマスコミ報道では、トランプ大統領は悪者にされており、しかしそのトランプ大統領が、アメリカの大手マスコミに対して、「フェイクニュース」と述べている事実を見て、そしてこれまで本書が述べてきたことを考えれば、いったい誰が本当の悪者で、誰が本当は正義の側に立っているのか、それが自ずとご理解いただけるはずです。

そしてそのトランプ大統領は度々、公の場で「デープ・ステート（陰の政府）」という言葉を使って、アメリカを始めとする世界を騒がせています。またトランプ大統領は『ツイッター』で、「I AM DRAGGING THE SWAMP！（私は泥を排水している！）」とも述べています。単純に言ってトランプは、アメリカの「陰の政府」と戦っているのです。

「アメリカ」と一言で言っても、いろいろなアメリカ人がおり、様々な人種や民族がおり、そして様々な政治思想があります。そしてこれまでアメリカでは、6人もの大統領の暗殺、あるいは暗殺未遂事件が起きており、誰の目から見てもアメリカには多くの問題があることは明らかです。最近では日本のキャスターの木村太郎氏なども、「デープ・ステート」に触れておりますが、しかしフェイクニュースに染まり切る日本の大手マスコミが、「デープ・ステート」について、きちんと取り上げたことはありません。

しかし「デイープ・ステートを見ずにアメリカは分からない、アメリカが分からなければ世界は見えない、世界が見えなければコロナの闇も見えはしない」ということが確かに言えるのです。

では、トランプが述べて、そしてトランプが戦っている「デイープ・ステート（陰の政府）」とは、果たして何でしょうか？第34代アメリカ大統領ドワイト・アイゼンハワーは、1961年の退任演説の中で次のように述べました。

「我々は、政府に対して、軍産複合体による不当な影響力を排除しなければならない。

誤って与えられた権力がもたらす悲劇は存在し続けるでしょう」

つまりアイゼンハワー大統領は、「軍産複合体というアメリカ政府に対して、誤って得られた不当な影響力、権力が存在している」と述べたわけです。「軍産複合体」とは、戦争で利益を得ている軍産産業・武器商人を始めとした存在の総称のことです。つまり軍産複合体とは、軍産産業、建設会社、医療製薬会社、食品水道会社、マスキ・広告代理店などの超巨大な多国籍企業のことです。

たとえば1991年に湾岸戦争がありました。当時のイラクはクウェートという隣国と国境をめぐって争っていました。当時のアメリカ大統領。パ・ブッシュは、フセインに対して「我々アメリカはイラクとクウェートの国境問題に対して、何も発言する立場にはない」と伝えました。イラクのフセインは、米国からのこうした「クウェート侵攻のGOサイン」を受けて、クウェート侵攻を開始しました。するとブッシュは手の平を返して、「フセインはケツを蹴られるのさ！」と勇ましく語り、アメリカ国民の戦意を高揚させようとはしました。

しかし米国民は戦争に反対でした。米国民の多くが、「なぜ中東の領土問題で、米国が戦争しなければいけないんだ」と考えていたからです。そこで人々の前に現れたのが、世にも有名な「ナイラ」という一人の少女でした。彼女はクウェート人で、諸事情があつて下の名前しか明かせないと語りました。そして彼女は、イラク兵がいかに残虐で、クウェートの人々がどれほどヒドイ目に遭っているかを、涙ながらに語ったのです。

「クウェートに侵攻してきたイラク兵は武器を持たない市民に銃を乱射し、病院にまで侵入して赤ん坊を床に叩きつけて・・・」

世界中のマスコミが、何度もナイラの涙の会見を報道しました。そればかりか「フセインは石油を海にばら撒いた」として、波打ち際で石油まみれになった水鳥の映像まで報道されました。こうして世界中の人々が、「イラクのフセインという男は、ヒトラーのような狂った男だ」と騙されていきました。そしていつしか国際世論は「戦争賛成」に変えられ、湾岸戦争が始まりました。

しかしナイラは、たしかにクウェート人の少女ですが、ただの一度もクウェートに行ったことはなく、石油マネーでアメリカで優雅に暮らすスーパーセレブであったことが、後の調べで明らかになりました。また石油まみれの水鳥の映像も、ただの石油タンカー事故の無関係のものでした。

この「世紀の嘘泣き」のために、「戦争世論」が築き上げられて、湾岸戦争では2万から3万5千もの人間が命を落としました。しかしその一方で、軍需産業の利益は湾岸戦争をはさんだわずか二年だけで、80億ドルから400億ドルに跳ね上がりました。これは一ドル100円で計算すると8000億円から4兆円になったということです。ちなみに日本も湾岸戦争の際には、135億ドル、日本円で約1兆4000億円を支払い、軍産複合体を儲けさせています。ナイラはイスラム女性には必須なスカーフを被っていないにも関わらず、軍産複合体によるマスコミ誘導によって、世界中の人々がまんまと騙されてしまったわけです。

戦争は健康な人間を障害者に変えてしまい、町を一瞬で瓦礫の山と化し、人々の暮らしを原始時代にまで戻してしまう悲惨なものです。そして子ども、妻や夫、両親といった家族、あるいは友人などの愛する人々を奪い、生き残った人からは夢や希望まで奪ってしまうこともあります。今も年間に六千人から八千人もの米兵が自殺しており、これは約1時間に1人の割合です。

しかし軍産複合体からすると、「戦争」こそ最も利益となります。なぜなら武器が売れるだけでなく、新たな

油田を確保できるからです。そればかりか「復興支援」と称して、巨大建設会社が入るからです。さらにその国はその後、政府も、マスコミも、医療も、教育も、軍産複合体の思い通りの属国となります。

「ディープ・ステート」は「陰の政府」という意味ですが、彼らはけっしてアメリカの利益を考えているわけではなく、あくまでも自分たちの利益のみを考えている者たちです。このように「政治」というものは、国家の枠組みだけでとらえてはならないのです。なぜなら国家を超えた軍産複合体といった「多国籍企業レベル」でも政治は存在し、「経済レベル」での侵略も現実存在しているからです。

そして日本も経済レベルで侵略された悲しき属国だからであり、だから日本の政府、マスコミは今もおかしいわけです。

## 真珠湾攻撃に追い詰められた日本

日本の学校教育では、「先の大戦は日本の侵略戦争であり、日本がアジア諸国を侵略し尽くしていたから、正義の大国アメリカが日本と戦い、東京大空襲を行い、広島と長崎に核兵器を二発落した」と習います。NHKをはじめとするマスコミも、そういった論調でテレビ番組を制作し、報道しています。しかしそれは本当に正しいのでしょうか？政府の教育、マスコミの報道は、私たち日本人に本当に真実を伝えているのでしょうか？ここまで読み進めてこられた方ならば、もう大体お分かりのはずです。

かつて欧米列強諸国は、白人たちによる人種差別意識によって、500年もの長きに渡ってアフリカの黒人たちを奴隷にし、アジア諸国に対しては植民地支配し、殺戮と略奪と強姦を繰り返してきました。オーストラリア・タスマニア島の人々は、ハンティングで、つまり遊び感覚でもって4000人が絶滅させられてしまいました。

実は先の大戦というのは、欧米列強からアジア諸国を植民地から解放し、白人優位の人種差別政策を打ち砕くと

ともに、我が国の正当な自衛権の行使としてなされたものでした。政府として今一步力及ばず、原爆を使用したアメリカに敗れはしたものの、アジアの同胞を解放するための戦いでもありました。

その証拠として、タイのククリット・プラモート首相は、先の大戦についてこう述べています。

「日本のお陰でアジアの諸国はすべて独立した。日本というお母さんは難産して母体をそこなったが、生まれた子どもはすくすくと育っている。今日、東南アジア諸国民がアメリカやイギリスと対等に話ができるのは一体誰のお陰であるのか。

それは『身を殺して仁をなした』日本というお母さんがあつた為である。12月8日（開戦）は我々に、この重大な思想を示してくれたお母さんが一身を賭して重大決意された日である。更に8月15日（終戦）は我々の大切なお母さんが病の床に伏した日である。我々はこの二つの日を忘れてはならない。」

また、パラオという国は大戦後、欧米諸国から独立を果たすと日の丸をモチーフに国旗を作り、しかし「日本と同じだと失礼」という意味から、あえて日の丸を左に少しずらしております。かつて日本がパラオで戸籍制度を作った際、命の恩人であり、尊敬する日本人の苗字を取って、自分の名前にした。パラオの人々さえ大勢いたのです。あるいはインドネシアも欧米諸国から独立して、その宣言をする際、西暦を使用せずに、あえて日本の暦である皇紀を使用して独立宣言をしました。皇紀とは、初代神武天皇が、即位された紀元前660年を元年とする日本独自の暦のことです。

先の大戦は日本による侵略ではなく、実のところ「ディープステート・軍産複合体」による日本への侵略であったのです。当時のアメリカ大統領フランクリン・ルーズベルトは、「ディープステート」側の大統領でした。すでに彼は大統領を二期も務めていて、その期間に何度も戦争を繰り返していたことから、「戦争屋」などとあだ名されてきました。そのために彼は、3度目の大統領選挙で当選するにあたって、「私は戦争は行わない」と、公約を掲げていました。しかしルーズベルト大統領の娘婿の著書『操られたルーズベルト』には、ルーズベルトのこんな

言葉が記されております。「私は宣戦布告はしない。私は戦争を作るのだ。」と。

また当時のスチムソン陸軍長官の日記にも、ルーズベルト大統領が、会議において、次のように述べたことが記されております。

「日本軍に最初の一発を発射させることは確かに危険なことだ。しかしアメリカ国民から戦争の完全な支持を得るためには、日本軍に攻撃させて、誰がどう考えても、どちらが侵略者であるのか、それを一目瞭然にさせたほうが良い」

一方で、東条英機を始めとする日本の政治家の多くが、戦争を避けるための活動を行っていました。その一方でアメリカは戦争開始に仕向けるために、あえて日本に「ハル・ノート」といった無理難題を押し付けて、日本を追い込んでいきました。「ハル・ノート」がどんな無理難題かというと、それは簡単に言って、「明治維新前の江戸時代の頃の日本に戻れ」と言っているようなものであり、言葉を変えればそれは、「有色人種の分際で、我々白人たちと同等に肩を並べるな」と言っているようなものでした。

しかしもしも日本が江戸時代の頃に戻れば、日本も他のアジア諸国と同様に、植民地にされ、虐殺され、奴隷国にされていたことでしょう。戦後に行われた「東京裁判」において、判事を務められたラダ・ビノード・パールは言います。

「ハル・ノートのような無理難題を突きつけられたら、日本ではなくとも、たとえモナコやルクセンブルクのような小さな国であっても、戦争をせざるをえないだろう」

ですからたしかに窮地に追い込まれた日本は、「窮鼠猫を噛む」ではありませんが、1941年12月8日、ハワイに真珠湾奇襲攻撃を行いました。そして真珠湾攻撃から数時間後、何度も国民に「戦争はしない」と演説して大統領になったルーズベルトは、アメリカ国民に向かって、こう演説したのです。「リメンバー・パールハーバー（真珠湾を忘れるな）」と。

あれほど戦争に反対していたアメリカ国民でしたが、しかし「リメンバー・パールハーバー」という叫びにも近い声が、アメリカ全土を覆いつくし、日本に対する憎悪が広がり、こうして日本とアメリカの間に、戦争が開始されてしまったのです。

## デイープ・ステートの本質はマフィア

実はアメリカには、過去これまでの間に、「リメンバー〇〇」と述べて、意図的に戦争を行ってきた疑惑が幾つもあります。

たとえば1836年、アメリカはメキシコ領だったテキサスに、わざわざ「アラモの砦」を築きました。敵地にこんな砦を建てれば、メキシコが襲ってくるのは誰もが予想できました。しかもわずか200名のアメリカ兵で、その砦を守りました。案の定、その200人のアメリカ兵は、メキシコ軍の攻撃を受けて全滅しました。

すると当時のアメリカ政府は「リメンバー アラモの砦(アラモの砦を忘れるな)」という言葉合言葉に、国民の戦意を鼓舞して、メキシコとの戦争を正当化して、大衆と世論を上手く誘導して戦争を起こしました。この戦争のおかげでアメリカはテキサス、ニューメキシコ、カリフォルニアなどをメキシコから奪い取りました。

あるいは1898年、アメリカ戦艦メーン号は、政府の命令で当時スペイン領だったキューバ沖に向かわされました。そしてこの船は何者かに爆破され、沈没させられ、260名の犠牲者を出しました。すると当時のアメリカ政府は「リメンバー メーン号(メーン号を忘れるな)」と新聞を通じて、スペインとの戦争を正当化して、世論を誘導して開戦しました。この戦争のおかげでアメリカは、キューバ、プエルトリコ、グアム、ミッドウエー、ウエーク、フィリピンといった植民地をスペインから奪い取りました。

1964年、ベトナムのトンキン湾にて、アメリカ軍艦がベトナム軍から二発のミサイルをに発射される事件が

ありました。この事件をキッカケに、アメリカのジョンソン大統領は北ベトナムに対して爆撃を開始して、ベトナム戦争が開始されました。しかし1971年、『ニューヨーク・タイムズ』の記者が、機密文書『ペンタゴン・ペーパーズ』を入手します。この文書には、トンキン湾事件もアメリカ側が仕組んだ自作自演であった事実が記されていました。1995年には当時の国防長官であったロバート・マクナマラも、「北ベトナム軍による攻撃はなかった」と告白しています。

ベトナム戦争中、カナダのピアソン首相は、アメリカが行った北ベトナムへの爆撃を間接的に反対する演説を行いました。この演説を受けて、アメリカのジョンソン大統領は、すぐにピアソン首相に連絡して、翌日の昼食に招きました。しかし昼食中、ジョンソン大統領は一言も口を開きません。たまりかねたピアソン首相が、「私の演説はどうでしたか？」と聞くと、ジョンソン大統領はピアソン首相の腕を掴んで、テラスに連れ出し、コートの襟を掴み、もう一方の手を天に向けて振りあげ、約1時間にも渡って吊るし上げるといふ驚くべき事件が発生しました。まさにやっていることはマフィアです。

そうです。ページの都合上、詳しくはご説明できませんが、「デープ・ステート」というのは、まさに薬をも利用するマフィアのような者たちなのです。

## 「WGIP」ー入れ替えられた正義と悪

すでに述べましたように、「デープ・ステート」というのは、別にアメリカの利益を考えているのではなく、あくまでも自分たちの利益のみを考えております。そのために戦争によって、米兵やその他の国の人々が何人死のうと、大勢の米兵が薬漬けになって自殺しようとも、まったく関係ないわけです。おそらく米兵を最も殺しているのは、向精神薬でしょう。

ですからベトナム戦争は「トンキン事件」という自作自演が始まり、多くの人間の生命が失われましたが、第二次世界大戦は「真珠湾奇襲攻撃」という自作他演が始まり、やはり多くの人間の生命が失われました。

その長い戦争の中で、民間人への軍事攻撃は国際軍事法で禁じられているのに、80万人もの日本の民間人が殺され、1945年8月15日に終戦を迎えました。そして1947年から始まった「極東軍事裁判」、通称「東京裁判」によって、どちらが侵略者で、どちらが防衛者であるかを見事に入れ替える政治的宣伝活動が行われたわけです。さらには中国共産党も、この「東京裁判」に乗っかって、南京大虐殺という政治的宣伝活動を行いました。

ウオー・ギルト・インフォメーション・プログラム

また、この東京裁判には、「W・G・I・P」を決定付ける効果もありました。「W・G・I・P」とは、「東京裁判」と戦後の教育によって、日本人の心の中に、「日本は悪い国、日本人の先祖は悪い侵略者」という思想を徹底的に叩きこみ、罪悪感を植え付けていく「洗脳プログラム」のことです。

人間が祖国に対する誇りを失えば、必然的にその国の民は、自分たちの祖国の未来については、何も真剣には考えなくなります。祖国の未来を真剣に考えなくなれば、「政治」から完全に切り離すことができます。こうして日本人の関心を、とにかく「政治以外」のものに向かわせることで、ますます日本人が「実はまだ軍産複合体による経済的な占領期間にある」ということに気がつかせなくしたわけです。

「東京裁判」、戦後の教育、マスコミの報道によって、今も私たち日本国民は、「日本は侵略の暴挙を犯した」「日本は国際的な犯罪を犯した」などと教えられているわけですが、しかしパール判事は、次のように述べています。

「日本の子弟が、歪められた罪悪感を背負って卑屈、頹廢に流されて行くのをわたくしは平然と見過ごすわけにはいかない。」

はつきり言って、日本政府とマスコミは嘘つきです。だから癌治療も、精神医学にも多くの問題があり、なおかつ「コロナの真実」も、国民には伝えられないわけです。なぜならすでに述べましたように、「デイープ・ステート」に侵略された国家は、属国と成り果て、政府も、マスコミも、医療も、教育も、すべて「デイープ・ステート」

の思い通りに動かされてしまうからです。

## 通貨発行権の金融詐欺

では、「ディープ・ステート」とも、「軍産複合体」とも呼ばれる者たちと言うのは、果たして何者なのでしょうか？  
うか？彼らは私たちの暮らしに、今現在、具体的にどのような影響を及ぼしているのでしょうか？

彼らの私たちの暮らしに対する影響、それは暮らしの根本から、全般にまで関わります。なぜならそれはお金の問題だからです。実は円を刷っている『日本銀行』、ドルを刷っている『FRB』、ユーロを刷っている『ECB』、こうした中央銀行というのは民間の株式会社です。『日銀』は特殊法人（認可法人）という体裁を取っておりますが、しかし株式市場『ジャスダック』にコード銘柄「8301」で上場している会社であり、株主が誰であるのかを明らかにしていません。

では、『日銀』や『FRB』や『ECB』といった中央銀行の上に君臨して、世界中のお金の蛇口を握っているのが誰かと言えば、スイスのバーゼルにある『国際決済銀行・BIS』です。そしてこの『BIS』も、ホームベースで調べて、国際電話をかけてみれば分かりますが、スイス政府や国連などもまったく関係のない巨大な株式会社であり、これを営んでいるのがユダヤ人を自称しているロスチャイルド家なわけです。

「ロスチャイルド」、実はこの一族こそ、石油王として名高い「ロックフェラー一族」、あるいは投資家のジョージ・ソロス、『マイクロソフト』創設者ビル・ゲイツなどをも上回る資産を持つ国際銀行家です。実は日本も『日露戦争』の時に、ロスチャイルド一族から、多額なお金を借りた過去があります。「日露戦争」の頃、日本も、ロシアも、互いに戦争の費用に苦しんでいました。そこで当時の『日本銀行』の副総裁であった高橋是清は、日本国債をジェイコブ・シフというユダヤ人を自称している国際銀行家に引き受けてもらいました。

ジェイコブ・シフはバロン・エトワール・ロスチャイルドの盟友であり、一方でロスチャイルドはロシアにお金を貸しました。争っている両者にお金を貸すことで、戦争の勝敗に関係なく第三者として利益を出す、それが彼らのやり方なのです。

日本は1904年から1906年にかけて、平均6・6%にもなる高い利子で、合計6度の外債発行を行い、総額1万3千ポンドもの戦費を国際銀行家ジェイコブ・シフから借りました。これは国家予算の5倍から6倍に相当する金額です。ちなみに日本の21世紀に入ってから長期国債の金利は、わずか0・1%程度ですから、この「6・6%」という数字が、いかに高いか分かるはずですよ。

日本の津島壽一<sup>じゅいちゆう</sup>財務官が、「日露戦争」で借りたお金の返済の件で、ロスチャイルド家に交渉に行く際、後に総理大臣となる若かりし頃の福田赳夫氏が、同行していました。最初は和やかに食事を取り、交渉をしていましたが、話が「金利の話」になりました。「ロスチャイルド側に有利な戦前の金利」か、それとも「日本側に有利な戦後の金利」か、ということで金利の交渉は平行線になりました。戦争によってインフレになり、お金の価値が変わっていったからです。

そこで、ロスチャイルドが「チリン」とベルを鳴らすと、部屋を取り囲むように覆っていたカーテンが開いて、武器を持った屈強な男たちが現れ、津島財務官をはじめ福田赳夫氏らを威圧したそうです。「ただでは帰さないぞ」という脅しです。福田氏はこの時のことについて、「この部屋から生きて帰れるのかなと思った」と感じたそうです。

福田氏は、この出来事を『日本経済新聞』に語りました。そして当時のその載記事は、『私の履歴書』という書籍にまとめられました。この書籍の132ページにはこう書かれています。

津島財務官のお供をして、パリのシャンゼリゼ通りからちよつと横に入ったところにある邸宅に入ってしまった。高橋さんの親書を見せると「まだご健在か」と懐かしがって歓待してくれた。ところが食事を終えて用談に入った

途端、ロスチャイルド氏の形相が一変した。「額面金額での返済というのは、われわれの希望にこたえるものではない」というわけで、何度かやりとりが続いた。しばらくすると、彼は机の上に置いてあるタイプライターのようなものに手を触れた。何か日本政府あての返事でも打つのかと思っていたところ、突然部屋の四方の壁がスツと開き、こん棒を握りしめたプロレスラーのような男たちがどかどか入ってきて、われわれの後に立った。ロスチャイルド氏は「私は高橋さんに不満を持っているから、そのことを間違いなく伝えてもらいたい」といって、その場は決着したが、さすがに男たちが入ってきたときは驚いた。再びこの部屋を出ることが出来るかなとも思ったぐらいだ。

同様のことは、福田赳夫氏の著書『回顧九十年』（岩波書店）25ページにもあります。

利付き英貨公債二千三百万ポンドの借り換えの問題があり、いろいろな細かい仕事を手伝わされた。このカネは日露戦争後の財源調達のための借金で、高橋是清さんが特派財政委員、いわば財務大使としてイギリスやヨーロッパの各国を回って歩いた際に、財閥バロン・エトワール・ロスチャイルド氏から借りたものである。借金はこの他にも

《中略》

初めは、高橋さんの親書を見せると「まだご健在か」と懐かしがって、下にも置かぬ大歓待だ。ところが、食事を終えたあと本題に入り、「額面で返済する。これが最終回答である」という高橋蔵相の指令を伝えた瞬間、ロスチャイルド氏は顔色を変えた。ロスチャイルド氏は猛烈な勢いで反論する。私はこの部屋から生きて帰れるのかな、とも思ったくらいだ。

こうして日本側は交渉に敗れて、「ロスチャイルド側に有利な金利」で借金返済をすることになりました。そのためこの借金が完済したのは、なんと82年も経過した1986年のことです。実はこの借金が、後にルーズベ

ルト米大統領による「自作他演」によって引きずり込まれる第二次世界大戦、そして敗戦に多大な影響を及ぼしました。

『日銀』や『FRB』の上に『BIS』が君臨し、存在しているのはファクトです。この国産的な民間銀行をロスチャイルド一族が経営しているのもファクトです。そのためにロスチャイルド一族が、莫大な権力を持っているのもファクトです。しかし世界中の一流大学で使用されている国際政治の教科書に、「ロスチャイルド」の名前が無いのもまたファクトです。しかしロスチャイルド一族の存在は、国際政治を語るうえでは無視できない存在であることも、やはりファクトと言えるでしょう。それはつまり、いかに世界中で行われている国際政治学に問題があるか、ということなのです。

数円、もしくは数セントの紙キレを、一万円札や100ドル札に変えることのできる力、それが「通貨を発行する権利」、「通貨発行権」なのですが、なんとその「絶大な権力」が実は日本政府や米政府にはないわけです。そして『日銀』などの民間中央銀行の上に、「中央銀行の中央銀行」として『BIS』が君臨しており、この国際銀行が通貨の量をコントロールしており、そしてロスチャイルド一族がこの銀行を経営しているわけです。

## アメリカにおける経済的戦い

今、世界で最も多くの資産を持っているのはロスチャイルド家であり、その資産額は公表されていないので、どれだけ持っているのか定かではありません。いろいろな意見が飛び交っておりますが、あくまでも推定の域を超えていないのです。

だから第3代アメリカ大統領トーマス・ジェファークソンはこう述べていました。

「銀行は軍隊よりも危険である。もしも民間銀行に通貨発行を奪われたら、我々の子孫はホームレスになるまで銀行に利益を吸い上げられてしまうだろう。」

アメリカでは6人もの大統領が、暗殺未遂および暗殺に遭っているわけですが、その6人の共通点は「銀行と対

決した」ということです。アメリカで初めて暗殺未遂に遭った、第7代大統領アンドリュー・ジャクソンは次のように言いました。

「銀行は私を殺したいだろうが、私こそ銀行を殺す。

お前たちは腹黒い盗人の巣窟だ。

私たちはお前たちを一掃する。永遠なる神の力によって、お前たちを必ず一掃する」

アメリカ大統領の中でも銀行に殺された、あるいは殺されかけた大統領は大勢いましたが、しかし逆に銀行を閉鎖に追い込んで殺した大統領は、このアンドリュー・ジャクソン1人だけです。今、トランプ大統領には、「荒くれ者の大統領」というイメージがありますが、おそらくジャクソン大統領は歴代アメリカ大統領の中でも、「随一の荒くれ大統領」と言えるでしょう。なぜなら彼はその生涯の中で、何度も決闘を行い、しかもその内の一回は、相手から銃弾を胸に食らったからです。その弾丸が心臓近くであったために、取り出すことができず、後遺症に苦しみながらも、弾丸を心臓近くに残したまま、彼は残りの人生を過ごしました。ジャクソン大統領は死の直前も、自身の大統領としての功績を尋ねられて、「通貨発行権を守ったこと」と述べています。

歴史の教科書には、歴代のアメリカ大統領たちが何人も暗殺、あるいは暗殺未遂に遭ってきたことが書かれています。しかしどの歴史書にも、その暗殺理由については何も書いていません。かつてのアメリカでは、各銀行がそれぞれ独自の「信用」で「通貨」を発行しており、「中央銀行」は存在しませんでした。そのためにかつてのアメリカには、「統一通貨」もありませんでした。

そのためにかつてアメリカでは、政府が「通貨発行権」を守るか、それとも銀行が「通貨発行権」を奪うか、という激しい経済戦争が繰り広げられてきました。

第16代大統領エイブラハム・リンカーンはこう言っていました。

「政府は自分で必要な費用をまかない、一般国民の消費に必要なすべての通貨を流通させるべきである。

通貨を創造し、発行する特典は、政府のたつた一つの特権であるばかりでなく、政府の最大の建設的な機会なのである。

このシステムを取り入れることによって、納税者（国民）は計り知れないほどの金額の利子を節約することができる。

それでこそお金が人間の主人ではなくなり、人間が人間らしい生活を送るために、お金が召使になってくれるのである」

この発言から約1ヵ月後、リンカーンは「グリーンバックス」という政府紙幣を発行して、そして暗殺されました。どうやらリンカーン大統領は、政府紙幣を発行することが、自身の命を縮めることに繋がると理解していたようです。しかし彼は、アメリカ国民の幸せを考えて、銀行家たちと対決すべく、勇気ある発言をして、そして実際に「政府紙幣」を発行することで、暗殺されてしまったわけです。

それから約50年後の1913年に中央銀行の『FRB』が創設されて、アメリカ政府は「通貨発行権」を銀行家たちに奪われてしまいました。当時の第28代アメリカ大統領ウッドロー・ウィルソンは晩年、こう発言していたそうです。

「私はうっかりして、自分の国を滅ぼしてしまいました。

大きな産業国家は、その国自身のクレジットシステムによって管理されています。（民間中央銀行FRBが設立されたことによって）私たちのクレジットシステムは一点に集結しました。

したがって国家の成長と私たちのすべての活動は、ほんのわずかな人たちの手の中に有ります。

（通貨発行権が奪われたこと）私たちは文明開化した世界においての支配された政治、ほとんど完全に管理された最悪の統治の国に陥ったのです」

1913年、アメリカ合衆国は、国際銀行家たちによる経済侵略を受けてしまいました。しかし勇気ある大統領

がいました。ジョン・F・ケネディです。「通貨発行権」を奪われてから約50年、1963年6月4日、ケネディ大統領は、国際銀行家たちから「通貨発行権」を取り戻し、アメリカの金融システムを再建しようと思いました。彼は「大統領令11110」を発令して、5ドルの「政府紙幣」を発行したのです。するとその約5ヶ月後、彼はダラスにて暗殺に遭い、彼が発行した5ドルの「政府紙幣」も回収されてしまいました。

「自動車王」と呼ばれたヘンリー・フォードという方は、こう述べていました。

「この国の人々の銀行や金融への不理解はもうたくさんだ。

もし金融の仕組みを理解したら、明日の朝までに革命が起こるだろう」

あるいは今から百年ほど昔の1930年、経済学者ジョン・ケインズは、次のようなことを述べていました。

「およそ100年後には、ほとんどの経済的問題は解決されてしまい、人々の悩みは余暇をどのように使うか、ということになるだろう。（『孫の世代の経済的可能性』）」

このケインズの言葉からお分かりのように、一流の経済学者たちが、国際金融の闇を知らなかったわけではなく、後には詳しく述べますが、特にケインズは確実に「金融詐欺」に気づいていました。ですからヘンリー・フォードの言葉にもあるように、もしも私たちが「金融の仕組み」をきちんと理解したら、明日の朝にでも革命が始まり、お金に苦しむ時代は終わりを迎えます。

ドナルド・トランプは大統領選挙に勝ち、ホワイトハウスに入ると、アンドリュー・ジャクソンの肖像画を飾りました。「私こそ銀行を殺す」と述べていたジャクソン大統領です。後に詳しく説明いたしますが、これが何を意味しているかお分かりになるはずですよ。

## 「陰謀論」とレットテルを貼ったCIA

こうした「ディープ・ステート」と呼ばれる「陰の政府」、さらには国際銀行家についての話を初めて知る方からすると、おそらくこう思われていることでしょう。「なんだか陰謀論や都市伝説みたいな話だな」と。しかしたしかに政治には表もあれば裏もあります。それはつまり「政治には陰からの謀はかりごとがある」ということです。もつとはっきり言えば、「政治には陰謀がある」ということです。

ユダヤ人ではじめてイギリス首相になったベンジャミン・デイズレーリは、次のように述べたそうです。

「世界は舞台裏を知らない人には想像もつかない人々によって支配されている」

また同じくユダヤ人であり、日本に「自作他演」で戦争を仕掛けたフランクリン・D・ルーズベルトも、こう述べたとされています。

「世界的な事件は偶然に起こることは決してない。

そうなるように前もって仕組まれていたと、私は、あなたに賭けてもよい」

これらの言葉が、本当にイギリス首相やアメリカ大統領から語られたのかどうか、それは定かではありません。しかし確かに国際銀行家たちというのは、アメリカを金融侵略すると共に、わざわざそのアメリカのCIA（中央情報局）を使って、世の中に「陰謀論」という言葉を流布してきたのです。

その証拠として、アメリカの歴史学者ランス・デヘイヴンスミスが2013年に記した『アメリカの陰謀論 (Conspiracy Theory in America)』という書物があります。この書物にはこうあります。

「米国人の多くは、陰謀論というレットテルが1967年に始められた中央情報局 (CIA) のプロパガンダ計画によって侮蔑的な言葉として広められたと知ったら、ショックを受けるだろう。」

つまりこの書物によれば、「陰謀論」という言葉が、アメリカの日常会話で自然に使われ、そして政治の舞台裏を語る人々が、「おかしな人」、「変な人」というレットテルを貼られ、不思議な目で見られるようになったのは、

1960年代以降のことであり、しかもそれはCIAの暗躍によるものである、というわけです。

では、なぜ彼ら国際銀行家は、わざわざCIAを使ってまで、「陰謀論」、もしくは「陰謀論者」という言葉を流布してきたのでしょうか？実は「ケネディ大統領暗殺事件」について、アメリカ国民の大半が、政府が発表している公式見解に強い疑いの思いを持ちました。なぜならケネディ大統領を撃つたとされる弾丸は、「マジック・ブレット（魔法の銃弾）」と呼ばれ、政府の発表通りに弾道を描いてみると、弾道が曲がってしまうからです。また、暗殺犯はオズワルドという人物と発表されていますが、しかし彼を犯人とするには不自然な点が多く、この情報を信用していないアメリカ人も数多くいました。

しかもこの暗殺犯とされていたオズワルドは、逮捕から2日後に、ダラス警察署の中でジャック・ルビーという男に撃たれて殺されてしまいました。そのためにオズワルドが裁判に立って、ケネディ暗殺事件の真相が語られることはありませんでした。しかもオズワルドを殺したジャック・ルビーも、その後、獄死します。そのために事件は迷宮入りします。実は「ケネディ大統領暗殺事件」から、わずか数年のうちに、事件の証人、事件と何らかの関わりがあった人たちが次々と自殺、事故、他殺によって16人も死んでいく、という前代未聞の現象が生じました。

しかも事故によって亡くなった人たちは皆、誰も加害者のいない単独事故であるために、「本当は誰かに殺害されて、事故死に見せかけられているのでは？」という憶測まで飛び交いました。こうしてアメリカ国民も、「ケネディ大統領暗殺事件には何か裏があるはずだ」と気づき始めました。するとCIAはテレビ、新聞、ラジオを使って、「陰謀論」という言葉を流行らせました。こうして政治の舞台裏を語る人々には、アメリカ人のみならず世界中の人々にも、「おかしな人」、「変な人」、「陰謀論者」というレッテルが貼られていっていききました。その結果、「ケネディが通貨発行権を取り戻そうとした」という肝心な真実は埋もれてきました。

しかししたしかに言えること、それは「陰の政府」が存在している以上、「政治には裏があり、陰からの謀があり、つまり陰謀がある」ということです。

はかりごと

そしてこうしたことを考えると、デイズレーリ首相とルーズベルト大統領が語ったとされる言葉、「世界は舞台裏を知らない人には想像もつかない人々によって支配されている」、「世界的な事件は偶然に起こることは決してない。そうなるように前もって仕組まれていたと、私は、あなたに賭けてもよい」、これらの二人の言葉を実際に彼らが語っていたという話にも、現実味を感じることでしよう。

## 仮面を剥がされたタルムード

さて、「コロナの闇」を追っていく中で、癌治療や精神医学といった「医学の闇」を述べ、それを踏まえて嘘の地球温暖化を理由に、ワクチンを接種させて人口を削減したい者たちがいる、彼らはトランプ大統領が「デーブ・ステート」と呼び、アイゼンハワー大統領が「軍産複合体」と呼んだ者たちであり、なおかつ世界中の「通貨発行権」を持つ国際銀行家であり、これまで多くのアメリカ大統領を暗殺してきた、ということを書いてまいりました。

それはまるで童話『不思議の国のアリス』のようです。『不思議の国のアリス』では、少女アリスが白ウサギを追っていくことで、不思議な世界へ迷い込みましたが、これから本小冊子は、さらに不思議な世界へと入っていきます。なぜならこの世界は、普通に教育を受けて、普通にマスコミの報道を見聞きして、普通に暮らしている人々が想像するよりも、はるかに邪悪に満ち溢れたものだったからです。

では、邪悪な彼らは、いったい何者なのでしょう？よく「ユダヤ陰謀論」と言われますが、彼らはユダヤ人ではありません。なぜならユダヤ人は加害者ではなく、被害者に他ならないからです。しかしこの「コロナ騒ぎ」の犯人が、ユダヤ人と完全に無関係であるかと言えば、そうでもありません。

『タイムズ紙』がまだ今のような「フェイク・ニュース」を行っていないなかった頃、編集長を務めていた人物に、

ヘンリー・ウイツカム・ステイードという方がいました。その彼がジャーナリストとして、こう述べたそうです。「学者も、政治家も、エコノミストも、ユダヤ問題を通過せぬ限り、ひとかどのものとはいえない」

今、世界には約1500万人のユダヤ人がいます。これは世界人口約77億人のうち、わずか0.2%でしかありません。この1%にも満たない数字は、統計学的に考えれば誤差であり、数字としては扱われません。しかしたつたわずか0.2%しかないユダヤ人たちが、ノーベル賞の受賞率では約20%、数学のフィールズ賞では約30%、チェスの世界チャンピオンでは約50%と、脅威的な数字を見せます。彼らユダヤ人は、経済学ではマルクス、精神医学ではフロイト、映画ハリウッドではスピルバーグ、物理学ではアインシュタイン、ネットでは『Google』のラリー・ペイジや『Facebook』のマーク・ザッカーバーグなど、実に様々な分野で活躍しております。ちなみにキリスト教のイエスも、あるいはキリスト教の初期の頃に集まってきたイエスの弟子たちも皆、ユダヤ人です。これを考えても、「わずか0.2%しかないユダヤ人であっても、けっして無視することができない」という意味がご理解いただけるはずです。

ですからユダヤ人は、あくまでも被害者ですが、「ユダヤ」を考えずして、アメリカも、世界も、コロナも見えないために、「ユダヤ」について触れてみたいと思います。

今から約三千数百年前、エジプトで奴隷にされていたユダヤ人たちは、モーセによって解放され、長い旅の末に現在のイスラエルの地に辿り着きました。この旅の中のモーセの教えが、ユダヤ教という宗教となりました。

そしてこのユダヤ教徒の中から、イエスという人が生まれて、1世紀にキリスト教を興したわけです。話が前後しますが、それからさかのぼること数百年前の紀元前6世紀頃、ユダヤ人たちは捕えられて、バビロニアの首都バビロンへと連れ去られてしまいました。これを「バビロン捕囚」と言います。この時より、一部のユダヤ人たちはモーセの教えを捨てて、代わりにバビロニアの宗教、思想、商法を獲得しました。

それは「ユダヤ人がユダヤ教徒を捨てて、ユダヤ人ではなくなった」ということです。

そして元ユダヤ人であった彼らは、そのバビロニアの思想を口伝で受け継いできました。さらに「バビロン捕囚」から約千年後の5世紀末になると、彼ら元ユダヤ人は、そのバビロニア思想を18冊の書物として完成させます。それが『バビロニア・タルムード』という書籍です。そしてこの「バビロン捕囚」から作つた独自の教えが、はっきり言つて何とも悪魔的なのです。

それを証明する人物がマルチン・ルターという方です。16世紀になると、キリスト教の宗教改革者のマルチン・ルターという方が現れて、彼はキリスト教カトリック教会と対決して、「プロテスタント」というキリスト教の宗派を作りました。そのカトリックとの戦いの中で、ルターは『新約聖書』をドイツ語に翻訳しようと、ヘブライ語を勉強し直したのですが、その際、彼は『タルムード』を紐解いてみました。するとルターは絶句したのです。なぜならモーセの教え『旧約聖書』では、「偽つてはならない、盗んではならない、殺してはならない」と教えられているというのに、ユダヤ教の教えと考えられていた『タルムード』には、こう記されております。

「我々は『タルムード』が、モーセの律法書に対して絶対的優越性を有することを認むるものなり。

『タルムード』の決定は、生ける神の言葉である。

『汝殺すなかれ』との掟は、『イスラエル人を殺すなかれ』、との意なり。ゴイ(非ユダヤ人)、ノアの子等、異教徒はイスラエル人にあらず。ゴイが、ゴイもしくはユダヤ人を殺した場合は責めを負わねばならぬが、ユダヤ人がゴイを殺すも責めは負わず。」

つまりユダヤ教はモーセから始まったというのに、そのモーセの教えの上に、『タルムード』というまったく別な悪意的な教えを置いてしまったわけです。神の教えの上に悪魔的な教えを置いてしまったわけです。

そしてその『タルムード』には、「ユダヤ人のみが人間であり、ユダヤ人以外はゴイであり、ゴイには偽るべきであり、盗むべきであり、殺すべきである」と、「積極的に悪を成せ」と書かれていました。「ゴイ」とは「家畜」という意味です。複数形になると「ゴイム」と言います。

仏教では、植物から動物、あらゆる民族や人種まで、生きとし生ける者すべてが尊い存在であり、すべての人に悟りの可能性、つまり仏と同じ性質「仏性」があると説いています。すなわち仏教では、「生ける者すべてに仏性があり、皆が尊い存在である」と説いているわけであり、それこそ真理です。ですからこの『タルムード』が説くこの「家畜思想」は、明らかに真理に反した悪魔的な考え方なわけです。

300冊以上の小冊子を書いたドイツの英雄マルチン・ルターですが、彼は人生最後の小冊子として、『ユダヤ人と彼らの嘘』を書き、彼は『タルムード』の持つ「家畜思想」を暴きました。

時代的な制約があるために、あのルターでさえも、「ユダヤ人が加害者」と考えていたようですが、真実は「ユダヤ人は被害者」です。なぜならユダヤ人を自称する者たちが、ユダヤ教徒を利用して、ユダヤ人に罪をなすりつけて来たからです。こうしたことを踏まえて、ルター人生最後の小冊子の一文をご紹介します。

「私はもうこれ以上、ユダヤ人のことも、ユダヤ人に反対することも書かないと決心していました。

しかしこの哀れで邪悪な連中が、いつまでも我々キリスト教徒に打ち勝とうとすることを止めないので、ユダヤ人の企てによつてもたらされる被害に備えて、私もユダヤ人に抗議する人々の隊列に加わることを決意しました。ゆえに私はこの小冊子の出版を認め、そしてキリスト教徒たちにユダヤ人に対する防備を固めるよう警告いたします。く中略く

『少々、私は言いすぎではないか』と思う人がいるかもしれませんが。しかし言いすぎどころか、私はあまりにもわずかしか言っていないのです。というのは、彼らがいかに我々ゴイム（家畜たち）を、彼らの著作のなかで蔑み呪い、そして自分たちの学校や礼拝の場で、我々に災いが降りかかることをどれほど望んでいるか、私はよく理解しているからです。彼らは、高利貸しによつて我々の金をかすめ盗り、可能な場所ではどこでも、我々をあらゆる種類の策略にかけるのです。」

「彼らは高利貸しによつて我々の金をかすめ盗り」というこのルターの言葉は、トーマス・ジェファーンソンの「銀

行は軍隊よりも危険である」という言葉に共通するものがあります。それではここで、非ユダヤ人を家畜と考える『タルムード』の一部を、抜粋してみたいと思います。

「ユダヤ王は真の世界の法王、世界にまたがる教会の総大司教となる。

世界はただイスラエル人のためにのみ創造されたるなり。

神は言い給う、『我は預言者を畜獣に過ぎない者たちの為に遣わしたのではなく、人間なるイスラエル人の為に遣わしたるなり』と。

すべての民を喰い尽くし、すべての民より掠奪(りやくだつ)することは、彼らすべてが我らの権力下に置かれる時に始まるべし。

神はユダヤ人にすべての方法を用いて、詐欺、高利貸、窃盗によってキリスト教徒の財産を奪取することを命ずる。

我々はタルムードが、モーゼの律法書に対して絶対的優越性を有することを認むるものなり。

タルムードの決定は、生ける神の言葉である。

汝らは人類であるが、世界の他の国民は人類にあらずして獣類である。

『汝殺すなかれ』との掟は、「イスラエル人を殺すなかれ」との意なり。

ゴイ(非ユダヤ人)、ノアの子等、異教徒はイスラエル人にあらず。

ゴイが、ゴイもしくはユダヤ人を殺した場合は責めを負わねばならぬが、ユダヤ人がゴイを殺すも責めは負わず。

ゴイに金を貸す時は必ず高利を以てすべし。

ゴイに向つて誓いを立てた者は、盗賊であれ、税吏であれ、責任を取らなくてよい。

ゴイが我らの書物には、『何かゴイを害することが書いてあるのではないか?』と聞いてきたら、偽りの誓いを

立てなければならぬ。そして『そのようなことは誓って書いてない』と言わなければならぬ。

タルムードを学ぶゴイ、それを助けるユダヤ人はことごとく生かしておいてはならない。

流神者（非ユダヤ人）の血を流す者は、神に生贄を捧ぐるに等しきなり。」

まさに驚きの内容です。「世界はただイスラエル人の為にのみ創造され、ユダヤ王は真の世界の法王」、この一文だけでも恐ろしくなりますが、しかしすでに述べたように、ユダヤ人は加害者ではなく被害者です。

## ユダヤ人を自称する者たち

1489年、フランスの国王がキリスト教を「国家としての宗教」、つまり「国教」にするために、ユダヤ人たちにキリスト教への改宗を迫りました。もしもユダヤ人がこの要求を拒めば、フランスから追放され、家や土地などの不動産は捨てなければならなくなりました。するとコンスタンチノーブルにあるユダヤコミュニティから、フランスのマルセイユにあるユダヤコミュニティへ、一通の手紙が届きました。その手紙を書いたのは、ユダヤ教の総主教ウススという人物でした。ウススはユダヤの同胞に向けたこの手紙の中で、こんな恐ろしいことを述べていたと言われています。

「モーセに従う親しい同胞たちよ。

汝らの報告によるとフランス国王が、汝らにキリスト教に改宗せよと強制しているそうだが、やむを得ぬ、改宗せよ。

ただしモーセの律法は決して忘れては成らぬ。

彼らは汝らの財産を奪うとの事だが、されば汝らの子を商人に育て、将来はきつとキリスト教徒たちの財産を身ぐるみ巻き上げるがよい。

また、汝らは生命も危険にさらされているというが、それなら汝らの子どもらを医者や薬剤師に育てて、いずれ彼らの生命を奪うがよい。

ユダヤ教の神殿の破壊に対しては、子どもらをキリスト教の神父にし、やがてキリスト教会を破滅に導く事だ。その他、様々な圧迫が知らされているが、汝らの子どもらを弁護士や公証人にして、あらゆる問題に介入させねばならぬ。」

この「ウスの手紙」が本物なのかどうか、それは定かではありません。しかしこの手紙は、「汝、殺すなかれ」、「隣人について偽証してはならない」という『モーセの十戒』に違反するものであり、『タルムード』の家畜思想が垣間見えます。実際にヨーロッパでは、キリスト教に改宗したフリをする隠れユダヤ教徒が「マラーノ」と呼ばれて、キリスト教徒たちから迫害を受けてきました。「マラーノ」とは「豚」という意味です。そしてマルチン・ルターも、『ユダヤ人と彼らの嘘』の中で、次のように述べています。

「もし彼ら（ユダヤ人）が我々全員を殺戮する事ができるなら、彼らは喜んでそうするでしょう。」

事実、彼らの多く、特に外科医と医者であるとか称している者達は、キリスト教徒を殺害しているのです。彼らは一時間、あるいは1カ月で死をもたらしす毒を人々に与え、どのように薬を扱ったらよいのか熟達しているのです」

ウスの手紙が真実かどうか、それは定かではありません。しかしその手紙の内容は、ルターが人生最後に記した小冊子の内容と一致しているのは事実であり、また現在の医学の問題と酷似しているのも事実です。なぜならウスは手紙の中で、「キリスト教に改宗したフリをして、医者となって人々の命を奪え」と述べ、ルターは小冊子の中で、「医者と称している者たちは、治療と称してキリスト教徒を殺害している」と述べ、そして実際に、今現在の医学が、人々の命を救うフリをして、多くの命を奪っているからです。

しかしユダヤ人は加害者ではなく被害者です。つまり「ディープ・ステート」とも、「軍産複合体」とも、「国

際銀行家」とも呼ばれる者たちというのは、「ユダヤ人を自称している者たち」なわけです。

## ルシファーを「神」と呼ぶ者たち

では、「ユダヤ人を自称している者たち」とは、果たして何者なのでしょうか？その謎を解くためには、『新約聖書』の予言の書「ヨハネの黙示録」に目を向ける必要があります。『新約聖書』とはキリスト教徒たちのバイブルです。

そして『新約聖書』の「ヨハネの黙示録」3章9節に、こうあります。

「見よ、サタン（悪魔）の会堂（教会）に属する者、すなわち、ユダヤ人と自称してはいるが、その実ユダヤ人ではなくて、偽る者たちに、こうしよう。

見よ、彼らがあなたの足もとにきて平伏するようにし、そして、わたしがあなたを愛していることを、彼らに知らせよう。」

つまり『新約聖書』の「ヨハネの黙示録」には、はつきりと「ユダヤ人を自称する悪魔教徒」が存在している、ということが記されているわけです。そして信じがたいことですが、実際に世界には悪魔崇拝を行っている者たちがいるのです。

現在の世界には、キリスト教徒22億人、イスラム教徒16億人、ユダヤ教徒約1500万人、仏教徒5億人がおり、日本にも神道という八百万の神々を信仰する日本独自の宗教があります。ですから世界人口73億人の大半の人が、何らかのカタチで神仏を信仰していることになりました。しかし驚くべきことに、現在のイラクやクウェートの辺りで、「シムメール」とも呼ばれていた土地において、太古の昔のバビロニア時代から、今も続いている悪魔教が、実は世界には存在していたのです。

『旧約聖書』に記されているように、紀元前9世紀に預言者エリヤは、「バアル」という神を崇拜する450人と戦いましたが、この「バアル」というのは悪魔でした。すなわち今から約三千年前の中東において、バアル崇拜を行う悪魔教徒が確かにいたわけですが、そうした悪魔の系譜は、密かに現代にまで続いてきたわけです。

実際にアメリカでは、家の外ではユダヤ教徒の素振りを見せておきながら、実際は悪魔崇拜を行っている者たちが大勢おり、そうした内部告発者の映像も、今ではネットで見ることもできます。つまり「バビロン捕囚」以来、ユダヤの教えを捨てて悪魔崇拜を始めながらも、外向き・表向きにはユダヤ教徒の素振りをしている者たちが昔から、そして今も存在しているわけです。

『聖書』には「借りる者は貸す人の奴隷となる」とありますが、ユダヤ教を捨てた悪魔教徒たちが、外向き・表向きにはユダヤ人のふりをして、『聖書』で禁じられている「高利貸し」として銀行業を行っているわけです。

では、悪魔とは何なのでしょう？ 『ヨハネの黙示録』には、こうした言葉があります。

「あなたの見た獣は、昔はいたが、今はおらず、そして、やがて底知れぬ所から上ってきて、ついには滅びに至るものである。」

地に住む者のうち、世の初めから、いのちの書に名をしるされていない者たちは、この獣が、昔はいたが今はおらず、やがて来るのを見て、驚きあやしむであろう。《中略》

昔はいたが今はいないという獣は、すなわち第八のものであるが、またそれは、かの七人の中のひとりであって、ついには滅びに至るものである。（『ヨハネの黙示録』十七章）

この中で言う「かの七人の一人」とは、「七天使」としての一人で「ルシフェル」と呼ばれていましたが、神に嫉妬して、墮天して、地獄に落ちたために、「ルシファー」と呼ばれている悪魔のことです。

『旧約聖書』の『イザヤ書』には、天使が墮天していく光景として、こう記されておられます。

「ああ、お前は天から落ちた、明けの明星（ルシファー）、曙の子よ。」

お前は地に投げ落とされた、もろもろの国を倒した者よ。かつて、お前は心に思った。

『わたしは天に上り、王座を神の星よりも高く据え、神々の集う北の果ての山に座し、雲の頂に登って、いと高き者のようになる』と。

しかし、お前は陰府に落とされた、墓穴の底に。

お前を見る者は、まじまじと見つめ、お前であることを知って、言う。

『これがかつて、地を騒がせ、国々を揺るがせ、世界を荒れ野とし、その町々を破壊し、捕らわれ人を解き放たず、故郷に帰らせなかった者か。』 『旧約聖書』イザヤ書（14・12～17）

つまり世界には、価値観が通常の人々とは逆転した者たちがおり、彼らは墮天した「ルシファー」を「神」を考えています。

「ユダヤ人」というのは「ユダヤ教を信じる人々」という意味ですから、宗教的に考えれば、正当なユダヤ教に改宗すれば、誰でもユダヤ人になることができます。しかしモーセの教えであるユダヤ教を捨てて、『タルムード』を選んだ者たちがいるわけです。彼らは宗教的に見れば、ユダヤ人ではありません。いくら彼らが、自分では自分のことをユダヤ人と考え、「ユダヤ人」というアデンティティを持っていても、彼らはモーセの教えを捨てた時点で、正当なユダヤ人ではありません。しかしそれでも彼らは、「自分はユダヤ人だ」と、ユダヤ人を自称しております。ロスチャイルドも、ルーズベルトも、マルクスもそうです。

しかもこれから本書で、彼らの存在をきちんと証明し、詳しくご説明いたしますが、彼らは悪魔ルシファーを崇拜しているのですから、やはり彼らはユダヤ人ではありません。

これが『新約聖書』の「ヨハネの黙示録」に記されている「ユダヤ人を自称する悪魔教徒」という意味です。

そしてユダヤ人を自称する彼らが、国際銀行家として、「通貨発行権」を持って、人々から利益を吸い上げながら、人々を貧困に貶めながら、なおかつ戦争こそを最大の利益としているわけです。さらに彼らは現在、「コロナ

騒ぎ」と嘘の地球温暖化詐欺を理由に、人類にワクチンを接種させたいわけです。

## 大衆を「大きな獣」と考える者たち

「さすがにユダヤ人を自称する悪魔教徒など、そこまでは信じられない」と、そのように思われる方もいるかもしれませんが。それでは、「ユダヤ人を自称する悪魔教徒」の存在を証明するにあたり、近年のユダヤ人を自称している者たちの間違いについて考えてみたいと思います。

たとえばかつてアメリカに、ウォルター・リップマンというユダヤ移民三世がいました。この人物はジャーナリズムで最も権威あると言われている『ピュリッツァー賞』を、2回も受賞されて「ジャーナリズムの鑑」とまで称されていました。しかし彼は、自身の著書『世論』の中で、我々大衆のことを「大きな獣」とも、「困惑した群れ」とも評していました。彼は書籍の中で次のように述べています。

「大衆（マス）に対して、自分たちが民主的な権力を行使していると幻想を抱かせなければならぬ。

この幻想は支配エリート層によって支配されている側の大衆の同意を、作り出すことによって形成されなければならない。」

つまり、アメリカの「ジャーナリストの鑑」と称された人物が、「民主的な権力は幻想であり、大衆には幻想を抱かせておかなければならない」と述べていたわけです。

また「政治的宣伝プロパガンダの専門家」に、エドワード・バーネイズというユダヤ系アメリカ人がいました。この人物も「広報の父」と呼ばれ、広報活動とプロパガンダの専門家であり、『ライフ誌』では、「20世紀最も影響力のあるアメリカ人100人」にも選ばれております。

彼は『プロパガンダ』という自身の書籍の中で、我々大衆について、「不合理な本能に従って動く群れ」と表現

して、ウォルター・リップマンと同じように、こう述べておりました。

「世の中の一般大衆（マス）がどのような習慣を持ち、どのような意見を持つべきかといった事柄を、相手にそれと意識されずに知性的にコントロール（誘導）することは、民主主義を前提する社会にとって非常に重要である。

この仕組みを大衆の目に見えないカタチでコントロール（誘導）することのできる人々こそが、『目に見えない統治機構』を構成し、真の支配者として君臨している。」

『世論』という書物を書き、「ジャーナリストの鑑」と称されたウォルター・リップマンにしても、『プロパガンダ』という書物を書き、「広報の父」と称されたエドワード・バーネイズにしても、共にユダヤ人を自称しております。そして彼らの言葉の中には、やはり『タルムード』の「家畜思想」を連想させるものがあります。ちなみに『タルムード』には、はつきりと「ゴイムには常に偽りを伝え続けよ」と記されております。すなわち彼らからすれば、「獣たちに本当のことなど何も教えずに良い」というわけです。

アメリカで権威ある大手新聞『ニューヨークタイムズ』を所有するザルツバーガー家は「ユダヤ人」を自称しています。『ワシントンポスト』も、「ユダヤ人」を自称するユージン・メイヤーにより買収され、後に娘のキャサリン・グラハムに受け継がれました。彼女は2001年に亡くなりましたが、『ニューズウィーク』の所有者でもあり、「メディアの女王」とまで呼ばれていました。実はアメリカの大手新聞というのは、「ユダヤ人」を自称する者たちが所有しております。しかも新聞や雑誌などの功績に贈られる「ピューリッツァー賞」までも、その原型を築き上げたのは、ヨセフ・ピューリッツァーという、やはり「ユダヤ人」を自称する者です。

日本の大手新聞は『日経』、『読売』、『毎日』、『産経』、『朝日』の五紙ですが、これらの新聞は20ページから40ページ程度で、その中で国際政治を取り扱っているのは、どの新聞もわずか2ページから4ページ程度です。しかし最悪なことに、どの新聞も載せている国際政治の情報は同じで、なおかつ同じ順番でニュースを載せていることも少なくありません。それは国際政治の情報をこれらの新聞社に提供している『AP通信』、『ロイタ

ー』、『AFP通信』といった通信社が、そもそも「ユダヤ人」を自称する者たちによつて経営されているからです。

「ユダヤ人」を自称している国際銀行家ロスチャイルドの支援のもとに、同じく「ユダヤ人」を自称しているフランス人のシャルル・ルイ・アヴァスという人物によつて、1835年に『アヴァス通信社』が設立されました。この通信社が、今なお存続している世界最古の大手通信社『AFP通信』の基になりました。そしてこの『AFP通信』の従業員であり、なおかつ「ユダヤ人」を自称しているポール・ジュリアス・ロイターによつて、1851年に『ロイター通信』が設立されました。この『ロイター』から、映画『007』でお馴染みのイギリスの諜報機関『MI5』、『MI6』が設立されました。そしてこれらのイギリスの諜報機関の指導を受けて、アメリカの『CIA』、イスラエルの『モサド』などの諜報機関も出来てきました。これらの政府の諜報機関も、結局はユダヤ人を自称する者たちの手足として動いてきました。

つまりアメリカの大手新聞のみならず、世界中のマスコミに情報提供している通信社も、さらにはアメリカやイギリスの諜報機関も、すべて国際銀行家の手の中にあり、こうして私たちは「情報封鎖」されているわけです。

## 実は自由無き自由の選択だった

ウォルター・リップマンにしても、エドワード・バーネイズにしても、ユダヤ人を自称する彼らが持っていた「マスコミ思想」には、「大衆には自由があると錯覚させながら、大衆を上手く誘導していく」という見下した考えがあるわけです。そして実際に、そうしたことが行われてきたのです。それを証明するにあたり、次の四つの質問に素直に答えて頂きたいと思います。

問1 次の8つの中から、1つを自由に選んでください。

「スキー」「鼻水」「コップ」「温泉」「ゴミ箱」「コーヒー」「冬」「お土産」

問2 それでは次は、今選んだその単語と貴方が「関係ある」と思うものを、次の8つの単語の中から自由に選んでください。

「電卓」「雪」「針」「ティッシュ」「米」「まんじゅう」「牛乳」「電話」

問3 さて、次は問2で選んだその単語を強くイメージして、そして次の8つの中から「関係ある」と感じるものを自由に選んでください。

「大きい」「遅い」「白い」「鋭い」「暗い」「甘い」「赤い」「狭い」

問4 それでは最後に、問3で選んだ特徴に当てはまるものを次の8つの中から自由に選んでください。

「ナイフ」「ピラミッド」「砂糖」「亀」「犬小屋」「宇宙」「血」「深海」

貴方が選んだものは「砂糖」です。もちろん魔法でも何でもありません。ここにはトリックがあり、普通に考えると必ず「砂糖」にたどり着く、詐欺的な仕組みとなっているのです。実は「自由」などというものは、欠片も存在せず、自由は単なる幻想だったのです。

たとえば一問目では、8つの選択肢があるわけですが、二問目では4つしか選択肢が無くなります。なぜなら最初の一問目の8つの選択肢から、ともに考えれば、二問目の「電卓」「針」「米」「電話」の4つの選択肢は「関係ある」とは到底思えず、実はこの4つは、ただのダミーだからです。つまり「選べない選択」です。

この要領で、二問目に選んだ「雪」、「ティッシュ」、「まんじゅう」、「コーヒー」からは、三問目の8つの選択肢のうち、普通に考えれば「白い」と「甘い」のたったの2つの選択肢しかありません。「たくさんの選択肢

があつて自由に選択できる」と思いつつも、すでに二択になつてゐるわけです。それはまるで、アメリカ国民が「民主党」と「共和党」からしか大統領を選べないのと似ています。

そして最後の質問の「白い」と「甘い」と当てはまるのは、四問目の選択肢では「砂糖」だけです。つまり普通に考えていくと、一問目は8つの選択肢ですが、二問目では4つの選択肢に減り、三問目では2つに減り、四問目ではたったの1つしか選択肢が無くなるわけです。自由に選んでゐるつもりでも、少しも自由に選んではいけないわけです。

しかし私はこの4つの質問の中で、あえて何度も「自由」、「自由」という言葉を使いました。なぜなら本当は、「自由」など何一つ無いからです。自分で選んでいるつもりでも、本当は強制的に選ばされてゐるに過ぎなかつたからです。そしてユダヤ人を自称している者たちは、実際にこうした「自由に見せかけた錯覚」をアメリカでも、日本でも、世界中のあらゆる国々で行つてきたわけです。

「さすがにユダヤ人を自称する悪魔教徒など信じられない」と思われるかもしれませんが。しかしユダヤ人を自称する者たちが銀行も、製薬会社も、マスコミも邪悪に支配してゐる、この恐ろしき事実こそ、「ユダヤ人を自称する悪魔教徒」の存在証明と言えるでしょう。

## 「誘導より虐殺が簡単」と力説する男

実は先の大戦より日本は、こうしたユダヤ人を自称してゐる悪魔教徒たちの考えのもとに、マスコミ報道がなされて、そして私たち日本人は、気づかぬままに誘導されてきました。たとえば自民党の小泉・竹中が行つた「郵政民営化」、これを国民に問う選挙が2005年にあつたわけですが、その選挙の時に、自民党が選挙戦略を立てるために依頼したのは、『有限会社スリード』という広告代理店だつたと言われております。

そしてこの『有限会社スリード』という会社は、日本国民をA、B、C、Dの四つの層にわけたそうです。縦軸は「IQ」、横軸は「小泉内閣がすすめる構造改革に賛成か？反対か？」ということですよ。

「A層」とは、財界の勝ち組企業、大学教授、マスメディア（テレビ）関係者、都市部ホワイトカラーなどの知的エリート層のことだそうです。「B層」とは、負け組、主婦層や子供、シルバー層、具体的なことや難しいことは分からず、情報に踊らされ易い層のことです。また、「C層」とは、保守派のことだそうです。「D層」とはすでに失業状態にいる層のことだそうです。

そして『スリード』というこの会社は、「政治のことはよく分からないB層をターゲットにして、とにかく少し変わった小泉のキャラクターを売りにして、『郵政民営化は善』、『郵政民営化は善である』とただ繰り返し主張すればよい」と、そのような戦略を立てたと言われております。

そして実際に、小泉・竹中の自民党は、その戦略でもって衆院選挙を戦い、9月11日の投票日には大勝利をおさめ、その後、郵政は民営化されました。もちろんすでに述べましたように、ジャーナリストの森田実さんの情報によれば、アメリカ保険業界が『電通』を通じて、巨額を投じて郵政民営化を狙っていました。

「自民党の背後に、誰かいるのか？いないのか？」もう、いい加減、私たち日本国民は考えてみるべきなのです。なぜなら次の発言は映像でも、音声でも残っているのです、ネットでご覧になることもできますが、「ユダヤ人」を自称している米大統領補佐官ズビグネフ・ブレジンスキーは、次のように驚くべきことを述べていたからです。

「大衆は今、政治に目覚め始めており、これは今までなかったことであり、これまでの時代は大衆を誘導することは簡単だったが、今は誘導するよりも、大衆を虐殺するほうが簡単である」

この言葉は、まさに「悪魔的な家畜思想」そのものです。

## 40秒に一人の行方不明の子ども

おそらくは普通に教育を受けて、普通にマスコミを見聞きして、普通に暮らしている日本人からすれば、「人とも思わない悪魔教徒がいる」と聞かされても、ただただ「そんな話は信じられない」と、そう感想をもらすことでしょう。なぜならこれらの話は、どこの大学でも教えられていないことだからです。しかし大学が何を教え、何を教えずとも、悪魔勢力は確実に存在しています。そして悪魔が存在しているその証拠が、スーパーセレブたち愛用の悪魔のドラッグ「アドレノクロム」です。

「少々、話が過激すぎるのでは？」と、そのような感想を持つ人もいるかもしれませんが。しかし今まさにコロナ禍によって、人類が減びるかもしれない危機の時代だからこそ、こうした悪事こそ暴かなければなりません。なぜなら彼らの悪魔的な精神性を証明するためには、この「アドレノクロム」がとても分かり易いからです。

実はこの「地球」という惑星には、身の毛もよだつおぞましい悪魔的精神性を持つ者たちがいて、そして実は彼らが、ある目的のために、今起きている「コロナ騒ぎ」を演出していたのです。

そして実は童話『不思議の国のアリス』にも登場する「白ウサギ」という言葉は、「人身売買」を意味する隠語であり、その理由は、写真にもありますように、「アドレノクロム」の分子構造が「白ウサギ」に似ていることによる来ています。

では、「アドレノクロム」とは、いかなるドラッグなのでしょうか？元FBIロサンゼルス支部長テッド・ガンダーソンは、とある殺人事件を追いかけているうちに、アメリカに潜んでいる巨大な闇を目の当たりにしました。そして彼は動画の中で、次のように訴えています。

「私は自問自答しました。いったい何が起きてるんだ？

約2年前までどう何度も言ってきました。この国（アメリカ）では、麻薬、小児性愛虐待、ポルノ、売春、腐敗その他にからむ、『穏やかなネットワーク』が活動している」と。

しかし2年前、コトはもつと深刻であることを調査結果から確信しました。陰謀です。我々はこの国で起きていることを知る必要があります。」

つまり元FBIロサンゼルス支部長テッド・ガンダーソンによれば、「アメリカには小児性愛などに絡む巨大な陰謀がある」と言うわけです。2020年8月31日付けの『CNN』の報道、そしてその記事の中にあるFBI（連邦捜査局）の発表によれば、アメリカでは毎年、約76万5000人の子どもが行方不明になっているそうです。これは1日に約2000人、40秒間に1人の割合です。

しかもその『CNN』の記事によると、FBIはジョージア州で、3歳から17歳の行方不明の子ども39人を救出し、9人が逮捕されたそうです。救出された子どもは性的な目的のための人身売買、性的虐待などの被害者とみられています。FBIは2005年から「全米行方不明・被搾取児童センター（NCMEC）」と連携して、これまで1800人以上の子どもたちを救出しているそうです。イギリスでも毎年、約14万人の子どもが行方不明になっています。そして世界では、毎年800万人以上の子どもが行方不明になっており、これは1日に平均すると2万2000人です。実は世界は今、歴史上、最も人身売買と奴隷の多い時代を迎えているのです。

## 古来より悪魔モロクを祀る者たち

オランダのロベルト・ベルナルドという方は、かつて悪魔勢力に属していました。しかし彼は、子どもを虐待し、殺害する行為に耐え切れなくなつて、悪魔勢力を脱しました。そして彼は、『De Verrijen Media』というメディアのインタビュで、衝撃の告発を行いました。

ロベルト・ベルナルドは、企業家として成功を収めたセレブでしたが、しかし彼は、さらなる成功への野望を抱きました。彼曰く「マイナス100度の冷凍庫に良心をしまっしまい」、いつしか彼は、出所の怪しい金のマネ

ー・ロンダリングなど、違法な業務に携わるようになったそうです。そして彼は、悪魔勢力と関わるようになり、彼らの仲間へとなっていったそうです。

ベルナルド氏によれば、彼が人脈を広げていくことによって、「世界の銀行、世界各国の政府、CIAやモサドといった世界各国の諜報機関、あるいはテロ組織などが、いかに密かに結託して、世界のマネーを回しているかを理解した」そうです。ベルナルド氏はその悪魔勢力との関わりの中で、「冷酷なサイコパス」になっていく訓練を受けたそうです。そのために彼は、たとえ自分が関わった仕事の影響で自殺者が出たとしても、そのことを同僚と笑い飛ばすような、とても冷たい人間になっていきました。彼は言います。

「私たちは、人々を見下し、嘲笑っていました。人もモノも単なる商品、廃棄物であり、全ては無価値なゴミです。自然、地球だってそうです。全てを燃やし破壊したって構わないのです」

こうして悪魔教徒者のサークルと終身契約を結んだ彼は、いつしか悪魔教徒の教会で、官能的なミサに参加し始めたそうです。そして当時の彼は、その悪魔的で官能的なミサを大変楽しんだそうです。

彼によれば、そのミサは、まるで映画『アイズ・ワイド・シャット』の1シーンのようであったと言います。ちなみにこの『アイズ・ワイド・シャット』という映画そのものが、悪魔教徒の秘密を暴こうとして、ロスチャイルド家の元大邸宅であるフェリエール城をスタジオにして、命懸けで制作されたものでした。監督のスタンリー・キューブリックは、映画公開直前に謎の死を遂げています。ロベルト・ベルナルド氏は言います。

「それでは、今回私がインタビューを受ける理由となった出来事をお話しましょう。それは海外で開かれた、生贄を捧げる儀式に招待された時のことです。

これが、限界でした……生贄にされたのは子どもたちです」

さらに彼は続けます。

「彼ら(悪魔教徒)は、こんな(悪魔的)儀式をもう何千年も続けているのです。

私はかつて神学を学んでいたのですが、聖書にはイスラエル人がこういつた生贄の儀式をしている記述がありません」

ベルナルド氏が述べるように、たしかにユダヤ教の正統な聖典『旧約聖書』の『レビ記』には、「子どもをモレクにささげてはならない(18・21)」、あるいは「イスラエルの人々のうち、またイスラエルのうちに寄留する他国人のうち、誰でもその子どもをモレクにささげる者は、必ず殺されなければならない(20・2-5)」とあります。つまりたしかにベルナルド氏が述べるように、古代のイスラエルにおいては、「モレク」という名の悪魔を祀り、子どもの生け贄の儀式を行うことを禁じていたわけです。

モレクは古代の中東で崇拜されていた悪魔であり、「モロク」とも呼び、「母親の涙と子どもたちの血に塗れた魔王」という意味があります。「モロク」について、『旧約聖書』の『列王記』にはこうあります。

「ソロモン王はアモン人の『憎むべきモロク』の為にも東の山に聖なる高台を築いた。(第11章)」

『旧約聖書』の『イザヤ書』にもこう記されております。

「淫らな男女に対して、お前は油を携えて『モロク』の下に足を運び多くの香料を捧げた。」(第57章)

つまり『旧約聖書』は「モロク」にまつわるものに関わる行為は、すべて「ユダヤの神」に対する背信行為、もしくは許されざる行為として記しているわけです。すなわちイスラエル人は「モロク」を徹底的に忌み嫌うわけです。これを見ても悪魔教徒たちが、正統なるユダヤ教徒ではないことが分かります。あくまでも彼らは、モーセの教えである『聖書』の上に、『タルムード』を置いて、ユダヤ教徒を自称する悪魔教徒であり、ユダヤ人は被害者です。

## 悪魔のドラッグ「アドレノクロム」

そして実は政府の要人、組織のトップ、権力を持った2000人のスパーエリートたちは、カリフォルニア州サンフランシスコのモンテリオの広大な土地の中で、今でも毎年7月になると、バビロニア時代から続く悪魔崇拜の儀式を行っております。これは『ボヘミアン・グローブ』と言います。写真にもありますように、彼ら悪魔崇拜者たちは、高さ12メートルの巨大なフクロウを崇拜し、生贄の儀式を行っております。

『聖書』では、モロクは牛の頭部を持ち、子どもの生贄を要求する残忍な悪魔として描かれています。似た話は「ギリシャ神話」にもあります。ギリシャ神話では、欲情に狂った王妃が牡牛と交わり、そのために王妃は、牛の頭を持った怪物ミノタウロスを出産します。このミノタウロスは成長するに従って、激しい凶暴性を身につけて、好んで人間を貪り喰らったとされています。

ギリシャ神話のミノタウロスも、『聖書』のモロクも、共に頭は牛なのですが、なぜか『ボヘミアン・グローブ』では、フクロウを悪魔モロクとして祀っております。ちなみに悪魔勢力からかなり侵略を受けているアメリカも、ホワイトハウスを上空から見ると、なぜかフクロウのカタチをしています。

この『ボヘミアン・グローブ』については、『ロシア・トゥデイ(RT)』というロシア政府が所有する実質国営メディアが、2012年7月13日に報道しております。あるいは2018年8月に『YouTube』アカウントを「BAN」されたアレックス・ジョーンズというジャーナリストも、2000年7月15日、2台の隠しカメラを持って、この『ボヘミアン・グローブ』に潜入することに成功しました。これらの『ボヘミアン・グローブ』の動画は、共に今でもネットで見ることができます。

スパーエリートであったベルナルド氏が、いかなる悪魔儀式に参加したのかは定かではありません。しかし彼は、確かに子どもたちを生贄に捧げるように命令されたそうです。しかし彼はそれを拒否しました。この時から彼の精神は壊れていったそうです。彼は涙を流しながら、インタビュー告白を続けます。

「もう私はまともに機能することができませんでした。

成果も振るわなくなり、仕事を断るようになってきました」

それでもベルナルド氏は極めて責任の重いポジションにあったために、仕事を辞めることはできなかったと言います。しかしある日、ベルナルド氏の体は完全に機能が停止し、気が付くと病院の集中治療室で寝ていたそうです。彼の覚悟の告白映像は、ネットで見ることはできませんが、この告白動画がネットに上がったのは4月27日、そしてそれから約4ヵ月後の8月24日、ロナルド・ベルナルド氏の遺体が、フロリダで見えられました。

古代において生贄の儀式が行われていたのは事実です。また、現代のアメリカでは40秒間に1人、年間で約76万5000人の子どもが行方不明になっております。そして亡くなったロベルト・ベルナルドをはじめ、今も悪魔的な生贄の儀式が行われていることを証言する人たちはたくさんおります。なおかつその告発映像も、ネットにたくさん上がっております。幼い子どもが、「人間の骸骨を持って踊った」とか、「セックスさせられた」と語る姿は、誰の目に見ても衝撃です。これらを踏まえて、悪魔のドラッグについて、ご説明いたします。

悪魔のドラッグ「アドレノクロム」とは、子どもを鎖に繋ぎ、拷問を行い、恐怖に怯えた子どもたちから流れ出る血を集めて製造しています。アドレナリンがストレスを受けて、酸化することで発生する若返りの薬であり、向精神薬でもある究極の悪魔ドラッグ、それが「アドレノクロム」なわけです。このドラッグについては、トルコのテレビ放送でも報じられ、『スピード』という映画に出ていた超有名ハリウッド女優も、何も悪びれる様子もなく「赤ちゃんの皮膚から採る」と語っております。しかもコロナ薬として騒がれている「アビガン」ですが、この薬を作っている『富士フィルム』も、なぜか「アドレノクロム」を販売しております。世界的セレブやハリウッドスターのみならず、日本のセレブや芸能人も愛用している者がいるのでしょうか？

現実には悪魔教徒が存在している以上、悪魔的儀式が行われているのも当然であり、そして悪魔のドラッグも存在しているようです。

## Googleの経営者の邪悪性

本書でこれまで述べてきた話に、初めて触れる人は、おそらくこう考えるのではないでしょうか。「もしもこれらの話が本当に真実ならば、もっと世の中に広まっていて良いはずだ。世の中に広まっていないから信じられない」と。たしかにいくらマスコミが、彼ら悪魔勢力の手の中に落ちて腐り果てていようと、現在はインターネットがあるのですから、こうした話をもっと世の中に簡単に広まっていても良いはずです。

では、「ネットの世界」には、果たして正義があるのでしょうか？現在、インターネットの世界において、大きな力を持っているのは、やはり『Google』です。

『Google』は、2008年に『Chrome(クロム)』をリリースして、今現在も世界中の多くの人がこの『Chrome(クロム)』を使用しています。そして『Google』はその翌年の2009年に、GPU(グラフィックス・プロセッシング・ユニット)を得て、それを「Adreno(アドレノ)」と名付けています。つまり『Google』は、プロセッサには「アドレノ」と名付けて、そしてGPUには「クロム」と名付けて使用しているわけです。これらの言葉を合わせると、「アドレノ・クロム」となりますが、これは果たして単なる偶然でしょうか？

『Google』の共同創業者はセルゲイ・ブリンとラリー・ペイジの2人ですが、セルゲイ・ブリンは「ソ連出身のユダヤ人である」と自称しています。ラリー・ペイジも、「自分の親はユダヤ人である」と語っています。そして『ニューヨークタイムズ』によれば、2009年にセルゲイ・ブリンは、ユダヤ移民支援協会(HIAS)に100万ドル(約1億円)を寄付しています。

この2人の共同経営者と共に、これまで『Google』を引っ張り、「三頭政治」を行ってきたエリック・シ

ユミレットが掲げたスローガンは「Don't Be Evil（邪悪になるな）」でした。しかし2014年、突如、エリック・シュミレットは「Don't Be Evilは愚かなルールだった」と語り、『Google』が中国に協力して、中国国内で検閲していることを公表しました。

また、セルゲイ・ブリンとラリー・ペイジの共同創業者の2人は、すでに『Google』のCEOをインド系アメリカ人に譲っています。しかし2人は親会社の取締役にとどまり、なおかつ51%の株式と「議決権」を今も持っています。そのために彼らは、未だに『Google』のCEOを解任することも、選任することもできません。ですから単純に言って『Google』というインターネット会社は、ユダヤ人を自称する者たちが経営している会社なわけです。

しかも『Google』のソフトウェア・エンジニアのザック・ヴォーリー氏は、『Google』の「AIプラットフォーム」に政治的な偏見が組み込まれていること、そして『Google』がその「アルゴリズム」を使って、政治的偏見があるその事実を隠蔽していることを内部告発しました。

つまり内部告発者のザック・ヴォーリー氏の話によれば、『Google』は、「表現の自由」があると全世界に見せかけておきながら、実は政治的偏見を『Google』・『YouTube』の中に組み込ませているわけです。ザック・ヴォーリーは、自身の告発が真実であることを証明するために、『Google』の内部文書950点以上をネットで一般公開しています。

ヴォーリー氏は『Google』で8年間も働き、年収は26万ドル(約2600万円)の高収入だったそうです。しかし彼は言います。

「私には会社に残って、給料をもらい続けたい理由もありましたが、しかし『Google』がこうした計画を実行していることを知りながら、自分の利益のために見て見ぬ振りをしたのなら、私は永遠に自分を許すことが出来なかつたでしょう。」

ヴォーリー氏によれば、『Google』は、国際銀行家や中国共産党を優遇し、その一方で反トランプの政治姿勢を持つているそうです。なぜならトランプが、国際銀行家や中国共産党と戦っているからです。他の『Google』の社員も、何が起こっているのか知っているために怯えているそうです。

こうしたザック・ヴォーリー氏の告発を裏付けるように、トランプ大統領も、次のようにツイートしています。「報告書が明るみになった！『Google』が2016年の選挙で、ヒラリー・クリントンに投票した人数を、260万から1600万へ水増ししていた。この情報は、トランプの支援者ではなく、クリントンの支援者によって公開された！『Google』は起訴されるべきだ。私の勝利は当初考えられていたよりも圧倒的だった」

アメリカ大統領というのは、この「地球」という惑星の中でも、絶大な力を持っています。そしてその絶大な権力を決めるとしても重要な大統領選挙において、「『Google』が不正を行っていた」という内部告発者がついに出たのです。そして現役のアメリカ大統領が、「『Google』は起訴されるべきだ」と述べているわけです。ならば『Google』までも、私たちを自殺の道に誘っていることは明白です。ちなみに2020年10月、『Google』は、米司法省から独占禁止法で訴えられて、ようやくこれから彼らの悪行が暴かれていくことでしょう。

冷静に考えれば、ユダヤ人を自称する狡猾な者たちが、教育、マスコミ、政府を巧みに使いながらも、「ネットだけは放置する」と考えることのほうが難しく、明らかに彼らは『Google』をも利用していることでしょう。その証拠に、『YouTube』の急上昇ランキングは、いつも幼稚な動画ばかりです。

こうして考えてみると、『Google』は一見すると便利で、とても信用できますが、しかしその信用の分だけ、もしかしたら人類にとって脅威なのかもしれません。実際にザック・ヴォーリー氏は人類に呼びかけます。

「『Google』は危険である、使用を中止せよ」

ここまで本書を読まれて、「これらの話かもしれない真実ならば、もっと世の中に広まって良いはずだ」と考え

る人は多いでしょうが、しかしこれらの話が、なかなか広まらないのは、政府、マスコミに続いて、『Google』などのネットまでも、実は彼らの手に落ちてしまっているからです。

## 現代にそそり立つバベルの塔

すでに述べましたように、悪魔崇拜者たちは一年に一度、「ボヘミアン・グループ」というフクロウを祀る不気味なキャンプを行っており、その中で「バビロニア時代の悪魔的な儀式」を行っています。この「バビロニア時代の悪魔的な儀式」ということが、とても重要なのです。なぜならかつてユダヤ人が、バビロニアの首都バビロンへと「捕囚」された頃から始まった『タルムード』ですが、これは『バビロニア・タルムード』と呼ばれているからです。

では、バビロニアの首都であった「バビロン」という土地は、果たしてどんなところなのでしょうか？

バビロンには「ジツグラト」というレンガが造られた巨大な塔の遺跡がありますが、この塔の遺跡は「バベルの塔」の遺跡であったと言われております。では「バベルの塔」とは何でしょうか？『旧約聖書』の「創世記」にはこんな話があります。

「すべての人々は同じ言葉でありました。東の方から移住して来た人々は言ったそうです。

『さあレンガを造ろう。我々の街と塔を造ろう。塔の先が天に届くほどの』

神は人々が街や塔を造ろうとしていたのを見て仰せられました。

『なるほど彼らは一つの民で同じ言葉を話している。この業は彼らの行いの始まりだが、おそらくやり遂げられない。ならば彼らの言葉をバラバラにして、互いの言葉を理解できなくさせよう』

こうして人々は街と塔の建設をやめました。(創世記11章1-9節)

バベルの塔の建設者の名を「ニムロデ」と言います。そしてこのニムロデの伝説として、次のような話があります。

「ノアの子孫ニムロデ王は、神に挑戦する目的で剣を持ち、天を威嚇するために塔の建設を始めた。

そしてもし神が、ノアの大洪水の時のように、再び地を浸水させるのなら神に復讐すると、彼は天を威嚇したのだ。こうして彼は、水が達しない高い塔を建て、彼らの父祖たちが滅ぼされたことに對する復讐を決意したのである。人々はニムロデに従い、『神に服するのは奴隷になることだ』と考えて、塔の建設に着手した。」

つまりニムロデという人物は、神に反逆する者であり、この神の反逆者が「バベルの塔」の建設に着手し、そしてその遺跡がバビロンにあったと言われているわけです。それが巨大なレンガの塔の遺跡「ジッグラト」です。

神への反逆のために「バベルの塔」を築かんとした「ニムロデ」は、一説にはその後、神格化されて「バアル」と呼ばれるようになり、こうして「バアル信仰」が起きたという説があります。すでに述べましたように、「バアル信仰」とは、『旧約聖書』に登場する預言者エリアが戦った悪魔崇拜のことです。悪魔教徒は「ルシファー」という悪魔を崇拜しているはずなのですが、「バアル」という悪魔は、悪魔界ナンバー2である「蠅の王ベリアル」と言われており、これも複雑です。

とにかく単純に考えて、「ニムロデは神に反逆する者であり、バベルの塔は神に反逆する悪魔の塔であり、バビロン捕囚以来、『バビロニア・タルムード』という悪魔的思想を持ちながら、表向きには、ユダヤ人を自称している悪魔教徒たちがいるわけです。

そして今、「バベルの塔」に良く似た重要な建造物が2つあります。一つがスイスのバーゼルにある『国際決済銀行・BIS』のビルであり、もう一つがEU・欧州連合本部ビルです。

特に欧州連合ビルは、画家のピーテル・ブリュウゲルが描いた『バベルの塔』の絵をモチーフに建設したとしか思えません。

実は世界金融には、ピラミッド状に構成されたトップダウンの絶対的な権力構造があります。このピラミッドの頂点には「銀行の中の銀行」と呼ばれる、スイス・バーゼルに拠点を置く『国際決済銀行（B I S）』が君臨し、この国際的な銀行は、あらゆる国家、あらゆる法の影響を受けず、私的な警察まで所有しています。この銀行には約9000人が在籍しており、彼らが世界の金融を意のままに操っております。

この『B I S』の下に位置するのが、『I M F（国際通貨基金）』と『世界銀行』です。これらの世界的な銀行組織は、タテマエ上は経済状況が悪化した国家に対して、融資を行い、国際金融を安定させることが目的ですが、しかし実際にこれらの国際銀行は、まったく逆のを行っております。なぜなら現実には、『I M F』や『世界銀行』は、決して返済できない融資を貧困国に行い、長期的に貧困国を搾取し続けているに過ぎないからです。

そして『B I S』、『I M F』、『世界銀行』といったこれらの国際的な銀行の下に、『日銀』や『FRB』といった世界各国の中央銀行があります。そしてこの中央銀行の下に、それぞれの市中銀行があり、こうした市中銀行が、様々な企業の経済活動に大きな影響力を持って、そして私たち国民が生存しているわけです。

## 彼らが目指す新世界秩序

1790年、国際銀行家たちの中心一族のロスチャイルド家の初代、マイヤー・アムシエル・ロスチャイルドはこう言ったそうです。

「私に一国の通貨の『発行権』と『管理権』を与えよ。そうすれば、誰が法律を作ろうと、そんなことはどうでも良い。」

このように彼ら悪魔教徒たちというのは、ありとあらゆるものが手に入るために、彼らに残されている欲望といったら、悪魔的な支配欲くらいです。つまり彼らの野望とは、自分たちに都合の良い世界秩序、「新世界秩序」を築くことなわけです。

写真にもありますように、「我々の計画に同意せよ」、「New World Order (新世界秩序)」といった文言は、「世界の基軸通貨」と言われる1ドル紙幣にも明確に書かれてあります。しかしラテン語であるために、未だにアメリカ人をはじめ世界中の人々が、こんな簡単な重大な事実さえ見落としているわけです。

はつきり言って彼ら悪魔勢力は、我々大衆のことを「家畜」と考えて、完全にバカにし切っております。そのために彼らは、こうした舐めきつたことを平然とやってくるわけです。このNWO計画は1ドルの裏のみならず、アメリカの事実上の国章の裏にも「新世界秩序」、「計画に同意せよ」と記されております。

NWO計画と真正面から戦ってきたのが、アメリカや日本のマスコミでは、「独裁者」として報じられてきた、ロシアのプーチンであり、あるいはリビアのカダフィであったり、イラクのフセインなどであり、シリアのアサドなどです。プーチン大統領は、公の場でロシア国民に向けて言いました。

「私たちはソ連崩壊後の数十年間、この世界秩序の確立と、それを固定させる企てを観察してきた。単独権力によるこの世界秩序は、どのような犠牲を払ってでも、その地位を維持するつもりなのだ。

この権力は、彼らは全てを許され、その他の者はこの権力が許可することのみ、利益の為に許されると思っている。

このような世界秩序にロシアは決して満たされないだろう。

もし、このような世界秩序を望むなら、半占領下で暮らしたいのだ。

しかし私たちは、それを望まない。

しかし私たちは戦争も望んでおらず、皆と協力しあいたい。」

「911テロ」が起こる十一年前の1990年9月11日に、当時のアメリカ大統領ジョージ・ブッシュは、湾岸戦争が始まる直前の連邦議会において、『新世界秩序へ向けて(Toward a New World Order)』というスピーチを行い、新世界秩序を築くことを世界的に向けて宣言しましたが、しかしロシアのプーチン大統領は『新世界秩序はお断り』というスピーチを行ったわけです。

信じがたいかもしれませんが、悪魔勢力は現実に存在し、なおかつ彼らの目的は、「新世界秩序」を築くことであり、その一環として、現在の「コロナ騒ぎ」も起きています。

## イエスが「蝮の子」と呼んだ者たち

では、日本もかつてロスチャイルド国際銀行家から莫大なお金を借りたわけですが、そもそも銀行家とは何なのでしょうか？

銀行家の正体は何者か知りたければ、やはりイエスという方が、今から約二千年前に、どのように「キリスト教」という宗教を新たに興され、そして十字架にかけられたのか、その歴史的事実を知る必要があります。

すでに述べましたように、「バビロン捕囚」以来、一部のユダヤ人たちはモーセの教え『聖書』を捨てて、バビロニア式の宗教、思想、商法を選んだわけですが、では、「バビロニア式の商法」とは、果たしていかなるものなのでしょうか？

古代のバビロニア時代の石版を解読してみると、そこには当時の労働者たちの勤務表や収入などが詳しく書かれておりました。それらから判明した事実として、「古代バビロン時代の労働者たちは、どんなに働いても借金が増えていた」、ということが分かっております。

というのも当時のバビロニアの人々は、自分を担保に借金することができて、そして奴隷のごとく働かされてい

たのですが、しかしどんなに働いても、働いても、働いても、その借金は膨れ上がり続けて、結局、借金の返済に給料をむしり取られ続けて、いつまで経っても奴隷から抜け出すことができなかったことが分かっているわけです。それはまさに今の日本国民や米国民とまったく同じです。どんなに働いても、どんなに働いても、「政府の借金」は増え続けて、そしてそれに伴って税金も上がり続けて、ごく一部の人を除いて大半の国民の暮らしは、どんどん貧しくなっております。

ユダヤ教には「サンヘドリン」と呼ばれる、71人の長老たちから構成されるユダヤ最高裁判権を持った宗教的、かつ政治的な組織が存在しております。そしてこの「サンヘドリン」に従う人々のことを、「パリサイ派」と呼びます。キリスト教の祖であり、なおかつユダヤ人もあつたイエスは、ユダヤ教徒の中から生まれます。しかしイエスが生まれた当時、すでにこの「71人のサンヘドリン」が、『タルムード』と『バビロニア式商法』に汚染されていました。そのためにイエスは、「サンヘドリン・パリサイ派」と対決していく中で、十字架にかけられ、そしてその後、キリスト教が成立していったという説があります。

「すでにサンヘドリンが腐敗していた」その証拠として、イエスは『新約聖書』のマタイの福音書の中で、「サンヘドリン」の長老たちに対して、次のように述べております。

「蛇よ、マムシの子らよ、どうして地獄の刑罰を逃れることができようか。(マタイ23章33節)」

『旧約聖書』において、悪魔は蛇に化けてイヴという女性をそそのかし、そして禁断の果実を食べさせました。こうしたことから「蛇」という爬虫類の生き物は、キリスト教社会では「悪魔」のように忌み嫌われております。それでもイエスは「サンヘドリン」のことを、堂々と「蛇」、「マムシの子」と呼んだわけです。さらにイエスは言います。

「偽善な律法学者、パリサイ人たちよ。

貴方がたは災いである。

貴方がたは杯と皿との外側は清めるが、内側は貪欲と放縱とで満ちている。盲目なパリサイ人よ。

まず杯の内側を清めるがよい。

そうすれば外側も清くなるであろう。(マタイ23章25〜26節)「

『新約聖書』のマタイ福音書を読むと、イエスがユダヤ教の教会の中で烈火のごとく怒り、両替商の台や鳩を売る者の椅子をひっくり返し、暴れている場面があります。イエスは言います。

「私の家は祈りの家と称えられるべきである、と聖書に書いてある。

それなのに貴方がたは強盗の巣にしている(マタイ21章13節)「

清貧思想の強いイエスが、教会で商売していることを批判しているようにも思える記述ですが、しかしここで注目しなければならぬのは、イエスが「強盗の巣」と言っていることです。なぜ「強盗」なのでしょう？その謎は「両替商」にあります。

バビロニア式の思想と商法を学んだ「サンヘドリン」は、世の中に出回っている金貨を「俗なる貨幣」と蔑み、一方で教会が売っている木製の貨幣を「聖なる貨幣」として崇めさせ、こちらの木貨を教会に献金することをユダヤ教徒たちに勧めていました。ですからユダヤ教徒たちは、「教会を経済的に支えることは善いことだ」と教わりながらも、教会にお布施をするためには、わざわざ金貨から木製の通貨へと両替しなければなりませんでした。

しかし金貨は希少価値の高いゴールドが無ければ作れませんが、木製の貨幣ならば、簡単に作れます。そのため「サンヘドリン」の長老たちは、自分たちの思い通りに貨幣を作り出して私腹を肥やしていたわけです。だからそのためにイエスは、「強盗」、「蛇」、「マムシの子」という激しい言葉で、彼らを批判したという説があるわけです。

しかしなぜ悪魔教徒たちは、なぜわざわざ「ユダヤ人」を自称するのでしょうか？おそらく彼らは、自分たちが

犯している罪を、ユダヤ人たちになすりつけようとしているのでしよう。彼らはそうすることで、もしも自分たちの罪を見破り、批判する者が現れたら、問題を「金融詐欺」から「民族差別」にすり替えて、そして自分たちが行っている罪を批判した者に、「差別主義者」というレッテルを張って、世の中から抹殺しようとしているのでしよう。

だからユダヤ人は加害者ではなく被害者なのです。だからイエスも言うのでしよう。「蛇の如く賢く、鳩の如く素直であれ」と。

## 悪魔の手先となった日本政府

太陽の最外層で、皆既日食の際に、太陽の周りを取り巻く、真珠色に淡く輝く黒い希薄なガスのことを、実は「コロナ」と言います。闇を太陽と考える悪魔勢力が、「コロナ」という名の毒ガスにも似たウイルスを利用して、こうしている今も着々と時代は悪しき方向に向かっております。

しかしなぜ、こんな危機の時代になってしまったのでしょうか？

先の大戦で日本が敗れると、占領軍が日本にやってきて、多くの日本人が戦犯として、「巣鴨拘置所」という所に入れられました。そしてその巣鴨拘置所で東條英機が処刑された翌日の1948年12月24日のクリスマス・イブに、その後、自民党を率いていく岸信介が、CIA工作員として釈放されました。「自民党の岸信介がCIA工作員であった」、これは変えることのできない歴史的事実です。なぜならすでにアメリカが公式文書で認めているからです。

戦後の日本の政治を作ってきたのは、まぎれもなく自民党であり、そしてその中でも「米国寄り日本」を作ってきたのが自民党の「清和会」というグループです。ザツとでかまいませんので、どうか清和会のメンバーをご覧に

なつてください。岸信介、佐藤栄作、福田赳夫、中曾根康弘、森喜朗、三塚博、塩川正十郎、小泉純一郎、竹中平蔵、尾身幸次、安倍晋太郎、安倍晋三、福田康夫、麻生太郎、中川秀直、町村信孝など・・・元A級戦犯からノーベル平和賞受賞者まで、実に様々な人が名を連ねています。

この自民・清和会の中で逮捕されたり、辞職に追い込まれたりした政治家は一人もなく、むしろ佐藤栄作にいたってはノーベル平和賞をもらい、またその息子たちも皆が皆、自民党の幹部になっています。その一方で、この清和会と対立する立場にあり、米国追従隷属の日本ではなく、日本が独自路線を行くことを望み、それと共に「少中国寄り」とも批判を受ける自民党「経世会」のメンバーを、ザツとでかまいませんのでご覧になってください。田中角栄、竹下登、金丸信、中村喜四郎、小渕恵三、鈴木宗男、橋本龍太郎、小沢一郎、二階俊博などです。

この経世会のメンバーは皆が皆、ロッキード事件、リクルート事件、佐川急便献金、ゼネコン汚職などによって、東京地検特捜部から逮捕されており、失脚させられており、小渕元首相にいたっては謎の急死を遂げており、彼の娘さんも失脚しております。小渕元首相の死後、清和会の森首相が誕生し、85代、86代内閣総理大臣を務め、さらにその後は、やはり同じく清和会の小泉首相が87代、88代、89代と内閣総理大臣を務めました。

「自民党」と一言で言っても、様々な派閥があり、様々な人がおり、けっして一枚岩ではないのです。そして狡猾な悪魔勢力がユダヤ人の素振りをして、問題を複雑化させて、私たちの目を欺き、混乱させているように、彼らは自民党の一部の議員を使って、日本の未来を考える保守派・愛国者の素振りを見せながらも、日本を破壊してきたわけです。

かつて巢鴨拘置所があったその場所に、『サンシャイン60』というビルが建てられました。名前の意味は「太陽の光」です。しかし悪魔崇拝者たちというのは価値観が逆転しており、「光を闇」とし、「闇を光」としております。そして「6」という数字は悪魔が好む数字です。ですからもしかしたら「サンシャイン60」には、何らかの悪魔的な意味が込められているのかもしれない。

そしてルシファアを「神」と考える悪魔勢力、この勢力によって長らく牛耳られてきたCIA、その職員であった岸信介、その孫である安倍晋三らによって、今まさに「コロナ」を理由に、悪魔の時代が築かれようとしているわけです。

ちなみに日本の選挙の9割を取り仕切っている会社は、『株式会社ムサシ』という会社です。この株主には安倍元総理の父である安倍晋太郎がおり、すでに亡くなっているので息子の安倍晋三に株が引き継がれている可能性は高いでしょう。そしてこの会社の株主をずっと追っていくと、幾つものダミー会社を経由して、『フォートレス・インベストメントグループ』という外資系の会社に辿り着きます。つまり日本の選挙の9割を取り仕切るのは実は外資であり、すなわち彼らなのです。

そして票を数える『自書式投票用紙読取分類機テラックCRS-V A』、通称「自動票読取機」には、インターネットから侵入できる「バックドア」があることも、すでに不正選挙裁判の中で明らかになっています。つまり日本の選挙の「集計マシン」は、遠隔操作が可能であるわけです。ですから「すでに日本の選挙は悪魔の手の中にある」というのが悲しくも恐ろしい現実があります。

アメリカ人作家で、アメリカの不正選挙の調査員も務めてこられたマイケル・ルパートという人物は次のように述べています。

「自動票読取機を信じている人がいたら、一度、脳ミソを検査してもらったほうがいい」

ソ連の独裁者スターリンは「票を投じる者が決めるのではなく、票を数える者が決める」と述べていましたが、このスターリンの言葉の意味を、一刻も早く日本人は考える必要があります。すでにご紹介した4つの質問、8つの選択から自由に選び取っているはずなのに、必ず最後は「砂糖」にたどり着いてしまう話を、「選挙」に絡めてどうか思い出してくださいなのです。

なぜなら日本のマスコミを、お金によって陰から牛耳っているのは、悪魔勢力だからです。そしてテレビや新聞

に良く登場する人物が選挙に勝つシステムになっております。すなわち悪魔勢力に気に入られて、テレビに出られなければ、日本の選挙には勝てない仕組みに、すでになっているわけです。そして岸信介率いる自民党は、彼ら悪魔勢力の手の中で、これまで日本を動かし、そして破壊してきたのです。

はっきり言って、戦後の日本には自由も無ければ、民主主義も無かったのわけです。

民間人への軍事攻撃は禁止されているのに、先の大戦中、アメリカは東京大空襲をはじめ数十万人の日本人を大虐殺しました。その責任者の名をカーチス・ルメイと言います。しかし戦後の日本は、その大虐殺犯に「旭日大綬章」という日本で最も荣誉ある賞を贈っております。あるいは世界では、すでに「キル・ゲイツ」とまで呼ばれ始めているビル・ゲイツにも、2020年の春、この「旭日大綬章」を贈っております。これを見ても分かりますように、戦後の日本は悪魔の侵略を許してしまつたのです。

## 「特別会計」 - 税金の詐欺

現在の日本では、数年おきに消費税が上がっていますが、実は政府は『経団連』や『経済同友会』の意向を受けて、消費税は16%、25%と、さらなる増税を行おうとしています。消費税を上げる代わりに、企業が支払う法人税を下げれば、中小企業が潰れて大企業だけが一人勝ちするからです。

しかし国会で議論している税金は、タテマエ予算の「一般会計」ばかりです。「一般会計」とは、国民が支払う税金、つまり税収が約50兆円、政府の借金（赤字国債）が約50兆円です。しかしその背後にあるホンモノ予算「特別会計」については、まったく議論されていません。その額は「一般会計」が約100兆円であるのに対して、「特別会計」は約400兆円です。ですから実にその額は4倍です。「一般会計」と「特別会計」は複雑に、相互に行ったり来たり、繰り入れ代えられているために、日本の国家予算の純計額は約240兆円です。

2001年、国会の予算委員会において、民主党の石井紘基議員が、当時の宮澤喜一財務大臣に、「特別会計がいくらになつてゐるかご存知ですか？」と訊ねると、宮澤大臣は「一度調べて」と、ただ慌てて語るだけで、何も答えられませんでした。

日本の本当の国会予算である「特別会計」は、複雑怪奇になつてゐるために、一般の議員はおろか、財務大臣でも全体を把握することが困難です。そこで石井紘基議員は、憲法で認められてゐる国会議員が持つ権利、「国政調査権」を使って、「特別会計」を徹底的に調べあげました。そして2002年、石井議員は「特別会計」がどうなつてゐるか、どこでどのような使われ方をしてゐるのか、それを国会で明らかにしようと思つました。彼は周囲の人々に、「これで日本がひっくり返る」と話してゐたそうです。すると国会で「特別会計」を明らかにするその三日前に、彼は刺されて殺されてしまいました。

彼を殺したのは、「右翼」を標榜する在日朝鮮人の暴力団員です。その犯人は、刑務所の中でテレビの取材を受けて、「4500万円をもらつて殺害を頼まれた」と明確に答えております。

今なお特別会計の真相は闇の中ですが、石井紘基元議員の娘の石井ターニャさんは、ダンボール数十個にもおよぶ父の遺品である書類の山を徹底的に調べて、殺された父が何を調べ、何にたどり着いたのか、それをまとめあげました。そして私が親しくさせていただいてゐるジャーナリストで、経済誌『フォーブス』の元太平洋支局長のベンジャミン・フルフォード氏は、その石井ターニャさんを取材しました。

結局、日本の「特別会計」はどこに消えていたのか、ベンジャミンによれば、それは単純に言つて、「究極の無駄遣いによつて海外に消えてゐる」と言います。ベンジャミンのたえを使うならば、ワンルームの狭い窮屈な家に住みながらも、高級な液晶テレビを4台も、5台も無駄に購入してゐるようなもので、その買い付け先は、すべて海外のグローバル企業だそうです。

すでに述べましたように、グローバル企業を経営するのは、悪魔勢力です。冷静に考えて、日本の国防費がわず

か約5兆円であるのに対して、医療費は約45兆円です。抗がん剤、ペグイントロンが1グラムで3億3千170万円ですから、製造元の『メルク』という製薬会社が果たしてどれだけ儲けているか、それが分かると思います。今、長引く不況によって、生活保護受給者が増えておりますが、そうした人たちは原則として、医療費は無料であり、国が税金で負担しております。

あるいは日本政府は、米国債も大量に買い支えております。「一般会計」で購入した米国債は約150兆円程度ですが、「特別会計」でも米国債を購入し続けているのに、その累計額を日本政府は発表しておりません。これまで石原慎太郎や亀井静香といった政治家たちが、「日本が保有する米国債の累計額は300兆円を超えている」と書いたり、述べたりしてきましたが、その可能性は捨て切れません。

実際に2012年12月26日に、自民党安倍政権が誕生しましたが、年が明けた2013年1月13日には金融ニュースサイトの『ブルームバーグ』が、「安倍政権が米国債を50兆円購入」とスッパ抜いております。50兆円という額は、「一般会計」の税込とほぼ同額です。それだけの米国債の購入は、やはり「特別会計」でなければ不可能でしょう。

たてまえ上、自民党は「消費税1パーセント増税につき2兆円の税込」と述べて、増税を繰り返してきました。そしてたしかに増税すると短期的に、一時期は税金が増えましたが、結局、消費増税の度に不況を拡大させて、倒産する会社と失業者も増やし、長期的に見て、ただの一度も増税によって税金が増えたことはありませんでした。消費税の導入、そして消費税の増税は結局、日本そのものを貧しくさせ、格差社会を拡大させてきました。その結果、日本の出生率を下げて、自殺者や変死者を増やし、人口を減らしてきました。2019年の出生数は86万5234人でした。これは40年前と比べると半分以下であり、すでに日本では、生まれて来る人よりも、死んでいく人のほうが多いのです。

はたらけど、はたらけど、税金が上がって、不況が拡大して、暮らしが楽にならない、これでは私たちは奴隷で

はないでしようか。その根本的な原因は、日本の税金が「特別会計」として、海外に垂れ流しになっていることにあると言えるでしょう。そうでなければ石井紘基が暗殺された理由がどこにも見当たりません。

## 愛国心を奪ったパネルDジャパン

戦後、幾度に渡って「日銀法」が改悪させられ、「大蔵省」も解体させられて、日本も徐々に「通貨発行権」を奪われ、「特別会計」という税金もどこかに消えてきました。単純に言って日本は、1868年の明治維新後の1882年の『日本銀行』設立から長い時間をかけて、悪魔勢力によって金融的に侵略されてきたわけです。幕末の日本の侍たちの間を渡り歩いた人物に、トーマス・ブレイク・グラバーという人物がおりましたが、彼の肩書きは『マセソン商会』長崎代理人でした。『マセソン商会』というのは、イギリス、インド、清（中国）において、金と茶とアヘンで三角貿易を行い、「アヘン戦争」で利益を上げた会社です。そしてこの『マセソン商会』のボスの名をジェームス・マセソンと言いますが、彼のさらなるドンは、残念ながらライオネル・ロスチャイルドでした。

作家の副島彦氏の『仕組まれた昭和史』によれば、初代総理大臣の伊藤博文をはじめとする「長州五傑」が、イギリスに留学をする際、その留学を支援し、自分たちに都合よく彼らを育てたのもジェームス・マセソンの甥であるヒュー・マセソンであり、やはりライオネル・ロスチャイルドでした。またこのライオネル・ロスチャイルドの息子であるナサニエル・メイヤー・ロスチャイルドが、『日本銀行』を創設し、総理大臣にもなった松方正義や大蔵大臣の高橋是清を支援して、そして自分たちに都合の良い金融を叩き込みました。

そのためか、なぜか国会議事堂も上空から見ると「フクロウ」の姿をしています。『経団連』のビルにも「フクロウ」の像があり、六本木ヒルズも「フクロウ」に見えます。

つまり日本は今から150年以上も前に、悪魔勢力から金融的な侵略を受け始め、そして先の大戦では虐殺され、しかも今も「癌治療」と称して抗癌剤に高いお金を払う代わりに、年間に約40万人もの日本人が大虐殺されているわけです。しかしこうした重大な事実には、日本人に気づかせず、重く苦しい忍耐を続けさせるために、「W G I P」をはじめ様々な洗脳工作が行われてきました。その洗脳工作の一つに、米国立公文書館がすでに公表している機密文書「パネルDジャパン」があります。

「パネルDジャパン」とは、テレビ、ラジオなどを使った日本人への洗脳工作のことです。つまり日本のラジオ、新聞、テレビなどを使って、アメリカの文学やホームドラマなどを流し、それらの中で「アメリカこそ民主主義の正義の大国であり、素晴らしい国である」という洗脳工作のことです。

しかし考えてもみてください。もしもある国の国民が、学校の教育では偽の自虐的な歴史を教わり、「貴方の祖国は悪い国である」と潜在意識にまで叩き込まれて、その一方で、映画やテレビなどでは、外国ばかり称賛されたら、果たしてその国の人々の心はどうなってしまうでしょうか？その国の人々の関心は、国家や政治に向くでしょうか？

いや、そんな洗脳的な教育やマスコミ報道をされたら、その日本国民の心は、「日本人として生まれたことが恥ずかしい」とさえ誤解してしまうかも知れません。実際にイングランドの名門サッカークラブで長年、監督を務められ、『名古屋グランパス』の監督としても活躍されたアーセン・ベンゲル氏は、私たち日本人に対して、次のように述べています。

「日本ほど素晴らしい国は、世界中のどこにもないだろう。」

これは私の確信であり事実だ。

問題は、日本の素晴らしさ・突出したレベルの高さについて、日本人自身がまったくわかっていない事だ。

おかしな話だが、日本人は本気で、日本はダメな国と思っている。

最初は冗談で言っているのかと思ったが、本気とわかって心底驚いた記憶がある。信じられるかい？こんな理想的な素晴らしい国を築いたというのに誇ることにすらない。

本当に奇妙な人達だ。しかし我々欧州の人間から見ると、日本の現実には奇妙にしか思えないのである。」

私たち日本人が、アーセン・ベンゲル氏から見ると、奇妙な人たちに見えてしまうその根本的な理由は、悪魔勢力によって「WGIP」と「パネルDジャパン」という洗脳工作が行われたからです。日本の教育とマスコミが、今もなおオカシイからです。つまり「日本嫌いで外国好きの日本人」を育てるための洗脳工作、それが「WGIP」であり、「パネルDジャパン」であり、そしてこの洗脳工作は、残念ながら今も続いているわけです。

### 「3S政策」・意識を逸らされた日本人

そして私たち日本人を、さらに政治に対して「無関心」にして、誘導し易くするために、極めつけとして行われたと言われているのが「3S政策」です。「3S政策」とは、「Screen（映画やドラマ）」、「Sports（スポーツ）」、「Sex（性）」、これらの「3つのS」を用いることで、日本人を徹底的に政治に対して、「無関心」にする「日本人愚民化政策」のことです。「昭和政治のフィクサー」と名高く、儒教陽明学者、思想家でもあった安岡正篤まことひろという方が、GHQのガーディナー参事官（フルネーム不明）から、この「3S政策」の話を聞いたそうです。

「さすがに3S政策なんて、そこまでは信じられない」と、思うかもしれませんが。しかしまず安岡正篤氏ほどの著名な方が、ウソをつく理由が一つも見当たりません。また『日本テレビ』の初代オーナー正力松太郎氏が、岸信介と同じ日に巣鴨勾留場から釈放されたCIAのエージェントであったことは、すでに米国の公式文書でも明らかにされている歴史的事実です。『日本テレビ』と言えば、戦後の日本の野球界をけん引してきた読売グループの

一つです。実際に正力松太郎氏は「PODAM」、日テレは「PODALTION」、読売新聞社「POBULK」、読売巨人軍は「POHIKE」と、それぞれのCIAのコードネームまで明らかになっています。

そして戦後の日本では、たしかに占領期間中という息苦しい時代の中で、駅という駅に街頭テレビが設置されて、プロレスを流し、日本国民をスポーツに釘付けにしてきました。世間に与える影響力が大きい人物のことを「インフルエンサー」と言います。敗戦直後のインフルエンサーは、プロレスラーの力道山でしたが、彼は在日朝鮮人でした。その後も、最近では人気ユーチューバーまで、実に多くのインフルエンサーがいますが、しかし彼らに共通していることは、誰一人として愛国者ではなく、公の場で政治の本質を語ることはない、ということ。政治意識の高い日本人は、日本ではインフルエンサーになれない仕組みが、すでに出来上がっているわけです。

そして現実には、現在の日本の大半の人々が、「3S」にばかり関心が高い一方で、「政治」にはほとんど「無関心」です。日本のサラリーマンが仕事中でも、「ワールドカップサッカー」の結果には、「どっちが勝ったかな」と心配していることはよくありますが、しかし「選挙」の結果には、「無関心」なことなど良くあります。

また「3S政策」の一つに「セックス」があり、これは「日本人の性的思考を解放して、日本人の関心を政治ではなく性に向かわせる」という洗脳政策と言われております。実際に戦前と戦後では、男女を問わず日本人の性に対する考え方はまったく異なっております。

たとえば1946年に公開された『はたちの青春』という映画で、佐々木康監督はGHQに呼び出されて、映画に「キスシーン」を入れるように命令されました。そしてこの『はたちの青春』が、日本で初めてキスシーンのある映画になりました。撮影に臨んだ女優は決死の覚悟で挑み、演じるに2人の唇の間には、オキシドールを染み込ませた、小さなガーゼを挟んで撮影されました。それでも当時の日本人は、そのキスシーンに大興奮して、映画館は連日の満員となったそうです。これを見ても、日本人の性的思考が変えられていることは明らかです。

医療詐欺、税金詐欺、金融詐欺など、これらの詐欺以外にも、これから始まる可能性が高い詐欺として、「水道

詐欺」があります。郵政外資化のように、これから日本の水道が外資化して、ロスチャイルド一族と関係が深い『ヴェオリア』という外国の水道会社に、水道利権が叩き売られ、水道料金が高騰しようとしています。あるいはすでに行われている「食料詐欺」があります。すでに日本中に遺伝子組み換え食品が横行し、この食品の発癌性を多くの日本人が知らずに、毎日のように口にしていきます。

つまり様々な詐欺が横行しているために、日本人は貧しくさせられ、不健康にさせられ、時には殺されているにも関わらず、大半の日本人が、これらの詐欺について、何も知らずに「沈黙」を続けているわけです。この日本人の様々な詐欺に対する「沈黙」こそ、「日本国民に3S政策が行われてきた最大の証明である」と、そう言えるのではないのでしょうか？

## 菅政権が続けば日本は滅びる

安倍総理が辞任をし、菅政権が誕生しましたが、おそらくこの政権が長く続けば続くほど、日本は壊れ、そしていずれ日本は滅びるでしょう。なぜなら菅義偉総理大臣が、ブレーンにしている者たちに、大きな問題があるからです。

ブレーンの1人は、菅義偉氏が総理大臣になって真っ先に会談した、現政権の重要人物である人材派遣会社『パソナ』会長の竹中平蔵です。彼は言います。

「正社員が恵まれ過ぎている。

正社員を無くす。

若者は貧しさをエンジョイしたら良い」

これらの発言からも、彼の日本を破壊せんとする精神は、簡単に見て取れます。

菅総理のもう一人のブレイン、それはデイビッド・アトキンソンという人物です。この人物は日本に長年住み、茶道から書道もこなし、祇園祭りには自分で着物を着て出かけ、日本の文化をこよなく愛することから、「日本人以上に日本人」とまで称されている人物です。彼は言います。

「日本には世界に誇れる素晴らしい文化がある。

だからインバウンドで、海外からの旅行者をもっと増やそう」と。

「アトキンソン信者」とまで称される菅総理は、アトキンソンのこの言葉通り、日本をグローバル化させるべく、2030年までに年間6000万人の渡航者を目指しています。これは現在の日本の総人口の半分です。

しかしこんな「インバウンド」くらいならば、まだまだ可愛いものです。なぜなら問題はアトキンソンが、次のように述べていることだからです。彼は言います。

「日本は生産性が低い。

それは中小企業が多いからだ。

現在の半分くらいまで、日本の中小企業を減らし、生産性の高い大企業が、もっと活躍するべきである」

しかしデイビッド・アトキンソンが、もともとは『ゴールドマン・サックス』のアナリストであったこと、そしてその頃から彼が、「日本には都市銀行が十数行もあるが、それでは多すぎる、もっと銀行を減らすべきである」と述べていたこと、そして実際にそうなったこと、さらには彼が、かつて証券マンとして、日本の大企業の株式を、グローバル企業に叩き売ってきたこと、これらを見ても彼の正体は簡単に分かります。デイヴィッド・アトキンソンは、イギリス人ですが、新たな「ジャパンハンドラーズ」なわけです。

「ジャパンハンドラーズ」、聞きなれない日本人も多いかもしれませんが。麻生太郎副総理は2013年4月19日、「C S I S・戦略国際問題研究所」において、マイケル・グリーンという国際銀行家側の人間と共同で会見を行い、はっきりと次のように述べていました。

「（今の日本の）水道は、全て国営もしくは市営・町営でできていて、こういったものを全て民営化します」  
竹中平蔵も、次のように言っています。

「水道事業のコンセッションを実現できれば、企業の成長戦略と資産市場の活性化の双方に大きく貢献する」  
水道民営化ならぬ外資化の旗振り役は、実は麻生太郎と竹中平蔵でした。そして麻生太郎副総理が、「水道はすべて民営化します」と述べていた場合は、ワシントンの『C S I S』というシンクタンクで、通訳を挟んで麻生氏の右側にいた人物は、マイケル・グリーンという政治学者で、国際銀行家勢力の一人です。実はこの『C S I S』というシンクタンクと、マイケル・グリーンなどの人物たちが、これまで日本の政治政策に対して、自民党・清和会を通じて指示を出してきたのです。そのために彼らのことを、『ジャパンハンドラズ』、「日本を握る者たち」と言います。

そして菅政権のブレインのデイビッド・アトキンソンも、新たな「ジャパンハンドラズ」であり、彼は「日本好きの日本員」を装って、我々日本人を油断、安心させておきながら、日本を滅ぼすグローバリストに、他ならないわけです。

単純に考えて菅政権が、この2人の意見を取り入れて、このまま日本の舵取りを行い続けたらどうなるか？すでに菅総理は、アトキンソンの「中小企業が多すぎる」という言葉通りに、「中小企業基本法」の見直しに着手し始めていますが、このままで中小企業は半分、あるいは半分以下に減らされて、大企業ばかりとなるでしょう。さらにその日本の大企業も、これまでアトキンソンが行ってきたように、グローバル企業によって株式を食い荒らされて、実質は外資企業となるでしょう。そして竹中平蔵の思惑通りに、正社員が減って、派遣社員ばかりが増えて、『パソナ』などの人材派遣会社ばかりが儲かることでしょう。

しかも民間議員の竹中平蔵は、「ベーシックインカム」も推奨しています。竹中平蔵が述べるベーシックインカムとは、1人あたり月額7万円を無条件に受給できますが、「国民年金」や「生活保護」は廃止されます。もしも

「国民年金」や「生活保護」が廃止されたら、生活できずにホームレスになる人が、日本もアメリカのように激増してしまうことでしょう。

しかも現自民党の実質上、ナンバー2である幹事長は、親中派で知られる二階俊博です。そのためにこれまで以上に、日本は中国によって食い散らかされるかもしれません。竹中、アトキンソンという2人のブレインの意見を取り入れれば、日本経済はガタガタにされて、すでに安倍政権時代に、入管法は改悪させられているために、中国からの渡航者が激増して、いづれ日本は日本でなくなることでしょう。

## バビロニア式借金奴隷制度

今、日本人やアメリカ人として生きていく以上、莫大な税金を払いながら、「政府の借金」を強制的に返済させられることになっています。しかも「政府の借金」は膨らむばかりで、今後増税が予想されています。もしも日本人が「いやだ。自分は税金なんか払いたくない」と言って、税金の支払いを拒めば、ただ給料や財産を差し止められるだけです。トーマス・ジェファソン大統領が「銀行は軍隊よりも危険である」と述べていたように、アメリカのホームレスの数は、日本の124倍の約60万人です。

だから現在の「金融制度」のことを、「バビロニア式借金奴隷制度」と言うのです。政府が「通貨発行権」を持たずに、「政府の借金」と共に増税が繰り返されていくこの借金システムは、実は「バビロニア仕込み」なのです。

では、どうすれば良いのでしょうか？今からちょうど百年ほど昔に発売されて、ベストセラーになり、なおかつ今も人気で売られている本に、『バビロンの大富豪』という書籍があります。この本は古代バビロニアにおいて、どうすればお金と上手に付き合い、借金を返済して、お金持ちになれるか、そうしたお金との付き合い方の秘訣が書いてありました。

つまり古代バビロニアでは、「借金奴隷制度」が敷かれていましたが、しかしその一方で、その「借金奴隷制度」から抜け出す方法も、実は同時に存在していたわけです。では、ここで『バビロンの大富豪』から、借金奴隷から抜け出す秘訣をお伝えいたします。

バビロンの大富豪の7つの教え

1. 収入の10分の1は必ず貯金せよ
2. 欲望に優先順位をつけよ
3. 蓄えた金を働かせよ
4. 危険や天敵から金を堅守せよ
5. より良きところに住め
6. 今日から未来の生活に備えよ
7. 自分こそを最大の資本とせよ

結局、当たり前のことなのです。入ってきたお金を必ず貯金して、自らの欲望を抑えて大切に使い、未来の暮らしを考えて、お金を稼ぐ能力を高めるべく自分に投資していく、そして何としても自分の財産は死守する、そうした当たり前のことを行えば、借金奴隷制度から抜け出せる、そう『バビロンの大富豪』は人類に教えているわけです。

では、現代の社会はどうなっているでしょうか？「3S政策」がかなり効いているために、いつしかアメリカ人も、日本人も、自分に投資するよりも、遊ぶことにお金をかけるようになってしまっておりません。ゆとりをもって遊ぶことが悪いのではなく、収入とのバランスが大切なのですが、電車やバスの中で本を読んで、自身を高めようとしている人より、漫画やゲームに熱中している人のほうが、はるかに多く見受けられます。また自分たちが支払

った税金が、どこでどう使われているか気にもせず、「特別会計」の存在さえ知らない日本人ばかりです。つまりまったく自分の財産を死守していないわけです。だから私たちは、「借金奴隷制度」から抜け出せないのです。

いや、本当は日本に「国家の借金」など存在しないのです。ですから実は増税する必要などまったく無いのです。なぜなら現在の政府が、「国家の借金」と呼んでいるものは、それこそ詐欺であり、実は「政府の借金」だからです。そして「政府の借金」というのは、実はその大半が、国民の資産なのです。

たとえばギリシャやブラジルは、たしかに「国家の借金」であるために財政破綻しました。しかし日本の場合には「政府の借金」であるために、日本政府にお金を貸しているのが『日銀』や『みずほ』や『東京三菱UFJ』などの金融機関である以上、実は財政破綻などしないのです。『みずほ』や『東京三菱UFJ』といった金融機関にお金を貸しているのは、他ならない私たち国民です。

これを家庭にたとえるならば、ギリシャやブラジルは外からお金を借りたために財政破綻しましたが、日本はお父さんがお母さんからお小遣いを前借りしているようなものなのです。だから財政破綻もしないし、本当は増税の必要など、まったく無いのです。

しかし国民が「3S政策」などの様々な工作活動によって、政治に対して無関心にさせられているために、国民の多くが、「国家の借金」と「政府の借金」の違いが分からない状況にあります。さらには大半の日本国民が、「特別会計」の存在も知らないばかりか、「通貨発行権」の金融詐欺については、まったく理解しておりません。そのためにいつまでたっても日本人は、「バビロニア式の借金奴隷制度」から、抜け出せずにいるわけです。

実は悪魔勢力が、「3S政策」と共に流行らせて来たのがパチンコです。低レートのギャンブルに高い中毒性があることを彼らは見抜いていたのか、悪魔勢力はGHQによる日本占領期間中、歌うことを禁じていた軍歌を、わざわざパチンコ店の中だけでは流すことを許し、当時はまだ貴重であったタバコを在日朝鮮人に与えて、それをパチンコの景品にさせました。

つまり狡猾な悪魔勢力は、「バビロニア式借金隷制度」の中から、日本人を永遠に抜け出させなくさせるために、「WGIP」、「パネルDジャパン」、「3S政策」などの様々な工作活動を行ってきたわけです。彼らは、私たち日本人を、お金との付き合い方の下手な民族にしたわけです。逆を返せば、私たちが「バビロニア式借金隷制度」から抜け出すべく、様々な真実を知り、今から学び直せば、世の中は見違えて豊かになる、ということが確かに言えるのです。

## 人口を5億人まで減らしたい者たち

様々なことを述べてきましたが、この地球という星には、邪悪なる力が今も確かに働いております。

そして「1ドル紙幣」に「神聖化秩序」と書いたり、ホワイトハウスや国会議事堂を上空から見ると「フロウ」の形にしているように、私たちのことをバカにし切る彼らは、ジョージア州にわざわざ石碑まで建てて、自分たちの計画内容を我々に明らかにしています。その石碑を『ジョージア・ガイド・ストーン』といいます。この『ジョージア・ガイド・ストーン』の石板には、英語、ヘブライ語、中国語などの8つの言語、4つの古代言語から記されておられ、そこには人類に対する恐ろしいメッセージが刻まれております。

「1、大自然と永遠に共存し、人類は5億人以下を維持する」

すなわち彼らは、「家畜」と考える人類の人口を、10分の1以下にまで減らそうとしているわけです。なぜならそれが彼らにとって都合の良い管理し易い人数だからです。牧場でも、養豚場でも、家畜が多すぎると管理し切れないために、彼らは「5億人」という恐ろしい数字を導き出したのです。

「ピーチを閉鎖することは狂気」と述べたジュディ・マイコヴィッツという優秀な女性科学者は、ドキュメンタリー映画『PLANDEMIC』の中で、次のように述べています。

「世界の現状はパンデミックではない。プランデミックだ！」

良いでしょうか？「今、人類を襲っているパンデミックが、実は計画されたものであった」と、科学者が科学的立場から勇気をもって述べているのです。もちろん彼ら悪魔勢力は、映画『PLANDEMIC』を偽情報として、何としても消去しようとしています。ですから彼らの手の中にある『YouTube』では、このドキュメンタリー映画はご覧になることはできません。

しかしこのジューディ・マイコヴィッツこそ、「トランプ政権で必ずパンデミックが起こる」と予言して、トランプ大統領に様々なアドバイスを行ってきたアンソニー・ファウチ博士と真つ向から対決している人物です。彼女はかつて5年も、無実の罪で刑務所に入れられていました。ドキュメンタリー映画の中で、ジューディ・マイコヴィッツ博士はこう言っています。

「犬や豚の血液には、元からコロナウイルスが入っている。

そして牛や豚の血液をワクチンに入れる。

こうしたワクチンを2019年に中国やイタリヤで、インフルエンザワクチンとして接種させていた。」

つまり武漢の「ウイルス研究所」から流出したと言われている新型コロナウイルスですが、マイコヴィッツ博士によると、「コロナ入りワクチン」もウイルス拡散に使用されており、その発生源として中国のみならずイタリヤもあるというわけです。彼女はさらに言います。

「私の父も老人施設で肺炎で死んだが、ワクチンと医療体制の被害者だった。

ワクチンにこんな恐ろしいものをひそませるなんて、なんて卑劣なんだろう」

信じ難いことは重々、承知です。しかし実は今、世界で起きている「パンデミック」は、悪魔勢力によって計画されたものでした。その目的は経済を破壊することで、世の中から中産階級を無くし、貧困層と超富裕層のみを残した「ハイパー格差社会」を築き上げていくことです。そしてそれと共に、「パンデミック」の解決策としてワク

チン接種を人類に推し進めて、「人口削減」を行っていくことです。

## 権威への弱さが招いた人類の過ち

「ブラジルのトランプ」と呼ばれている人物に、ジャイル・ボルソナロ大統領がいます。彼はこれまで、「コロナは、ただの風邪」と主張してきました。しかし2020年7月5日にボルソナロ大統領は体調を崩し、38度の発熱があったために検査を受けたところ、新型コロナウイルスに感染していたことが判明しました。その後、ボルソナロ大統領の高熱は下がり、彼は記者の前で「調子はとても良い」と話しました。そしてボルソナロ大統領は、トランプ大統領がかねてより新型コロナウイルス治療薬として推奨している、抗マラリア薬の「ヒドロキシクロロキン」や、抗生物質「アジスロマイシン」を飲んでいると述べていました。

しかし専門家や製薬会社は、この二つの薬に対して、「どちらも新型コロナウイルスへの効果は認められていない」としています。しかしジュディ・マイコヴィッツなど複数の医師たちも、「抗マラリア薬の『ヒドロキシクロキン』は、新型コロナウイルスに効果があり、科学的根拠もすでにある」と述べています。

悪魔勢力が営む製薬会社、彼らに飼われた専門家、そして彼らと対決しているトランプ大統領、ボルソナロ大統領、科学者ジュディ・マイコヴィッツ、さて、どちらの言葉に真実があるか、どうかご自身の頭でご判断ください。

もちろん医療は、人間を不健康から健康へと誘ってくれる大切なものです。しかし癌治療から、精神医学まで、様々なことを述べてきましたが、医学に問題があることも事実です。そのために医師にして、科学者であるジュディ・マイコヴィッツは、映画『PLANDEMIC』の中で、医療従事者に対して次のように述べています。

「自分を許してあげて欲しい。

我々はベストを尽くして研究し、真実だと思って（医学を）学んだのです。

しかし真実だと言われていたデータが、そうではなかったことです。

我々が学校で教えられてきたことは、まったく科学ではありませんでした。

(権力者たちの)言われた通りにしないと、資金も得られません。論文も公開できないのです。」

ベストを尽くして学んだことが真実ではない、これは本当に悲しきことです。しかしこの医学の問題の本質は何なのでしょう？それは「権威への弱さ」だと私は思います。

確かに『WHO』には「権威」があります。あるいはその配下にあると言っても過言ではない『米国疾病予防センター(CDC)』や日本の『厚生労働省』にも「権威」があります。もしくはそれらに従っている一流大学を出たお医者さん、もしくは専門家と称する人々にも「権威」があります。

そしてそうした人々を次々と出演させているテレビマスコミにも、もちろん「権威」があります。そしてそうした人々が作ってきた教科書にも「権威」があります。そしてその「教科書」を使って授業する学校の先生にも、やはり「権威」があります。人は「権威」には弱く、そしてその「権威への弱さ」が、災いに転じることがたしかにあるわけです。しかし科学者インシュタインは言います。

「何も考えずに権威を敬うことは、真実に対する最大の敵である」

政府やマスコミが真実を大衆に伝えず、『Google』や『Facebook』も邪悪な者たちの手に落ち、そして私たち大衆が「権威」に対して弱いゆえに、政府の発表、マスコミの報道を鵜呑みにして、医学を少しも疑わなかったことで、今まさに人口削減が行われようとしているわけです。

医学は大切です。しかし権威に抗って、政府の発表、マスコミの報道、そして医学を疑うべき時が来ていることにも、私たちは気がつかなければなりません。なぜなら私たちの権威への弱さが、今現在の人類の過ちを招いている、とも言えるからです。

## 中国共産党と国際銀行家の関係

報道を見ても分かるように、『WHO』と『中国共産党』はとても仲良しです。中国・武漢発の新型コロナウイルスであり、これだけ世界にウイルスが拡散してしまつた事実を見ても、中国政府のコロナ対応には、明らかに目にあまるものがあります。しかし『WHO』は、中国共産党を常に称賛し続けてきました。なぜなら「共産思想」の生みの親であるカール・マルクスが、ユダヤ人も自称していたように、人々を「家畜」と見なす『タルムード思想』と、「人間は物質の塊である」と考える『共産思想』は、とても思想的に相性が良いからです。

中国の建国の基盤である共産思想を生みだした、カール・マルクスはユダヤ人を自称しており、人類最初の共産国家ソ連の最高指導者レーニンも、実は熱烈なユダヤ民族主義者であり、ユダヤ人を自称していました。ユダヤ人迫害を行ったスターリンにまでも、実は根強くユダヤ人説があります。元ウクライナ大使の馬淵睦夫氏も、『知ってはいけない現代史の正体』という書籍の中で、次のように述べておられます。

1917年 ロシア革命

### 通説

…「労働者・兵士が自治組織ソヴィエトを構成して革命を推進した」

歴史の真相…「亡命ユダヤ人が主導したユダヤ人を開放するための革命だった」

つまり学校の歴史教育では、「共産主義の労働者たちが、『ロシア革命』を起こすことで、共産国家ソ連は誕生した」と習うわけですが、しかしソ連誕生の「ロシア共産革命」とは、実のところ「ユダヤ革命」であつたと馬淵睦夫氏は述べているわけです。そして共産思想の創設者がユダヤ人を自称するカール・マルクスならば、マルクスに共産思想を発注した者もバリニツシュ・レヴィーというユダヤ人を自称している人物だった、という説が根強くあります。

実際に、共産思想は平等な国家を求めておりながらも、しかしソ連も、中国も、北朝鮮も、どこもかしこも「超

格差社会」となつてしまいました。つまりユダヤ人を自称する者たちによる、ユダヤ人を自称する者たちのための、ユダヤ人を自称する者たちのためのタルムード思想、それが共産思想なわけです。ですから資本主義と同じく共産主義も、結局は「平等な社会」を求めておりながらも、いつしか知らぬ間に「超格差社会」を築くことに加担してしまっているわけです。

「タルムード家畜思想と共産思想は実は同じ思想である」、このことについては、自称ユダヤ人が書いたとされている『日本人に謝りたい』という書籍でも述べられていることです。

タルムード思想とは、人々をゴイ（家畜）と考えて、ゴイには何らの財産を持たせず、言論の自由も与えず、権力者が誘導して、ゴイムには宗教も、神仏も、信仰も与えず、もしも権力に刃向うならば虐殺する思想です。その一方で共産思想とは、平等を重視するあまり、自らの手で私有財産を廃止して、その結果、支配者には独裁政治を行わせ、そのために言論の自由など無くなってしまい、権力者が洗脳教育を行って、自分から宗教や神仏や信仰を否定して、もしも政府に刃向えば粛清される思想です。つまりタルムード思想と共産思想は、一つの同じ思想を、支配者側から観るか、それとも支配される大衆側から観るか、その違いでしかなかったわけです。

国際銀行家の傀儡であったアメリカのオバマ政権が、武漢の「ウイルス研究所」に資金援助して、常に親中政権であったように、国際銀行家と中国共産党というのは、常に密かに協力体制を保ち続けています。「誘導より虐殺が簡単である」と述べたブレジンスキーの愛弟子であり、大統領候補であるバイデンにも、やはり中国共産党との深い繋がりが取り沙汰されております。

## 5Gとスーパーシテイの危険性

では、悪魔勢力は、どのような家畜社会を築こうとしているのでしょうか？科学者ジュディ・マイコヴィッツは

言います。

「5Gです。

(5Gの) 160GHzの周波数は、鉄からヘモグロビンを分離する。

すると鉄が血液に、フェリチンとして放出され、フェリチンレベルが3000以上になる。

そしてサイトカインストームが起こる」

科学的専門用語が並び、とても難解です。彼女の言葉を簡単に説明いたしますと、5Gとは「第5世代移动通信システム」のことで、4Gよりも格段に性能が向上したシステムのことです。5Gに移行することによって、これまで数十分かかっていた動画のダウンロードが、わずか数秒で出来るようになりますと言います。2020年から日本国内でも、5Gのサービスは開始されています。

しかし電子レンジが発する電磁波が、人体にとつて良くないことはすでに広く知られているように、5Gの問題は電磁波です。スイスでは5G用アンテナから出る電磁波が、健康に悪影響であるということから、全国的な反対運動に広がりしました。そのためにスイス連邦環境庁は、調査結果を発表するまで、5Gアンテナの一時停止を求め、決議を採択しています。2019年3月の時点で、世界35カ国の180人以上の科学者と医師が、5Gの普及の一時停止を求める声明を欧州委員会へ送っています。

これは「5G」ではなく、「WiFi」の話ですが、宮崎県小林市の保育園の子どもたちが、原因が分からない鼻血を出す事態が続出しました。ケガなどとは無関係に、突然、鼻血を出す子が相次ぎ、2013年9月には35人の園児が鼻血を出しました。1日に何度も鼻血が出たり、30分止まらない子もいました。

保育園の至近距離に、携帯電話の中継基地があり、保育園からわずか65Mしか離れてないビルの屋上にも巨大アンテナの基地局があり、120Mの距離にはNTTドコモの基地局もありました。保育園で保護者にアンケートを取ってみると、自宅の近くにも基地局があったり、家の中でWiFiを使用している家庭の子どもは、鼻血が多

く出ることがわかりました。鼻血などは白血病などの前ぶれの可能性があります。

しかしこれは2013年ですから「4G」です。「5G」はもっと危険なことが問題視されております。5Gとの因果関係はまだ明らかになっておりませんが、海外でが突如、飛んでいた鳥がボトボト落ちてくる異常事態まで起きております。

科学者ジュディ・マイコヴィッツ氏によれば、どうやら高性能の5Gアンテナが発する160Hzの電磁波は、私たちの体に「サイトカインストーム」という現象を起こしてしまうようです。「サイトカイン」とは、私たちの肉体の細胞から分泌される物質のことです。この「サイトカイン」という物質は本来、ウイルスや細菌などから私たちの健康を守ってくれる大切な物質だそうです。ウイルスや細菌が体内に入り込むと、健康を守るためにこの「サイトカイン」という物質が体内で分泌され、すると発熱、倦怠感、頭痛などが起こり、肉体に異常が起きることを知らせてくれます。

しかしこの「サイトカイン」という物質が、暴走して分泌し続けてしまうことがあります、それが「サイトカインストーム」であり、そして5Gアンテナが発する電磁波が、この恐ろしい現象を引き起こしてしまうと、科学者ジュディ・マイコヴィッツは言うわけです。

そして実際に日本でも、世界でも、「コロナ感染者が出ている地域」と「5Gアンテナが設置されている地域」は、見事なまでに一致するのです。

しかも新型コロナウイルスに感染しても、患者の約9割は軽い風邪程度の軽症ですが、中には39℃以上の高熱や筋肉痛などの症状が出ることもあり、回復するのに1週間ほどかかる場合があります。その一方で、ごく稀に肺炎の症状がひどくなって呼吸困難にお陥り、死亡することもあります。この場合、「サイトカインストーム」が起きている可能性があるわけです。

私たちが政府とマスコミに踊らされて、マスクをしているこうしている今も、5Gアンテナは、日本および世界

中に設置され続けています。4Gとは言い、宮崎県小林市で起きたことが、東京はじめ日本中で起こらないと、どうして断言できるでしょうか？

単純に言つて、5Gアンテナを都会の街中に設置しまくるということは、街という街を「微弱な電子レンジ」へと変えてしまう可能性があるわけです。しかし電子レンジでお弁当や冷凍食品を温めるのは、わずか数十秒から数分で済みますが、いくら「微弱の電子レンジ」と言つても、私たちがそこに何十年と住み続ける以上、5Gアンテナを街中に設置しまくることが、いかに危険であるか分かるはずで。

ちなみにいつの間にか電力メーターがスマートメーターに変えられていることがよくありますが、この電力メーターは5Gを使用しているものです。ですから電力会社に電話して、従来の電力メーターに戻してもらったほうが良いでしょう。

科学者ジュディ・マイコヴィッツの主張を簡単にまとめますと、「中国やイタリアでは、コロナウイルスが混入したインフルエンザワクチンが大勢の人に打たれていた。しかし危険なのは5Gであり、5G（アンテナ）が発する電磁波が、人体にサイトカインストームを起こす引き金になってしまう」ということです。

## 本当のスーパーシティ構想の目的

すでに述べましたように、ウイルスや細菌の病原体を調べるステップとして、「コソホの4原則」というものがあり、大橋眞徳島大学名誉教授によれば、新型コロナウイルスの研究は、まだ「第一ステップ」さえ超えていないそうです。そうであるにも関わらず日本政府は、「Withコロナ」とか、「新生活様式」などということを言い始めました。つまり政府は、「オンライン帰省」、「買い物は通販」、「飲食は宅配」、「仕事や勉強は在宅」、「飲み会もオンライン」、「会話はマスク着用」などと、訳の分からないことを言い始めているわけです。それは

まさに人と人を切り離すものであり、家族や友人、仲間の絆を壊さんとするものであり、そしてまさに悪魔が喜ぶ生活です。

そして日本では、「緊急事態宣言」によって国民の目がコロナに集中している4月、5月に、「スーパーシティ法案」が衆参両議院でスピード可決されました。「スーパーシティ」とは、AI（人工知能）とビッグデータを活用して、自動運転、キャッシュレス、オンライン医療、オンライン教育などを実現させた「未来都市」のことです。この法律は、令和2年6月3日に公布され、公布から3カ月以内に施行されます。つまりすでに「スーパーシティ構想」は開始されているわけです。

2020年3月18日の「国家戦略特区諮問会議」では、「スーパーシティ構想」の資料として、中国の杭州市がモデルにされていました。この杭州市では市内の43%をカバーする4千台超の監視カメラが設置されており、もしも何かトラブルがあれば、AI（人工知能）が約20秒という速さで警察に通報します。すでに杭州市のコンビニは無人化しており、キャッシュレスとなり、PASMOやスマホすらも必要としません。なぜなら商品をレジに運んで顔認証すれば、それで支払い完了だからです。杭州市内のホテルもルームキーは不要で、顔認証によって、自分が宿泊している階にしかエレベーターは止まりません。

こうした「顔認証」と「監視カメラ」が行き届いた中国・杭州市をモデルに今、日本政府は「スーパーシティ構想」を押し進めているわけです。だから菅政権は、「デジタル庁」を設置して、「脱ハンコ」、「デジタル化」などと述べているわけです。そしてこの「スーパーシティ」を現実のものにするために、すでに5Gアンテナが街とこの街に、設置され続けているわけです。

## 「チップ埋め込み」を企む者

そして何よりも見逃せないこととして、支配欲にかられた悪魔勢力が、我々にワクチンを強制的に接種させて、「チップを埋め込みたい」とまで考えていることです。米国の大物弁護士ダーショウウィッツという人物は言いま

す。

「どうしても嫌ならワクチンを打たなくてもいい。

その代わり外出の自由はない」

2020年5月、ビル・ゲイツも次ぎのように述べています。

「ワクチン無しに日常は戻らない」

「ワクチン開発のためなら、自分は数千億円を無駄にしても構わない」

「誰がワクチンを接種したのかを示す、何らかのデジタル証明書を手にすることになる」

菅政権はワクチン接種の法案として、2020年10月下旬には、「努力義務」と法的に決定します。「努力義務」というのは、「○○しましょう」と国民に呼びかけるだけであって、たとえ政府の呼びかけに無視したとしても、法的な罰則はありません。

しかし日本では、悪魔の傀儡と化す政府を信じている人が大勢おります。そのために政府がコロナワクチン接種を呼びかければ、多くの人が自分からワクチンを接種することでしょう。そして多くの人がコロナワクチンを接種すれば、いずれは「強制接種」という時代だって作りかねられません。ちなみにこの「努力義務」という政府の呼びかけによって、子宮頸がんワクチンを接種して、副反応に苦しむ少女たち大勢いるのです。

すでに今現在、マスクをして、検温を受けないと入れない店舗やパートがあります。このマスクや検温に代わって、「ワクチン接種電子証明書」が登場する日もやってくるかもしれません。たとえば映画館に出かけて、あるいはオリンピックのスポーツ会場に出かけて、「ワクチン接種電子証明書」を持たないと、中に入れてもらえない世の中は、もうすぐそこかもしれません。

そして数年後、もしもワクチン接種をしていない人がデパートやスポーツ会場に入ったなら、監視カメラによる顔認証システムによって、即座に発見され、警報が鳴って、係員に連れ出されてしまうかもしれません。

「そんなバカな！いくら何でもそこまでは！」と、どうして言えるでしょうか？2019年の夏に「来年の夏には、日本中の人々が猛暑日でもマスクを付けて過ごしている」と聞かされて、果たして誰がそのことを信じられたでしょうか？

そして自分からワクチン接種した人々が、「ワクチン接種していない人とは関わりたくない」、「ワクチン接種していない人は自己中心的で世の中のことを考えていない」、「ワクチン接種をしていない人は家から出かけないで欲しい」と、マスコミを通じて言い始めて、ワクチン差別が始まる可能性も十分にあります。

すでに電車などの交通機関の中で、マスクをしていないと白い目で見られるように、このままではワクチンを接種していない人が、白い目で見られる日はそう遠くはないでしょう。そうなってしまえば、ワクチンを打たない者はただ外を歩いているだけでも、監視カメラ・顔認証システムによって警報が鳴り、警察に連行されてしまう時代さえ来てしまうかもしれません。

## 彼らが描くデストピア社会

「スーパージティ構想」とは、AIとビッグデータで生活全般を便利にした未来都市だそうです。この「ビッグデータ」という名前は、単なる偶然なのでしょう。なぜならジョージ・オーウェルという作家が描いたデストピア社会小説『1984』、この小説で描かれている世界は、「ビッグ・ブラザー」と呼ばれる独裁者によって支配された全体主義国家だったからです。小説の中の市民の思想や言動には、厳しい規制が加えられており、巨大なスクリーンで常に監視されていました。それはまさに『新約聖書』の『ヨハネの黙示録』で予言されていた暗黒の時代です。『ヨハネの黙示録』にはこう記されています。

「この刻印のない者は皆、物売ることも買うこともできないようにした。」

この刻印はその獣の名、またはその名の数字のことである。ここに知恵が必要である。賢き者は獣の数字を解くがよい。

その数字とは人間であり、そしてその数字は666である。」——『黙示録』第13章17-18節  
さて、『ヨハネの黙示録』が述べる「獣の数字666」とは何を意味し、誰を指しているのでしょうか？

すでにご紹介いたしましたように、『ヨハネの黙示録』にはこうあります。

「あなたの見た獣は、昔はいたが、今はおらず、そして、やがて底知れぬ所から上つてきて、ついには滅びに至るものである。」

地に住む者のうち、世の初めから、いのちの書に名をしるされていない者たちは、この獣が、昔はいたが今はおらず、やがて来るのを見て、驚きあやしむであろう。《中略》

昔はいたが今はいないという獣は、すなわち第八のものであるが、またそれは、かの七人の中のひとりであつて、ついには滅びに至るものである。」『ヨハネの黙示録』十七章

この中で言う「かの七人の一人」とは、「七大天使」としての一人で「ルシフェル」と呼ばれていましたが、神に嫉妬して、墮天して、地獄に墮ちたために、「エル」の名を取られ、「ルシファー」と呼ばれている悪魔のことです。

つまり「獣の数字とは人間であり、その数字とは666である」とは悪魔のことを意味しており、「刻印無き者は物を売ることも買うこともできなくなった」とは、悪魔の管理社会を意味しているわけです。

大きな牧場で牛などの家畜を管理する場合、牛の耳にバーコード入りのタグを着けることがよくあります。そしてこれとまったく同様なことが、実は今、「マイナンバー制度」と共に、人間にも始まるうとしております。

すでに世界では、体の中、特に手にチップを埋め込んで、そこに内蔵されたバーコードを読み取って、ドアのセキュリティロックを解除したり、自販機で買い物したりすることが、企業単位で行われております。自動販売機用

のソフトウェアを開発している米 Wisconsin 州の『スリー・スクエア・マーケット』も、「マイクロチップ」を人体に埋め込む技術を社員に提供しています。マイクロチップを体内に埋め込んだ社員は、社内では手をかざすだけで様々な部屋に入退室することができて、自販機も使えて、コンピュータにログインすることもできます。あるいはスウェーデンでは、すでに国家規模で、「体内埋め込み型マイクロチップ」が利用され始めています。『スウェーデン鉄道』は世界で初めて、乗客の体内に埋め込まれたマイクロチップを、乗車券の代わりに利用できるシステムを2017年5月から導入しております。

トランプ大統領が中止にしましたが、オバマ元大統領が推し進めていた「オバマケア」も、実は米国民にチップを埋め込むことが、どうやら密かな目的として入っていたようです。この「オバマケア法案」は3千ページを超える法案であり、しかも補足条項を加えると2万ページにもなります。そのために「オバマケア法案」のすべてを把握することは困難です。しかし米国民のリンゼイ・ウイリアム氏は、「オバマケア」の分厚い議案書の中に、とんでもない条項がひそんでいることに気がつきました。彼は言います。

「1014 ページ目の『HR 4872 法案』をご覧ください。」

『National Medical Device Registry』という部分に書かれています。

これによればクラス2のデバイスをインプラント可能と書いてあります。」

つまり3万ページもあるために、ほとんどのアメリカの政治家をはじめ、アメリカ国民が見落としていたわけですが、「オバマケア」の1014 ページには、こっそりと「チップ埋め込み」という文言が記載されていたわけです。

「バーコード」というものは、黒線の種類、太さによって数字を表現しており、その数字の組み合わせを読み取っています。そして流通商品に必ず付いているバーコードとして、通称「商品バーコード」というものがあります。この「商品バーコード」は、日本では「JANコード」、世界では「EANコード」と呼ばれ、広く流通されてい

る商品には、必ずこのバーコードが付いています。

そして「図書コード」のような特殊なバーコードではなく、世界中で使用されている「商品バーコード」には、実は必ず「666」という獣の数が入っています。「666」の数字そのものは明確には記されておりませんが、「商品バーコード」には、左右の両端と真ん中に「6」を現している同じ太さの2本の黒線が必ず記されているのです。「6」を現す数字は同じ太さの棒線が2本です。そして「JANコード」や「EANコード」には、この「6」を現す棒線2本が、かならず左右両端と真ん中に在るわけです。

つまりどうやら悪魔勢力は、『ヨハネの黙示録』という予言書にもあるように、「666のバーコード入りチップを埋め込まない刻印無き者は、物を売ることも買うこともできない」、そんな新たな世界秩序を築こうとしているようです。

『スペースX社』という巨大企業は、2018年の初めに、国家規模に匹敵するほどの「ロケット打ち上げを成功させました。この『スペースX社』と『テスラモーターズ』を営むイーロン・マスクという人物も、どうやらビル・ゲイツと同じような思考を持つ人物で、あちら側の人間です。そんな彼は「人間の脳にチップを入れる日も近い」と語っています。つまり彼らは、私たちの脳にチップを埋め込むことで、私たちの思考まで管理、監視したいわけです。

これは『Facebook』のCEOマーク・ザッカーバーグが現在、開発に取り組んでいる「脳から考えをダイレクトに出力するシステム」と同じ目的です。イーロン・マスクによれば、「この脳のチップ導入を、レーシック手術くらい手軽で、安価なものにしたい」と語っています。イーロン・マスクは言います。

「来るべき未来を生き残るために人間をサイボーグ化する必要がある。」

ですからこのまま時代が進めば、「獣の数字666の刻印無き者は物を買うことも、売ることもできなくなつた」という時代になってしまうでしょう。

もしもそんな時代が来たら、私のように「パンデミックはプランデミックだ」などと述べていたら、精神病院に入れられて、薬漬けにされて、廃人にされてしまうかもしれません。それはまさにジョージ・オーウェルが描いたデストピア小説『1984』の世界です。

## ムーンショット計画の本当の意味

さて、すでに始まっている「新生活様式」と「スーパーシティ構想」ですが、その先に待ち受けているのは、本書の冒頭で述べた「ムーンショット計画」です。

冒頭でも述べましたが、あえてもう一度、言わせていただきます。「コロナ騒ぎ」↓「ワクチン接種」↓「新生活様式」↓「スーパーシティ構想」↓「ムーンショット計画」というこの流れは、陰謀論でも都市伝説でも何でもなく、公の事実です。

では、『ムーンショット計画』の真の狙いとは、果たして何なのでしょう？内閣府がホームページ上で公表している目標計画では、「環境」とか、「医療」とか、「教育」とか、「食糧」とか、いろいろなことを述べて、それがまるで国民のためになるかのように語っております。しかしその前提として「ロボット」、「AI」、そして「アバター」が存在することを忘れてはなりません。

ですから『ムーンショット計画』の最初の目標を見れば、彼らが何を目的としてこの計画が進められているか、それが簡単に分かるのです。

「ムーンショット目標1…2050年までに、人が身体、脳、空間、時間の制約から解放された社会を実現」

そしてこの目標の補足として、以下の言葉があります。

「2050年までに、望む人は誰でも身体的能力、認知能力及び知覚能力をトップレベルまで拡張できる技術を開

発し、社会通念を踏まえた新しい生活様式を普及させる。」

この2つの言葉を合わせるとこうなります。「人間を肉体や頭脳から解放し、時間や空間からも解放し、なおかつ望む人には身体能力や認知能力を最大限まで拡張させる」。もしもそんなことが可能ならば、それは私たち人間が現実世界から逃避するかのように、仮想空間の中で生きるような、そんな恐ろしい時代が到来することを意味しております。

すでに政府は「新生活様式」として、家族や友人との食事やオンラインを国民に勧めておりますが、そのレベルではないということです。学校に行くのも、旅行に行くのも、買い物に行くのも、友達と出かけるのも、それぞれの国民が自宅で自分のアバターを使って、仮想空間の中で、学んだり、遊んだりする時代を到来させる計画、それが『ムーンショット計画』なわけです。

大人にも人気なゲームに、『あつまれ どうぶつの森』というゲームがあります。外出自粛が続くために、このゲームに夢中になる人が増えており、発売からわずか10日間で約260万本も販売しました。

このゲームでは、プレイヤーは架空の世界にある無人島で気ままに、スローライフを暮らすことができます。その仮想空間の中で、自分だけのオリジナルの島を少しずつ発展させて、近所の人と話をしたり、買い物をしたり、手紙を書いたり、好きなことができます。ゲームの仮想空間の中では、現実世界のように、晴れの日もあれば雨の日もあり、天気によって出てくる魚や虫の種類も変わります。そればかりかこのゲームでは、仮想空間の中で四季も楽しめて、春には桜が咲き、夏には蝉の音が響き、秋にはススキが風になびき、冬は雪景色を楽しめます。それが人気ゲーム『どうぶつの森』です。

『どうぶつの森』はゲームですが、政府は『ムーンショット計画』によって、このゲームの中の仮想空間を実際の人生に当てはめてしまおうと、言っているわけです。たしかにVRというバーチャル・リアリティを使い、仮想空間の中でアバターを動かせば、自宅にいながら、学校に行く疑似体験をして勉強することも、職場に行く疑似体

験をして仕事することも、旅行に出かける擬似体験をして遊ぶことも出来てしまいます。買物に行く擬似体験すれば、後からAmazonが商品を届けてくれます。

しかしそれはまるで、スピルバーグ監督の映画『レディ・プレイヤー1』のようです。この映画の舞台は近未来の2045年、地球にはおびただしい環境汚染が起こり、政治機能は麻痺しており、世界そのものが荒廃してしました。そのために人類の大半が、スラム街で暮らさなければならぬ状況に陥り、人類の多くが「オアシス」と言うVRの仮想空間で、現実逃避して入り浸っていました。映画『レディ・プレイヤー1』の舞台は2045年でしたが、悪魔にからめとられた日本の政府は、すでに始めている「ムーンショット計画」によって、2050年に、この映画を現実のものにしようとしている、そういった見方もできるはずで。

デジタル化も極端まで行けば、仮想空間の中でアバター同士でお見合いをして、デートをして、結婚して、別々に暮らすことだって始まるかもしれません。一度も会ったことのない夫婦も、もしかしたら世の中に現れるかもしれません。しかし仮想空間の中で、ただ現実世界を擬似体験するだけでは、何とも味気ありません。そこには人間としての温もりが欠け、愛も足らないことでしょう。しかし悪魔からすれば、温もりや愛が無い心貧しい世界こそ、素晴らしいわけです。

つまり人間が生きているのか死んでいるのか分からない時代を到来させる悪魔的計画、それが『ムーンショット計画』なわけです。それはまさに映画『マトリックス』の世界です。悪魔勢力はこの地球上に「家畜牧場」を築きたいわけですが、その「家畜牧場」とは、まさに現実世界では、人間が生きているのか死んでいるのか分からない暗黒の時代なわけです。

すなわち悪魔勢力は、すでに「バビロニア式借金奴隷制度」の中で生きている私たちのことを、さらに「仮想空間」という牢獄の中に押し込んで、そしてその中に永遠に閉じ込めたいわけです。

## 精神医学の本当の目的

では、悪魔勢力が築かんとしているデストピア社会を、もう少し具体的に述べてみたいと思います。『タルムード』も、『共産思想』も、共に同じ思想を見ていると述べましたが、この二つの思想の共通点は、「共に精神医学を推奨している」ということです。「うつ病キャンペーン」、「発達障害キャンペーン」が行われたことで、すでに日本にも約420万人もの精神疾患に悩む日本人がおります。人口の多い共産国家の中国では約2.3億人が精神疾患に苦しんでいます。

では、日本や世界で「精神医学」を流行らせてきたのが誰かと言えば、それは間違いなく悪魔勢力と言えるでしょう。なぜなら「精神医学の目的」を見れば、それがよく分かるからです。1940年代に『世界精神保健連盟』という組織が誕生し、この組織は『WHO』の中にも入り込んでいます。この会長にブロック・シチオルムという人物がいましたが、このブロック・シチオルムこそ、『WHO』の初代会長です。この人物は、「共産主義者であった」とよく言われていますが、しかし「共産主義者であった」というよりも、むしろ「タルムード主義者であった」と考えるべきでしょう。そしてこのブロック・シチオルムは、『世界精神保健連盟』の初代会長として講演を行い、次の7つの目標を掲げました。

- 第1 憲法の破壊
- 第2 国境の破壊
- 第3 誰でも拘束できる社会
- 第4 合法殺人の権利
- 第5 すべての宗教の撤廃
- 第6 性道徳の破壊

## 第7 学校での薬物常用によって未来のリーダーを奪う

この悪魔的も言える7つの項目は、1943年にホワイトハウスで行われた講演記録により、公式に残っている記録であり、音声記録も存在しています。あるいは1945年10月、『世界精神保健連盟』初代会長ブロック・シチョルムはワシントンD・Cで次のように言います。

「世界を支配するために、人々の心から排除すべきものは、個人主義、家族のしきたりへの忠誠、愛国心、宗教的な教義である」

はつきり言って現在の精神医学は、愛国心や宗教を排除することを目的としているのです。それではブロック・シチョルムが掲げた7項目を、一つずつ見ていきたいと思えます。

「第1 憲法の破壊」は、日本が先の大戦に敗れたことによって、これまで行われてきたことです。

「第2 国境の破壊」は、多国籍企業によるグローバル化と、中国共産党が行っている「一带一路」によって、すでに押し進められています。一方で、彼らと戦っているトランプは、アメリカの国境に壁を建設しており、反中国の姿勢を崩しません。そのためにトランプは、フェイク・ニュースで叩かれ続けております。

「第3 誰でも拘束できる社会」は、精神医学の流行と精神病院の設置によって、今まさに実現しつつあります。もしもこのままワクチン接種の電子証明書の所持が義務化されてしまったら、かなりこの目標も完成すると言えるでしょう。

「第4 合法殺人の権利」、これはまさに歯向かう家畜を屠殺する社会です。さすがに日本では、まだここまで到達していません。しかし彼らは、最終的にはそこまで目指しているわけです。実際に中国では、政府に歯向かう者はことごとく殺されてしまっています。

「第5 すべての宗教の撤廃」は、悪魔教徒たちが精神医学を流行させることで、これまで行われてきました。悪魔は神仏への信仰を消滅させて、人々の精神性を下げたいわけであり、これは今なお行われていることで

す。

「第6 性道徳の破壊」は、3S政策の一つとして、今も続いております。すでに述べましたように、いつしか日本の若者たちの性意識は、かつてとはまったく異なるものになりました。

「第7 学校での薬物常用によって未来のリーダーを奪う」は、現在進行形で行われております。精神医学の立場からすると、坂本龍馬やエジソンなどの英雄や偉人たちは皆、「発達障害」に値するそうです。ですから彼らは、今なお日本の小中学校で、「発達障害の早期発見」、そして「向精神薬の処方」というカタチで、未来のリーダーを薬漬けにしております。

『世界精神保健連盟』初代会長ブロック・シチョルムの言葉や目標を見れば分かるように、まさに精神医学の目的そのものが悪魔的です。表現を変えれば、精神医学そのものが「悪魔教」という見方さえできます。そして先の敗戦以降、悪魔勢力の手先と化してきた日本政府は、日本で「精神医学」を流行らせていくことによって、日本人の精神そのものを破壊してきたわけです。

アメリカやヨーロッパでは、「ロックダウン反対のデモ」が始まっております。あるいはドイツでは一時期、「ワクチン強制接種」の法整備が決まりましたが、しかしドイツ国民が立ち上がることによって、「ワクチン強制接種」は無くなりました。このドイツのデモについて、日本のマスコミは「2万人規模のデモ」と報じましたが、どうやら「100万人規模のデモ」が行われたようです。世界では目覚め始めている人々が、確かに大勢おります。

しかし日本はどうでしょうか？ 残念ながら日本では、未だに無関心の人のほうが多い状況にあります。すなわち日本人が眠っているわけです。その原因は「WGIP」、「パネルDジャパン」、「3S」、さらには「精神医学の流行」によって、日本人の精神が眠らされているからです。

## トランプ革命進行中

すでに述べましたように、ドナルド・トランプは大統領選挙に勝ち、ホワイトハウスに入ると、アンドリュー・ジャクソンの肖像画を飾りました。アンドリュー・ジャクソンと言えば、歴代アメリカ大統領の中でも破天荒で、なおかつ初めて暗殺計画に遭いながらも、むしろ中央銀行を閉鎖に追い込んだ大統領です。

トランプは、大統領になった翌年の2018年、ユダヤ人を自称しているジャネット・イエレンがFRB議長を続投することを望まず、ジェローム・パウエルという人物へとFRB議長を変えました。実はこれによって初めて、ユダヤ人を自称していない人物が、FRB議長になったとも言われております。国際銀行家たちによるその仕返しなのか、パウエルが新議長に就任した2月5日、株価が666ドルも暴落しました。

「トランプ革命」の本当の意味、それは「1%VS99%の対決」における99%の大衆側の勝利だったのです。それはトランプ大統領の就任演説を見れば、歴然です。

「あまりにも長い間、ワシントンにいる一部の人たちだけが、政府から利益や恩恵を受けてきました。その代償を払ったのは国民です。」

ワシントンは繁栄しましたが、国民はその富を共有できませんでした。

政治家は潤いましたが、人々の職は失われ、工場は閉鎖されました。

権力層は自分たちを守りましたが、アメリカ市民を守りませんでした。

彼らの勝利は、皆さんの勝利ではありませんでした。彼らは首都ワシントンで祝福しましたが、アメリカ全土で苦しんでいる家族への祝福は、ほとんどありませんでした。【中略】

私は全力で皆さんのために戦います。決して失望させません。アメリカは再び勝利します。

これまでにない勝利です。雇用を取り戻し、国境を回復し、富を取り戻し、そして、夢を取り戻します。アメリカを再び偉大な国にします。ありがとうございます。皆さんに神の祝福がありますように。

そしてアメリカに神の祝福がありますように。ありがとうございます。アメリカに神の祝福あれ」

トランプ大統領のこの演説の中にはこうあります。「権力層は自分たちを守りましたが、アメリカ市民を守りませんでした。彼らの勝利は、皆さんの勝利ではありませんでした」と。(The establishment protected itself, but not the citizens of our country. Their victories have not been your victories; their triumphs have not been your triumphs;) 上の Establishment(エスタブリッシュメント)(権力層)「こそ」「1%の超巨大な企業」であり、彼らのことを「グローバリスト」とも呼び、彼らこそトランプが「デープ・ステート(陰の政府)」と呼ぶ者たちであり、その中枢が悪魔勢力・国際銀行家なわけです。

アメリカはたしかに今、革命の最中にあります。「政治の闇」、「医療の闇」など見てくると、心が暗く落ち込みがちですが、しかし勝利の革命はすでに始まっており、もはや革命は起きているのです。すでに述べましたように、トランプ大統領は「沼の水を抜け(Drain The Swamp)」という比喻を使って、「彼らを排除せねばならない」というメッセージを発信し続けています。ボウフラがわいて、悪臭を放っている「沼」のイメージと、腐敗した既得権益者のイメージを重ね合わせているわけです。

そして実際にトランプ大統領は、2020年4月、『FRB』を実質上、国有化することに成功したと言われております。つまりトランプは、偉大な歴代アメリカ大統領たちの悲願である「通貨発行権」をロスチャイルドから取り戻したのかもしれないわけです。その証拠に、いつの間にか『FRB』の公式ページのドメインが「組織」を意味する「org(オーガナイゼーション)」から、「政府」を意味する「gov(ガバメント)」に変わりました。

また、1913年に『FRB』が創設されて以来、初めてのことですが、『FRB』がコロナで苦しむ一般市民のために、現金を配り始めたのです。成人一人当たり1200ドル(13万円)、子どもは500ドル(6万円)、4人家族の場合は一家庭当たり3400ドル(約37万4000円)が、『FRB』からアメリカ国民に支給されました。『FRB』が戦争のためではなく、国民のためにお金を発行したのは、アメリカの歴史上、始まって以来

の出来事です。

そして日本も金融侵略から脱却すれば、日本人がお金の主人となって、見違えて豊かな暮らしを実現できるでしょう。すでにご紹介いたしました、自動車王ヘンリー・フォードが「もし人々が銀行や金融の仕組みを理解したら、明日の朝までに革命が起こるだろう」と述べ、経済学者ケインズが、「100年後には、経済的問題は解決され、人々の悩みは時間をどのように使うかになるだろう」と述べていたように、あとは私たちの意識さえ変われば、私たちの暮らしは、本当に根本から見違えて変わるのです。

なぜなら本当に日本人の意識さえ変われば、「特別会計」を廃止し、「通貨発行権」を取り戻すことは可能だからです。そしてもしも「特別会計」を廃止し、「通貨発行権」を取り戻すことができれば、消費税を無くすばかりか、その他のありとあらゆる税金を無くしていくことも可能です。

「特別会計」を廃止し、「通貨発行権」を取り戻したら、どんな世界が待ち受けているのか、日本および世界人類が、今まさにそれを知る必要があるのです。

## リビアのカダフィが成したこと

では、ケインズが予言されたように、もしも経済の問題をすべて片付けたら、どのようなことが起こっていくのでしょうか？

「経営の神様」とも称された『パナソニック』創業者の松下幸之助氏は、1979年11月に行なわれた講演で、次のように語っていました。

「国民は高率の税金に苦しんでいる。にもかかわらず政府は財政窮迫し、赤字国債を発行して国費に充てているという前途(ぜんと)暗澹(あんたん)たる状態である。」

しかし、今から120年を使えば、日本は無税国家に変わる。

この20年で研究し、その後の100年で余剰金を積み立てて運用すれば、積立額は膨大になり、その運用益だけで予算を賄える。」

「経営の神様」が「120年かければ無税国家は実現できる」と述べたのですが、しかし120年も要らなかったのです。「特別会計」を廃止し、「通貨発行権」を取り戻せば良いのです。その他にも松下幸之助氏は、「分配国家を目指そう」といったことも述べておられました。が、「収益分配国家」とは、国民が国家にお金を支払う税制システムではなく、逆に国家が国民にお金を支払う税制システムのことです。そして実際にかつて世界には、「通貨発行権」を国際銀行家から守り抜くことで、とても豊かな暮らしを実現した国がありました。それがリビアという国です。

日本やアメリカなどのマスコミによって、トランプやプーチン、あるいはフセインと共に「独裁者」に仕立て上げられてきたのが、このリビアという国のカダフィという人物でした。しかし実は彼こそ、自国の「通貨発行権」を国際銀行家から守り抜くばかりか、自国で採れる石油の輸出で得たお金を、国民のために使うことによって、夢のような大繁栄の時代を築いたのです。

以下が、かつてのリビアの人々の暮らしです。

### 『かつてのリビアの暮らし』

1. 電気代の請求書が存在しない。電気は全国民、無料。
2. 融資には金利がなく銀行は国営で、全国民に対して与えられる融資は、法律で金利ゼロ・パーセント。
3. 住宅を所有することが人権と見なされている。
4. 全て（違うという意見もあり）の新婚夫婦が、新家族の門出を支援するため、最初のアパート購入用に政

府から60,000ディナール(50,000ドル×80円)←500万円)を受け取る。

5. 教育と医療は無償。国民の識字率は83パーセント。

6. 農園を始めるための、農地、家、器具、種、家畜が、全て無料で与えられる。

7. 政府が外国に行くための資金を支払い、さらには実費のみならず、住宅費と自動車の経費として  
2,300ドル(23万円)／月、支払われる。

8. 自動車を購入すると政府が価格の50パーセントの補助金を出す。

9. 石油価格は、リッターあたり、0.14ドル(約14円)。

10. 対外債務は無く、資産は1500億ドルにのぼる。

11. 卒業後、国民が就職できない場合は、本人が雇用されているかのごとく、特定職業の平均給与を、職が見つかるまで国が支払う。

12. 石油のあらゆる売上の一部が国民の銀行口座に直接振り込まれる。

13. 子どもを生んだ母親は、5,000ドル支払われる。

14. パン40斤が0.15ドル(10円ほど)。

15. (国民の)25パーセントが大学の学位を持っている。

16. 人工河川計画として知られる世界最大の灌漑プロジェクトを26年かけて遂行した。

リビアは「無税国家」を超えて、「配当国家」を実現させた素晴らしい国でした。しかし実際には日本のほうがリビアよりも豊かな国である以上、日本ならばリビア以上に豊かな国になれることでしょう。しかしこれを読まれている方は言うかもしれません。「リビアが配当国家を実現できたのは、純度の高い質の良い石

油があつたからではないのか？日本には技術はあつても、資源が何も無いのだから、日本が配当国家になることは、やはり難しいのではないのか？」と。

いや、日本はリビア以上の国になれます。たとえば日本には「レアアース」があります。「レア」、これは「珍しい」、「貴重」という意味ですが、言葉の通り「レアアース」は貴重な金属であり、液晶テレビ、パソコンのハードディスク、ハイブリッド車、エアコンや冷蔵庫のモーターなど、これからの時代には欠かせない貴重な金属であり、なおかつ採れる量の少ない希少な金属でもあります。たとえば最も多く取れる「粗鋼」という金属は、私たちがいわゆる「鉄」と呼んでいる金属の主成分で、年間に12億トンも採れます。これに対して「レアアース」は、年間にわずか12万トンしか採れません。実にその差は「1万倍」です。

しかしなんと2018年4月に、日本の最東端にある南鳥島みなみとりしまの周辺で、この「レアアース」が1600万トンも見つかったのです。これは世界の需要で、数百年分に値する量です。これまで「レアアース」は中国が最大の輸出国でしたが、なんと日本で見つかった「レアアース」の埋蔵量は、その中国の20倍でした。

このニュースは『産経』や『読売』もわずかに報じましたが、しかし未だに多くの日本国民がこの事実を知りません。オリンピックで日本代表が金メダルを取ることで号外を出すのも良いのですが、しかし私たちの暮らしと未来に直接、繋がりがあろうとしたニュースこそ、マスコミは号外を出すべきではないでしょうか。

しかも「レアアース」を抜きに考えても、本当は石油や原子力に代わるエネルギーなど、いくらでも地球にはあるのですが、しかし石油利権と原発利権を握る悪魔勢力が、そうしたエネルギーを使用することを阻んでいるのです。ですから後は本当に私たちの「意識」の問題なのです。それは言葉を変えれば、日本人お一人、お一人が侍精神を持って、繁栄の時代を切り拓くべく立ち上がるということです。

リビアの人々はかつて言いました。「リビアは日本より貧しい。しかしリビア人は日本人よりも豊かである」と。しかしリビアのカダフィは、国際銀行家たちの前に敗れてしまいました。トランプ以前のNATO（実質は米国主導の軍隊）によって、リビアの街は爆撃され、リビアの人々の暮らしは、原始時代の暮らしに逆戻りさせられてしまったのです。これを取り仕切ったのは、トランプと大統領選で対決したヒラリー・クリントンであり、つまりは悪魔勢力でした。

私たち日本国民が待精神を取り戻し、日本を金融植民地から解放させることができれば、日本はリビアよりも遙かに豊かな国へと発展していくことができるでしょう。そして日本がそれだけ豊かな繁栄国家になれば、日本こそがアメリカを抜いて世界のリーダー国となり、世界を変えることさえできるのです。「日本がリーダー国になって世界を変えるなんて信じられない」、そう思われる方は多いかもしれませんが。しかしそれこそ長きに渡る悪魔勢力から日本人への洗脳なのです。

「悪魔勢力最大の離反者」と呼ばれる人物に、レオ・ザガミという人物がいますが、彼は言います。「悪魔勢力は日本を神の国と認定し、最大敵国と認識している」と。実のところ私たちの国、日本こそ悪魔勢力が最も恐れ、そして世界のリーダー国となって、世界を牽引していける誇る国家なのです。

## 経済学という驚くべき虚構

さて、「精神医学」には多くの問題があることは、すでに述べてまいりましたが、問題がある学問として、やはり「経済学」があります。「自動車王」ヘンリー・フォードが、「この国の人々の銀行や金融への不理解はもうたぐさんだ。もし金融の仕組みを理解したら、明日の朝までに革命が起こるだろう」と述べていたように、「金融」および「経済学」を理解することが、人類にとって大切です。

同志社大学の元教授・山口薫さんは、「世界のトップ10に入る」と言われているカリフォルニア大学バークレー校で、ノーベル経済学者のジェラルド・ドブルーやジョージ・アサー・アカロフといった、世界に名だたる経済学者たちから、経済学を学んでこられました。まさに彼は最先端の経済学を学んでこられた人物です。

その彼が、自身の著書『公共貨幣』の中で、次のように述べています。

「現在の経済学では中央銀行については何も教わることはなく、また現在の貨幣制度というものは、我々が教えて頂いた経済学とはまったく異なり、中央銀行が無からお金を創り出している。」

世界一流の経済学を学ばれた同志社大学の元教授が、「学んできた経済学と実際の経済はまったく異なっている」と述べている、これは驚愕の事実です。

実は東大だろうが、オックスフォード大学だろうが、ケンブリッジ大学だろうが、カリフォルニア大学だろうが、世界中のどこの一流大学だろうとも、経済学の授業において、「中央銀行」と「通貨発行権」というこの大問題はスルーされてきました。そして山口薫氏がこの経済のタブーについて切り込むと、彼は同志社大学を解雇されてしまったのです。

同志社大学の元教授である山口薫氏が、「学んできた経済学と実際の経済はまったく異なる」と述べているように、実は経済学そのものに大きな問題がありました。オックスフォード大学大学院、東京大学大学院にて経済学を専攻し、今現在はいギリスのサウサンプトン大学にて教授を務められている経済学者に、リチャード・ヴェルナーという方がいます。彼は著書『虚構の終焉』の冒頭で、次のように驚くべきことを述べています。

「経済学はフィクションであり、人々から宗教のように信じられているが、まさに邪神崇拝であった。」

経済学の世界的な教授が述べる「経済学は邪神崇拝である」という言葉、これはまさに驚くべき発言です。

2018年に『ノーベル経済学賞』を受賞したポール・ローマーという方も、2016年の講演の中で次のように述べておられます。

「マクロ経済学は、過去30年以上にわたって進歩するどころか、むしろ退歩した。」

あるいは2008年に『ノーベル経済学賞』を受賞したポール・クルーグマンも同じく、受賞の翌年、こう述べています。

「マクロ経済学の大部分は、良くて役に立たず、悪くてまったくの有害である。」

もしくは『ゾンビ経済学』という書籍を書かれたジョン・クイギンという経済学者も、やはり次のように述べておられます。

「経済学では、既に破綻した思想や理論が、破綻したあとも、ゾンビのごとく復活し、幅をきかせているのだ。」  
では、そもそも「経済学」とは何なのでしょうか？

「経済」という言葉は元々、中国の言葉「けいせいざいみん経世済民」から来ています。「経世」は「世の中を治める」とか、「世を統治する」ということを意味し、「済民」は「人民を救済する」ということを意味しています。すなわち「経済」という言葉の本来の意味は、「世の中をよく治めて、人々を苦しみから救う」ということなわけです。つまり医学が、人間の肉体の病を癒して、人を幸福に導くものであるように、経済学とは、国家における不況という病を癒して、人々を幸福に導くものであるわけです。しかし実のところ、これまでの既存の経済学では、そもそも「お金とは何なのか？」という根本的なことをまったく考えてきませんでした。これまで経済学は、「民間中央銀行」と「通貨発行権」について、何も議論することなくスルーしてきたのです。

「お金」というものは、国家においてよく「血液」に喩えられることもあります。そして「血液」を体中に送り出しているポンプの機能を担っているのが「心臓」です。そして人間の「血液」を体内に送っているのが「心臓」ならば、「お金」を造って世の中に送り出しているのは銀行でした。ですからお金を血液に譬えるのならば、銀行は心臓に当たるわけです。しかしこれまでの「経済学」では、「どうすれば血液（お金）の流れを良くすることができるか？」ということとは議論しても、「そもそも血液（お金）とは何なのか？」、「血液（お金）を送り出して

いる心臓部分は何なのか？」という根本的なことを、まったく考えることなく、議論さえもしてこなかったわけです。しかし医者が血液の流れだけを考えて、心臓について何も考えないなど滑稽なことです。

いや、厳密に言うならば「お金とは何なのか？」ということを考え、議論することがタブーにされてきたのが、これまでの経済学だったのです。ここにこそ経済学における最大の詐欺があるのです。つまり今ある通貨制度が詐欺的だけなのではなく、すでにそもそも経済学に詐欺的な面があったわけです。

## 封殺されたシカゴプラン

こうした話を知って、もしかしたら、「そんなバカなことは信じられない!？」と思われる方もいるかもしれませんが。しかし実際に彼らは、わざわざ「偽の経済学」を世に広めて、「真実の経済学」を封殺してきました。

その証拠が『シカゴプラン』です。1929年の世界恐慌当時、シカゴの大学の教授8名が、「今の中央銀行制度はおかしい、『通貨発行権』は民間銀行にあるべきではなく、やはり政府に返すべきだ」と、米政府と中央銀行『FRB』に対して意見を唱えて、『シカゴプラン』という銀行制度改革の提案を行いました。なぜなら1929年10月24日の木曜日から約1カ月に渡って、ウォール街で株価が大暴落して、アメリカは未曾有の大恐慌に突入していったからです。この歴史的な株価の大暴落を『ブラックサズデー（暗黒の木曜日）』と言います。

この時にイェール大学のアーヴィング・フィッツシャーという経済学者を筆頭に、シカゴ大学の経済学者たち8名が集まって、『銀行改革のためのシカゴプラン』というわずか5ページの論文を作成しました。これが後に『シカゴプラン』と呼ばれる「銀行・通貨制度の改革案」です。そしてフィッツシャーたち経済学者8名は、マスコミに嗅ぎつけられて邪魔されないように、細心の注意を払いながら、さらに40名の経済学者を選び出して、この『シカゴプラン』を極秘に送付して、「銀行改革・紙幣改革」を押し進めようとなりました。

しかし結局、この『シカゴプラン』は経済学の世界でタブー視され、銀行改革が行われることはありませんでした。そして近年、同志社大学の山口薫元教授も、「通貨制度」、「中央銀行制度」に疑問を持って、研究に研究を重ねられて、ようやくこの『シカゴプラン』にたどり着いたわけです。そして山口元教授も研究の結果、やはり「通貨発行権が民間中央銀行にあることはおかしい」と、そう主張を始めました。するとやはり彼も、突如、同志社大学を解雇されてしまったわけです。

「通貨発行権」を握る銀行家たちが、現在の貨幣制度を守るために、貨幣制度改革案の『シカゴプラン』を封殺してきたのは歴史的事実です。そして彼らは、わざわざ偽の経済学を流行らせ、金融詐欺を働くことによって、実際に多くの人々が貧しくなってきました。

だからアメリカでは、車で生活する家族もいれば、子どものホームレスもあり、そして日本でも、国民の約半分が預貯金ゼロの状態になってしまっているのです。はっきり言います。現在の経済学は金融詐欺の一環です。

## ノーベル経済学賞の真実

もしかしたら経済学に対して、次のような感想を抱かれた人もいるかもしれません。「まるで現在の経済学というものは、国際銀行家たちが自分たちが行っている金融詐欺を覆い隠すために、あえて意図的に広められて、世界中の人々はずっと騙されてきたのか？」と。実はまさにその通りだったのです。その最たる証拠が、『ノーベル賞』です。

医学が人々の病を癒すことを目的とする学問であるのに対して、経済学とは、不況という国家の病を癒すことを目的とした学問であるはずです。そうであるならば、『ノーベル医学賞』、あるいは『ノーベル経済学賞』は、医学や経済学を進歩させて、人類の幸福化に大きく貢献された人物にこそ贈られているはずです。

たとえば『ノーベル物理学賞』を受賞されたアインシュタインのおかげで、私たちの暮らしは見違えて変わり、彼の功績のおかげで、人工衛星が宇宙を飛び交い、カーナビシステムも使えております。その他にも、たとえば第1回『ノーベル物理学賞』を受賞したレントゲンは、「X線」を発見し、もしくは『ノーベル医学賞』を受賞したワトソンは、DNAの二重らせん構造を解明しました。近年、3人の日本人研究者たちが『ノーベル物理学賞』を受賞しましたが、彼らのおかげで青色発光ダイオード（LED）は、すでに世界中で広く実用化されています。

では、『ノーベル経済学賞』を受賞した経済学者たちは、果たしてどれだけ人類の幸福化に貢献してきたのでしょうか？『ノーベル経済学賞』に、果たしてどれだけの「功績」と「権威」があるのでしょうか？たとえば1983年に『ノーベル経済学賞』を受賞した経済学者ジェラルド・ドブリューは、受賞した際に記者から、「先生の理論は、現在の米国経済において、どのように役立つのでしょうか？」と質問されて、次のように平然と答えています。

「私の一般均衡理論は、日々の経済活動にはまったく役立ちません。」

あるいは『ロングターム・キャピタル・マネジメント』、略称『LTCM』という大きな投資会社が、マイロン・ショールズ、ロバート・マートンという2人の「ノーベル経済学者」を揃えておきながらも破綻して、世界の経済に大きな損害を与えたこともあります。

そもそも『ノーベル賞』とは、果たして何なのでしょう？ダイナマイトの発明によって巨万の富を築いたスウェーデンの実業家アルフレッド・ノーベル、彼の遺言によって、『ノーベル賞』は創設されました。そしてこの賞は1901年から始まり、物理学、化学、医学、生理学、文学、平和の5賞が設けられ、今では「世界で最も権威ある賞」とさえ言われております。不思議に思われたはずですが、それが「経済学」は入っていないのです。

実は経済学賞だけはノーベルの遺言とはまったく関係ありません。実は経済学賞だけは、『スウェーデン国立銀行』が創立300周年を記念して、1969年から始まったのです。

そのためにこの経済学賞の正式名称は、「アルフレッド・ノーベル記念経済学スウェーデン国立銀行賞」などと、

そもそも「銀行」の二文字が入っております。では、「スウェーデン国立銀行」とは何かと言えば、1668年に、世界で最初に創られた中央銀行です。そのために他の部門が、「ノーベル財団」が運用して得た利益から賞金に充てるのに対して、この「経済学銀行賞」だけは、賞金の出所も他のノーベル賞とは異なり、「スウェーデン国立銀行」から賞金が支払われております。

『ノーベル賞』の公式サイトにも、経済学賞について「Not a Nobel Prize (ノーベル賞ではない)」とはつきり書いてあります。また2001年に『ノーベル財団』の実務責任者であったミハエル・ソールマンという人物も、「経済学賞はノーベル賞ではありません。ノーベルの遺言にはない記念の賞です」と取材で答えています。

ノーベルの子孫も、「ノーベル経済学銀行賞」を根強く批判しており、廃止か、もしくは改名を繰り返し訴えております。またこのノーベルの親族は、次のような驚くべきことまで述べています。

「スウェーデン中央銀行がやったことは、いわば「商標権の侵害」であり、『ノーベル賞』の許し難い盗用に当たります。」

1974年に『ノーベル経済学銀行賞』を受賞した経済学者フリードリヒ・ハイエクも、授賞の晩餐会のスピーチで次のように述べました。

「もし自分が相談されていたら、『ノーベル経済学賞』の設立には断固反対しただろう。」

このように現在の銀行制度に問題があり、そして既存の経済学にも大きな問題がありました。実は『ノーベル経済学銀行賞』にも大問題があったわけです。つまり「ノーベル経済学賞」とは、今現在、私たちに對して行われている、金融詐欺の中央銀行制度を存続させるために存在している賞だったわけです。

経済学者たちが経済を分かっているフリして、実のところこの最も重要な点、この「通貨発行権」という金融詐欺については何も分かっていない、そればかりか『ノーベル賞』まで経済学の虚構を演出することに利用されてしまっている、それがそもそも大問題なのです。

## お金は無から創造されていた!

既存の経済学が虚構であるならば、秘されている「経済学」があるわけであり、今ある「経済学」が脱皮を遂げることができたら、果たしてどうなるのでしょうか?

山口薫元教授などが『公共貨幣』の中などで繰り返して述べていることですが、もし日本政府が「通貨発行権」を持ち、「政府紙幣」を発行することができていたら、実は「政府の借金」は1円も存在しません。つまり「『通貨発行権』を政府に取り戻すことができて、国際銀行家たちが行っている金融詐欺を終わらせることができれば、政府の借金は雪のように消えていく」と、山口元教授は述べているわけです。そうなれば「政府の借金」の返済のために、消費税の増税など行う必要も要らなくなります。

そして実は世の中に出回っているお金を創造しているのは、『UFJ』、『みずほ』、『三井住友』、『りそな』といった「市中銀行」でした。実は町中にあるいわゆる「市中銀行」が、今現在、私たちが生きていくために無くてはならない「お金」というものを創造し、そしてそのお金の量を、中央銀行の『日銀』や『FRB』、さらにその上にある『BIS』が管理していたのです。

もちろん「市中銀行」がお金を印刷したり、鑄造しているわけではないのですが、お金の「転生輪廻（生まれ変わり）」は、実は「市中銀行が人々や会社に貸し出すことで『創造』（信用創造）されて、そして返済することによって『消滅』している」、これが「最新の経済学」として、あるいは「秘されてきた経済学」として言われ始められているのです。

さて、ここから数字の話になり、少しややこしくなります。しかし私たちが、「金融の仕組み」を理解して、新たな時代の扉を開くためには大変、重要な話になりますので、どうかゆっくり読み進めて、ご理解ください。

たとえば貴方が100万円を持っていました。

そして貴方はその100万円のお金を、銀行Aという市中銀行（UFJやみずほ等）に預けたとします。するとその銀行Aは、「準備預金制度に関する法律」という法律に従って、必ず何%かを『日銀』に預けなければなりません。

中央銀行『日銀』というのは、「みずほ」や「UFJ」などの市中銀行が、お金を預けている銀行の銀行です。むしろ個人や企業は、『日銀』にはお金を預けることはできません。

そしてもしも仮に、この「法定準備率」が「1%」であるとすると、銀行Aは貴方から預かった100万の1%である1万円を『日銀』に預けて、残りの99万円は誰かに貸すことができます。

「我々が預けているお金を勝手に他の人に貸しているの?」と思うかもしれませんが、しかし市中銀行の仕事とは、国民や企業が銀行に預けたお金を、他の誰かに貸して、そしてその借金の利子で儲けることです。

この時、銀行Aはお金を借りに来た人の口座に、ただ「99万円」と書くだけで良く、別に現金で手渡す必要はありません。お金を借りた人が、口座からお金を引き出すかどうかは、本人の自由だからです。ですから実はその時、銀行Aには、現金として「99万円」のお金が無くとも、「99万円」のお金を誰かに貸し出すことができるのです。

貴方の銀行Aの預金通帳の残高は、「100万円」のままですが、銀行Aからお金を借りた人の残高も、99万円を借りたことで「99万円」となります。

ですから銀行Aが99万円のお金を誰かに貸したこの時点で、銀行Aの預金残高の合計は「100万円」から「199万円」に増えたこととなります。

このように市中銀行が誰かにお金を貸し出すことによって、「通貨の創造」が行われているわけです。そしてこれを「信用創造」と言い、このように市中銀行こそが通貨の創造を行っていたのです。

「信用創造」について理解するためには、「お金＝現金」という考えは、一度捨てる必要があります。むしろ現代では「仮想通貨」が騒がれておりますが、そもそもお金の大半というのは仮想だったのです。

「お金の大半は仮想である」ということを、もう少し見ていきましょう。

さて次に、銀行Aからお金を借りた人、つまり借金したその人が、その「99万円」のお金を使って、何かビジネスを行ったとします。たとえば仕事で新しく車を購入するために、その「99万円」のお金を、銀行Aの口座から銀行Bにある車屋の口座に振り込んだとします。

すると先ほどと同じように、銀行Bは「準備預金制度に関する法律」という法律に従って、その99万円の1%である9900円のお金を、『日銀』に預けなければなりません。

こうして銀行Bには、99万円から9900円を引いた「98万100円」のお金が残ります。

そしてまた銀行Bは、この「98万100円」のお金を誰かに貸すことができます。

銀行Bが他の誰かにお金を貸すとしても、やはりこの「98万100円」のお金を、誰かの口座にただ「98万100円」と書くだけで良く、別に現金で手渡す必要はありません。なおかつ本当は、手元に現金が無くても良いのです。

もう一度述べますが、口座の中にあるお金を引き出すかどうかは、本人の自由だからです。そのために銀行Bの口座は、お金を預けた人の「99万円」と、お金を借りに来た人の「98万100円」を合計して、「197万100円」になります。

さらにこの銀行Bから「98万100円」を借りたその人が、さらに何かビジネスを行なって、銀行Cにそのお金を振り込んだとします。

するとまたもや同じく銀行Cも、この内の1%の「9801円」を日銀に預けなければなりません。ですから銀行Cの手元には「97万299円」が残り、この残ったお金を誰かに貸し出すことができます。やはり当然ながら

この時も、銀行Cはボタン一つで誰かの口座に、「97万299円」と書き込むだけで良く、現金でなくても良いのです。

さて、現金として存在していたのは、貴方が最初に銀行Aに預けた100万円だけです。しかしその100万円のお金が、誰かが次々と銀行に借金をすることによって、いつの間にか約6倍の「591万499円」にまで増えたこととなります。貴方から銀行Aへ、銀行Aから銀行Bへ、銀行Bから銀行Cへとわずか3回の移動で約6倍に増えた計算になります。

こうして市中銀行が誰かにお金を貸し出して、個人や企業が借金することによって、お金というものはグルグルと回りながら増えていたわけです。

お金は国家の血液です。この血液の流れが良くなれば経済は良好になり、国家は健康になり、この流れが悪くなれば経済は不況になり、国家は不健康になります。そしてその血液を押し出すポンプにあたる心臓は、実は市中銀行であり、そしてその市中銀行を管理しているのが中央銀行『日銀』であります。そしてさらにその上に国際決済銀行『BIS』が君臨して、市中銀行と中央銀行をさらに管理しているわけです。

もしも仮に「法定準備率」が1%だとすると、100万円の預金から、最大で9900万円のお金を造り出し、合計1億円にすることが出来ます。その最大の合計金額の求め方は、預金100万円を準備預金率1%（0.01）で割ることによって、導き出すことが出来ます。

もし準備預金率がさらに低く、仮に「0.1%」だったならば、つまり100万円を銀行に預けて、その銀行が『日銀』に預けるお金の額が千円だった場合、100万円の現金から10億円のお金を創造することが可能です。もし準備預金率が「0.01%」だった場合、わずか100万円の現金から100億円のお金を創造することができます。この市中銀行の借金によってお金を生み出す行為を、「信用創造」と言い、「信用創造」が現代の「お金の発行の仕組み」でした。こうした金融の仕組みを考えると、なぜ日本よりも貧しいはずのリビアが、日本より

も豊かな暮らしを実現できたのか、その謎が解けてきます。

そして山口薫元同志社大学教授が「これまで学んできた経済学と実際の経済はまったく異なっていた」と述べていたのは、この「金融・お金の発行の仕組み」だったわけです。「信用創造」について既存の経済も、多少は触れています。これを深く追及してこなかったのです。だから「精神医学」が似非医学であると同様に、経済学にも多大な問題が含まれているわけです。

このように「お金というものは、『通貨発行権』を持っている『中央銀行』と、その下にあつて中央銀行に管理されている『市中銀行』が、『無』からボタン一つで創造し、世の中に供給していた」ということが、「最新の経済学」によつて明らかになりつつあるわけです。

## お金はそもそも仮想だった!?

お金の総量のことを、「マネーストック」と言います。この「マネーストック」こそ、銀行が「無」からボタン一つでお金を造り出している、ということを知る重大な鍵であり、なおかつ人々のお金・金融に対する誤解と錯覚を解いて、日本を金融侵略から解放していくうえでも、とても重要な鍵でもあります。なぜならお金の総量である「マネーストック」は、現実に紙幣や硬貨として、日本に存在しているお金の総量約90兆円よりも、遥かに多いからです。

マネーストックは「M1」<sup>エムワン</sup>、「M2」<sup>エムツー</sup>、「M3」<sup>エムスリー</sup>と3つあります。

簡単に言うと「M1」は預金と現金通貨のことです。

「M2」は、この「M1」に準通貨<sup>じゆんつうか</sup>を合計したものです。準通貨とは解約することによつて、いつでも現金や預金になる資産のことです。たとえば定期預金などがそうです。定期預金は解約することで、現金にも、預金にもな

ります。

「M3」はこの「M2」に加えて、郵便局や農協や信用組合などの預貯金などを加えたものです。少し古いデータになりますが、2017年8月における日本のお金の総量「マネーストック」は、「M1」は714兆円、「M2」は978兆円、「M3」1710兆円でした。

エムスリー

しかし日本の現金としては、お金は約90兆円しかありません。つまり「M3」としては、その17倍以上のお金があるわけです。たったこれだけの事実を見ても、「無」から市中銀行がお金を創造している、ということがご理解いただけるのではないのでしょうか。

最近では「仮想通貨」が話題になっていますが、しかしもともとお金の大半が、現実の紙幣や硬貨としては存在せずに、銀行などの金融機関の間でやり取りされていて、「仮想の現実のお金」だったわけです。

仕事をする際、家を買う際、車を購入する際、誰もが銀行からお金を借りるわけですが、わざわざそのお金を引き出す必要はまったくなく、銀行から銀行へとお金は移動して、生み出されたり、消えたりしていたわけです。

もしも「水」からお金を造っているのなら、「水」が無くなればお金を造れません。空気からお金を造るならば、「空気」が無くなればお金は造れません。しかし「無」からお金を造れる以上、経済規模の成長に伴い、経済拡大に見合っただけでさえいけば、お金は無限に作り続けることが可能だったのです。

これが「最先端の秘されてきた経済学」として語られていることであり、リンカーン大統領が暗殺される直前に述べた言葉の意味だったのです。もう一度、紹介させて頂きます。

「政府は、自分で必要な費用をまかない、一般国民の消費に必要なすべての通貨を流通させるべきである。

通貨を創造し、発行する特典は、政府のたった一つの特権であるばかりでなく、政府の最大の建設的な機会なのである。このシステムを取り入れることによって、納税者（国民）は計り知れないほどの金額の利子を節約することができるとができる。それでこそお金が人間の主人ではなく、人間が人間らしい生活を送るために、お金が召使になっ

てくれるのである。」

かつて日本を占領し、そして日本をことごとく改造していったGHQ占領軍、その総司令官であったマッカーサーは米国に帰ると、次のように述べました。

「日本は、まだ12歳の少年、ドイツ人は経験を積んだ大人にも関わらず戦争を犯したが、日本人はまだ経験の無い子供だから戦争を起こした。」

自分たちから金融侵略と大虐殺を行ってにおいて、彼らは何とも支離滅裂なことを述べましたが、しかしマッカーサーのこの「12歳」という言葉には、どこかに真実があります。なぜならカナダの12歳の少女が『腐敗した銀行制度』と題して大学で講演を行い、その12歳の少女の動画が、世界中で話題となつていくというのに、私たち日本人は「腐敗した銀行制度」について、今も何も知らないままだからです。その一方で世界では、すでに多くの人々が、自分たちの目の前で行われている「銀行詐欺」、「金融詐欺」に気がつきはじめている人が大勢おられます。たとえば2015年4月、ドイツのフランクフルトで欧州中央銀行『ECB』のマリオ・ドラギ総裁の会見が行われました。その際、一人の年若い女性が会見の場に乱入して、「ECBの独裁を終わらせろ！」と叫びながら机に飛び乗り、紙吹雪を投げつけた事件がありました。

「自分たちが戦うべき敵」が誰か、それに気づきはじめている人たちがたしかに世界にはいるのです。ですから私たち日本国民も、カナダの12歳の少女やドイツの年若い女性に負けることなく、「金融詐欺」に目を向ける必要があります。なぜならヘンリー・フォードが述べたように、腐敗した銀行制度の知識を理解していけば、明日の朝にでも革命が起きるからです。

## 本当は知っていた一流経済学者

そして「新しい経済学」として、どうしても見落とせないことがあります。すでにご紹介いたしましたのが、今から百年ほど前の1930年、経済学者のジョン・ケインズという方は、『孫の世代の経済的可能性』という論文の中で、次のようなことを述べていました。

「およそ100年後には、ほとんどの経済的問題は解決されてしまい、人々の悩みは余暇をどのように使うか、ということになるだろう。」

このケインズの言葉からもお分かりになるように、彼ら一流の経済学者たちが、「民間中央銀行」と「通貨発行権」という経済金融の闇をまったく知らなかったわけではありません。特にケインズは確実に「金融詐欺のカラクリ」を知っていました。なぜなら1929年にニューヨークのウォール街で株価が大暴落して、イェール大学のアーヴィング・フィッシャーら経済学者たち8名が、『シカゴプラン』と呼ばれる銀行改革案を作成して、さらに40名の経済学者を選んで、この『シカゴプラン』を極秘に送付した際、ジョン・メイナード・ケインズもその40名の中に入っていたからです。

『シカゴプラン』を受け取ったケインズは、返信の手紙を書き、その中で「貴方が親切に送ってくれた『シカゴプラン』に大変、興味を持ちました」と書いています。『シカゴプラン』はまさに「政府紙幣の発行の提案」でありますから、つまりケインズは『シカゴプラン』と「政府紙幣の重要性」について確実に知っていたわけです。言葉を変えればケインズは、「民間の中央銀行がお金を発行して、市中銀行が創造している通貨の供給量を管理する金融詐欺」について、おそらく十分に知っていたのです。しかもケインズが「百年後、人々はお金で悩む時代を終えている」と述べたのは1930年ですから、『シカゴプラン』が作成された翌年のことです。

しかしケインズは、大統領さえ殺めかねない国際銀行家を警戒したのか、あえてこの金融の仕組みの問題には触れませんでした。

「ケインズが『シカゴプラン』について十分に知っていながらも、しかし彼は国際銀行家を警戒して、あえて何も言うことが出来なかった」、この仮説を立証する証人とも言える人物がいます。それが「ノーベル経済学銀行賞」を受賞された経済学者ミルトン・フリードマンという方です。

『シカゴプラン』作成の筆頭的立場にあつた経済学者アーヴィング・フィッシャーは、1947年に八十歳でその生涯を閉じました。彼の死によつてその後、『シカゴプラン』を積極的に推し進めて、「銀行改革」を成し遂げようとする経済学者は、残念ながら次第にいなくなつていきました。しかしまだ希望はありました。それはシカゴ大学において、『シカゴプラン』の提案者たちから、「銀行改革案」を直接、学んでいた若き経済学者ミルトン・フリードマンがいたからです。実は経済学者のこのフリードマンこそ、「『シカゴプラン』こそが、経済の不安定要素を取り除く最善策である」と、力強く提案してしました。

しかしその後、「ケネディ大統領暗殺事件」が発生します。すでに述べましたように、国際銀行家に立ち向かつたケネディ大統領は、1963年6月4日に『大統領行政命令 第111110号』を出して、通貨発行権を取り戻すべく5ドルの「政府紙幣」を発行しました。するとその約半年後の11月22日に暗殺され、5ドルの「政府紙幣」も回収されてしまいました。アメリカの経済学者であり、「政府紙幣」を提案している『シカゴプラン』を推し進めようとしているフリードマンの目に、果たしてこの「大統領暗殺事件」はどのように映つたのでしょうか？ おそらくフリードマンには、暗殺理由を十分に予測できたことでしょう。

『シカゴプラン』の作成から31年が経過し、1960年代に入ると、ケインズによつて始まつたと言われている「マクロ経済学」が、まるで成功したかのように人々の間で言われ始めました。「ケインズ経済学」の誕生によつて、「もはやかつての世界恐慌のような経済危機は回避された」と、いつのまにか考えられ始めたのです。もちろん錯覚であり、洗脳ですが、ケインズが考え出した「マクロ経済学」があるから、もう大恐慌のようなことは起らないと、そのように信じられはじめたわけです。

そして1976年にミルトン・フリードマンも「ノーベル経済学銀行賞」を受賞しました。するとこれと引き換えなのか、彼の『シカゴプラン』に対する情熱も冷めていったのです。こうしていつしか『シカゴプラン』は、経済学の主流から完全に忘れ去られてしまいました。

こうしたことを考えてみても、ケインズも、フリードマンも、本当は経済と金融と銀行のカラクリを知ってはいたのは間違いないでしょう。だからケインズはあえて予言のように、「百年後には経済の問題はすべて片付けてしまつて、人々は余暇をどのように使うかで頭を悩ませているだろう」と述べたのかもしれませんが。

それはあたかも、今現在にはまるで金融経済の世界の中に、悪魔の手が入り込んで詐欺が行われているようなものですが、しかしケインズはいつの日か、アダム・スミスの述べた「神の見えざる手」が働いていくことを見越していたかのようなのです。

## 市中銀行を管理する中央銀行

さて、明日の朝にでも革命を起こすために、どうかもう少しだけ「金融」の話にお付き合いください。

お金を造っているのは「信用創造」を行っている市中銀行なわけですが、しかし市中銀行はけっして自由に「信用創造」が行えるわけではありません。なぜなら『日銀』などの中央銀行が、市中銀行の「信用創造」を管理、統制し、配分を行っているからです。日本ではこれを「窓口指導」と言い、1991年まで積極的に行ってきました。つまり『日銀』のいわゆるセントラルバンク<sup>中央銀行家</sup>たちは、「窓口指導」と称して、「みずほ」や「東京三菱UFJ」といったそれぞれの市中銀行が行う「信用創造」の量を決定して、管理と統制と配分を行ってきたわけです。

では、「窓口指導」とは何でしょうか？たとえば戦時中、『日銀』は「窓口指導」として、市中銀行から融資を

受けるそれぞれの企業を3つの部門に分類しました。A部門は融資を受ける優先度の高い軍需産業、B部門は中程度の優先度の企業、C部門は贅沢品生産者で融資を受けることは困難な企業です。戦時中、贅沢品に相当するピアノを生産していた「ヤマハ」という会社は、中央銀行から融資を受けることが困難なC部門に入りました。そこでヤマハは会社の生き残りをかけて、金属加工技術を駆使して、プロペラやバイクを生産したのです。だから今もヤマハは、ピアノとバイクというまったく異なる分野に事業を展開しているわけです。

この「お金を創って、市中銀行を通して、どこに分けるか、ということを決める」、これが『窓口指導』であり、これが中央銀行『日銀』の仕事であり、『日銀』は1991年まで、この仕事を積極的に行うことで、実は影から日本経済を支配してきたわけです。

経済学者のリチャード・ヴェルナーという方は、『円の支配者』という書籍を書かれて、『日銀』による影の日本支配について明らかにされました。この方はオックスフォード大学院博士課程を経て、東京大学大学院にて経済学を専攻され、東京滞在中に『日銀』の「金融・研究所」で研究員をされていた方です。

この『円の支配者』について、東京大学経済学部教授の岡崎哲二氏が書評を書かれており、この内容が大変、興味深いのご紹介いたします。

「これは論争の種になりそうな本だが、つぎの理由から本書を推奨したい。

日本銀行の歴史については著名な本が何冊かあるが、いずれも1960年代に出版されたものであり、バブル期とそれ以降の経済については書かれていない。

『円の支配者』の特徴は、現在の視点で日銀の歴史をとりあげる最初の試みだということである。本書は研究者、実務家双方の大きな関心を引くにちがいない。」

つまり東京大学教授の岡崎氏の書評にもあるように、『日銀』という日本のお金の発行元について、明確に議論

がされてこなかったばかりか、『日銀』について書かれた本さえ60年代から一冊も無く、2001年になってようやく『円の支配者』によって、リチャード・ヴェルナーという経済学者が明らかにしてくれたわけです。

この『円の支配者』を読めば、中央銀行『日銀』↓市中銀行(都銀)↓中小企業という金融の力関係が分かり、そして80年代から90年代に起こったバブルの生みの親も、さらにはその後のバブル崩壊後の大不況の原因も見えてきます。

では、『円の支配者』には、いかなることが書かれているのでしょうか？それぞれの市中銀行は、『日銀』の「窓口指導」によって、自分たちの銀行に割り振られた金額を、すべて使い切って企業や個人に貸し出し、「信用創造」を行わなければなりません。もしも割り振られた額の「信用創造」を行わなければ、翌年以降、『日銀』から割り当てられる「信用創造」の額に重くのしかかってくるからです。そのために80年代、市中銀行は、『日銀』の「窓口指導」に素直に従って、とにかく企業に大量のお金を融資して、「信用創造」を行わねばなりませんでした。

また企業側にしても銀行との深い付き合いがあり、関係が悪くなることを恐れて、銀行からの不必要な融資を受け入れて、まったく必要の無いお金を借りる事態となりました。企業の中には、わざわざ銀行がプロジェクトを企画して、土地を担保にお金をお借りて、そのお金で土地を購入して、その土地を担保にまたお金を借りて・・・ということまで行われました。こうして日本では80年代後半から90年代にかけて、市中銀行によって膨大な量の「信用創造」が行われました。

何も無い土地に巨大なビルや遊園地が建てられ、そこにお店が次々と入り、週末や行楽シーズンには多くのお客が足を運ぶ・・・。別荘用にマンションも立てられ、周辺にはお店も増える・・・。すると土地の値段も自然に上がる、その土地を担保に、また銀行が企業にお金を貸し、こんなことが本当に続いたのです。その結果、企業をはじめ世の中全体が「カネあまり状態」となりました。

企業がお金を生産性のある分野で使いきれないと、その余ったお金は、土地と株に流れていきました。こうして不動産会社のみならず、製造業やサービス業を営んでいた会社までが、「財テク」と称して、次々に土地や株を購入することで、土地と株の値段が上がっていききました。普通の主婦までが親から貰った土地を担保に、わざわざ銀行からお金を借りて、株に手を出す事態となったのです。

こうして土地と株価ばかりが値上がりしていきました。バブルの創造です。いつしか「東京の山の手線内の土地の価格で、アメリカ全土が買える」、とまで言われるような異常事態となりました。

しかし1991年になると、『日銀』は突如、市中銀行に対する「窓口指導」を完全に廃止したのです。

なぜ『日銀』が突如、「窓口指導」をやめたのか、『円の支配者』を書かれたリチャード・ヴェルナー氏も分かっておりません。しかも『日銀』は、それまで各市中銀行に割り当てていた「信用創造」の額を、急激に下げて「信用収縮」を行ったのです。この『日銀』発動による「信用収縮」によって、土地の価格は大幅に下落し、バブルが弾け飛びました。

すると市中銀行は、これまで散々、お金を貸しまくっていた各企業に対して、お金を貸すことを渋る「貸し渋り」、あるいはこれまで貸していたお金を急に返させる「貸し剥がし」を行いました。「銀行は晴れた日には傘を貸して、雨の日には傘を取り上げる」と、よく言われますが、まさにこれを日本の市中銀行が行ったわけです。しかし『円の支配者』を書かれた経済学者リチャード・ヴェルナー氏の調べによれば、その根本において、実は『日銀』こそが急遽、「窓口指導」をやめて、「信用収縮」を行うことによって、市中銀行から傘を取り上げていたことが分かります。

日本はこの『日銀』の「信用収縮」によって、戦後最大の不況を迎え、何千、何万という会社が倒産するばかりか、何百万人という失業者を出し、年間3万人の自殺者の時代を迎えました。このことについてよく当時の大蔵

省（現財務省）の責任が問われます。しかし『円の支配者』の中で、リチャード・ヴェルナー氏は、「バブルの創造と破壊の真犯人は大蔵省ではなく日銀である」と明言しております。リチャード・ヴェルナー氏は『日銀』や市中銀行関係者から多くの証言も取っており、しかもそのバブルの創造と破壊の理論も詳しく説明しております。しかしバブルの創造と破壊の真犯人は、『B I S』を営む国際銀行家、悪魔勢力である、というのが真実です。

## B I S 規制の問題点

「信用創造」を行ってお金を造っているのが市中銀行ならば、1991年までその「信用創造」を「窓口指導」によって管理統制してきたのが中央銀行『日銀』です。もちろん「窓口指導」をやめた今も、『日銀』は準備預金比率などによって市中銀行を管理しております。そしてこれらの市中銀行、中央銀行の上に君臨しているのが、まぎれもなくロスチャイルド一族が営む『B I S』です。

実は『B I S・国際決済銀行』は、米国や日本などの世界各国の銀行に対して、「B I S 規制」という規制をかけることによって、世界各国のお金の総量「マネーストック」を管理しています。この「B I S 規制」が問題なのです。

「B I S 規制」とは、1988年の「バーゼル合意」から始まった、銀行業務の国際統一基準のことです。先程、ご説明したように、お金の総量「マネーストック」を管理しているのは、政府ではなく中央銀行であり、その上にいる『B I S・国際決済銀行』こそが、「B I S 規制」という規制をかけることによって、実はお金の総量・「マネーストック」を管理しているのです。

まずこの「政治と金融のカラクリ」を、私たち人類は真剣に考え、そして理解する必要があります。なぜならこ

の「BIS規制」がある限り、実は『日銀』の「金融政策」など、無きにも等しいからです。この事実を見極めるためには、「自己資本比率」というものを考える必要があります。「自己資本比率」を簡単に言えば、「資産」に対する「借金」の比率のことです。

すべての株式会社は、それぞれ株を発行しており、その株を売って儲けたお金、土地、建物などの「資産」、つまり「自己資本」というものを持っております。「自己資本」に対して、大半の株式会社が「借金」も持っているものです。そして「資産」と「借金」の比率のことを、「自己資本比率」と呼ぶわけです。

そして『国際決済銀行・BIS』は、「BIS規制」というものを設けることによって、「銀行も自己資本比率が8%を超えなければ国際業務を行わせない、4%を超えなければ国内業務も行わせない」という規制をかけています。悪魔勢力はこの規制をかけることで、世界各国のマネーストック・お金の総量を管理下においているわけです。

銀行が持っているお金には、大きく分けて「資産・自己資本」と「他から借りているお金」の2つに分類できます。銀行の「資産・自己資本」とは、銀行自身が会社として株を発行して、その株を誰かに買ってもらうことで調達したお金(資本金)、あるいはこれまでの利益、そして銀行が持っている土地や建物などのことです。「他から借りているお金」とは、銀行が『日銀』から借りたお金、さらには私たち国民が銀行に預けているお金・預金のことを意味します。

そしてここがとても複雑なのですが、この「他から借りているお金・預金」の中には、私たちが銀行から借金して預けているお金まで含まれております。なぜなら、たとえばある銀行が、「信用創造」を行い、誰かに貸し出したお金であっても、その誰かは、銀行から引き出すこともできてしまうからです。ですからたとえ銀行が、誰かに貸したお金も、「他から借りているお金」に分類して考えるわけです。

「B I S および自己資本比率」というこの奇妙な銀行のクラクリがあるために、市中銀行は自由に信用創造を行って、お金を造り出したくても、なかなか簡単にはできないわけです。つまり「自己資本比率」を見るには、「資産として自分が持っているお金」と、「いつかは誰かに返さなければならぬお金」の二種類があり、この二種類のお金を合わせたものを「総資産」と言うわけです。そしてこの「総資産」のうち、「資産・自己資本」が占める割合のことを、「自己資本比率」と言うわけです。

たとえばある銀行の「資産・自己資本」が8億円であったとして、「借りているお金」が92億円であったとしたら、この銀行の総資産は100億円で、「8/100」自己資本比率は8%となるわけです。しかしすでに述べましたように、1980年代後半の「バーゼル合意」以降、市中銀行の「自己資本比率の規制」が、『B I S』によって握られてしまったわけです。

お金を創っているのが「市中銀行」であるというのに、その「市中銀行」の自己資本比率が、「B I S 規制」によって、国際銀行家たちの管理下に置かれてしまったことで、結局、『B I S』に、お金の蛇口そのものが握られてしまったわけです。なぜならこの「B I S 規制」があるために、市中銀行は「信用創造」を行なうことが、なかなかできなくなってしまうからです。

市中銀行が「B I S 規制」を乗り越え、「自己資本比率」を上げる方法は二つです。

一つには、自分の「資産・自己資本」を増やすこと、つまり分数の分子を増やすことです。分数において、分子の数字が増えれば自然に比率は上がりますが、しかし資産を増やすことは、不況であれば困難を極めます。

「自己資本比率」を上げるもう一つの方法は、「総資産」を減らすこと、つまり分数の分母の数字を減らすことです。分数の分母の数字を減らすことができれば、自然と比率は下がりますが、これは「他から借りているお金」を減らすことによって割と簡単にできてしまいます。

しかし市中銀行は、国民にお金を預けてもらなわければ、そもそも業務が成り立ちません。そしてすでに述べましたように、分母の「総資産」とは、「資産として自分が持っているお金」と、「いつかは誰かに返さなければならぬお金」の2種類であり、その「いつかは誰かに返さなければならぬお金」には、銀行が誰かに貸したお金も含まれます。つまり銀行が個人や企業にお金を貸してあげて、「信用創造」を行うと、自己資本比率の分母の数字が増えてしまい、自己資本比率そのものが下がってしまうわけです。

たとえば自己資本が8億円で、総資産が92億円で、自己資本比率が8%であったとして、これならば国際業務も行えますが、誰かに10億円を貸し出して、総資産が102億円、自己資本が8億円ならば、自己資本比率は7.2%となつて、国際業務が出来なくなってしまうわけです。そして「総資産」とは「自分のお金・資産」と「借りているお金・預金」なわけですから、現在の不況の中で銀行は、「貸し出す量」を減らし、「信用創造」を行わないことによつて、どうか「自己資本比率」を保っているのが現状なのです。

なぜなら市中銀行が、誰かにお金を貸し出して、「信用創造」を行つてお金を作り出すと、預金額が増えてしまい、現在はデフレ不況であるために、貸したお金が返つて来ない事態になっているからです。こうしたことから、「BIS規制」が始まつて以来、日本の市中銀行が行なっていることは、いわゆる「貸し渋り」なわけです。

90年代の「バブル崩壊」と共に、密かにこの「BIS規制」が始まったことで、1996年から2001年にかけて、いわゆる「金融ビッグバン」が行われました。この「金融ビッグバン」によつて、日本の「市中銀行」は、どうか「自己資本比率8%」を超えることを目的に、銀行の統合が強いられてきたわけです。この「金融ビッグバン」まで、「都市銀行」といえば13行もありました。(第一勧銀、三井、富士、三菱、協和、三和、住友、大和、東海、北海道拓殖、太陽神戸、東京銀行、埼玉銀行)しかし「バブル崩壊」と「BIS規制」開始後の「金融ビッグバン」以降は、「みずほ」、「三井住友」、「三菱東京UFJ」、「りそな」、これらのたった「4大メガ

バンク」しなくなりました。市中銀行が「信用創造」によって、無からお金を創り出しているというのに、「BIS規制」が始まってから、13もあった都市銀行がたったの4つになってしまったのです。

「悪魔勢力による「金融侵略」を打ち破るためには、日本の銀行制度を改革して、「BIS規制」から外れなければならぬことは、言うまでもありません。

## 秘密の秘密の組織

第二次世界大戦が終戦を迎えると「フリーメイソン」の日本のグランドロッジが設立されました。「フリーメイソンなんて現実にいるの？」と思うかもしれませんが、『フリーメイソン』は、日本の東京タワーの下にも「ロッジ」と呼ばれる支部がありますし、美容整形外科『高須クリニック』の高須院長も、自身がメイソンのメンバーであることを公表しています。ですから『フリーメイソン』は、現実に存在している秘密の組織です。

『メイソン』の歴史は古く、「中世から存在している」とも、「ギリシャ時代から始まった」とも、「エジプトのピラミッドを造った」とも、さらには「本当はもっと古い」とも言われ、様々な説があります。

中世のヨーロッパにおいて石工職人たちは、王族の城や教会などの建設に携わるために、とても貴重な存在でした。しかし彼らは、城の抜け道、財宝の隠し場所などを知っているために、城が完成すると口封じで殺されてしまうこともありました。

そのために石工職人たちは、自分たちの技術と生命を守るために「ギルド」という組合を築きました。も

し自分たちが殺されたら、別の仲間が敵対する勢力に城の見取り図を売るという形で、貴族に対抗したわけです。こうして彼らは、財力と権力を身につけていきました。これが「自由な石工職人」、「フリーメイソン」の起源と言われております。

ユダヤ人が加害者ではなく被害者であるように、おそらく「フリーメイソン」も被害者なのでしょう。なぜなら狡猾な悪魔教徒たちが、秘密組織「フリーメイソン」の中に、さらに秘密の組織を創設したと言われているからです。

1776年5月1日に、マイヤー・アムシエル・ロスチャイルドの依頼で、アダム・ヴァイスハウプトという人物が、ドイツのバイエルンに『イルミナティ』という秘密組織を創設しました。しかし1785年、この『イルミナティ』は凶悪な革命思想が暴露されて、バイエルン政府から解散命令が出されました。そのため『イルミナティ』は、『フリーメイソン』という秘密の組織の中で、隠れながら密かに生き続けたと言われております。

イルミナティの離反者レオ・ザガミの話によれば、「イタリアのフリーメイソンのP2ロッジこそがイルミナティの隠れ蓑」だそうです。「ロッジ」とは支部を意味しています。「フリーメイソンP2ロッジ」、この言葉は、現代の日本人にはとても聞きなれない名前です。しかし「P2ロッジ」は、イタリアの『フリーメイソン』のグランド・ロッジの下で、正式に活動していたロッジの1つなのです。

しかしこの「P2ロッジ」は、本来の『フリーメイソン』とは異なり、爆弾テロや経済犯罪などを行うばかりか、国家転覆計画が発覚したことによって、1976年に『フリーメイソン』の承認を取り消されています。

しかしその後も、この「P2ロッジ」は活動を続けて、「ボローニャ駅爆破事件」、「カルヴィ暗殺事件」

といったテロや暗殺事件などを起こしてきました。1980年に起きた「ボローニヤ駅爆破テロ事件」では、イタリアのボローニヤ駅がほぼ全壊し、この爆破テロによって85人が死亡、200人以上が負傷しました。この爆破テロ事件を、『メイソン』の元ロッジである「P2ロッジ」が行ったことは、まぎれもない歴史的事実です。

では、「P2ロッジ」が行ったもう一つの重大事件、「カルヴィイ暗殺事件」とは何か？アンブロジーノ銀行の頭取であったロベルト・カルヴィイという人物は、「神の銀行家」と呼ばれ、バチカン銀行との取引を一手に引き受けていました。そして彼も、この「P2ロッジ」のメンバーだったのです。このカルヴィイが、1982年にロンドンのテムズ川にかかる橋で、首吊り死体で発見されました。ポケットには『メイソン』の象徴であるレンガが入っていました。

バチカン銀行を通じて、悪魔勢力『イルミナティ』の隠れ蓑「P2ロッジ」と、キリスト教カトリック教会の総本山バチカンが、裏で繋がっていたのです。

「P2ロッジ」が「ボローニヤ駅爆破事件」、「カルヴィイ暗殺事件」を起こすと、『フリーメイソン』は、すでにロッジとしての認証を正式に取り消していたにもかかわらず、この「P2ロッジ」に対して再度、正式に「破門」を発表しました。さらに1981年12月24日には、当時のアレッサンドロ・ペルティーニ・イタリア大統領までもが、「P2ロッジ」に対して、正式に「犯罪組織」として指名しました。

こうした闇を追っていくと、「イルミナティがフリーメイソン内部に隠れて、P2ロッジがイルミナティの隠れ蓑であった」というレオ・ザガミの話は、やはりそれなりに信憑性が高くなってくるわけです。

こうした事実について、おそらくメイソンメンバーである高須院長はまったく知りません。なぜなら『メイソン』には「33」もの階級が存在しているために、彼は全体像を把握しき切れてはいないからです。『イ

ルミナティ』最大の離反者と言われるレオ・ザガミは、自分の肩書きについて「イルミナティ・アカデミー代表、そしてイタリア・フリーメイソンの33階級です」と述べております。

## 悪魔勢力とバチカンの謎

「悪魔勢力と神を信仰する勢力が裏で繋がっている」、それは信じがたい話ですが、この話には他にも証人がおります。それはヨハネ・パウロ1世です。教皇ヨハネ・パウロ1世は、バチカンが『フリーメイソン』の秘密組織「P2ロジ」に侵食されていることを知った人物と言われております。そのためにヨハネ・パウロ1世は、バチカン銀行総裁マルチンクス司教の更迭を決めました。しかしその直後、彼は1978年9月に、在位たったわずか33日間で謎の死を遂げます。

「教皇ヨハネ・パウロ1世の暗殺疑惑」、この驚愕すべき重大事件を膨大な資料を駆使して記したのが、イタリアのジャンルイージ・ヌツツイという人物です。この暗殺疑惑は、彼の著書『バチカン株式会社』（柏書房）に詳細に記されております。

ジャンルイージ・ヌツツイという人物は、数学・工学・哲学・神学など様々な学位を取得し、企業経営者を経て、51歳のときに、キリスト教の篤い信仰心から、聖職者への道を選びました。そして彼は、豊かな知識と経験から、バチカン銀行で働くことになったのです。しかしバチカン銀行で彼は、バチカンの腐敗ぶりを目の当たりにしました。そして彼は二

十年という長い時間をかけて、メモや文書を丹念に整理して、4000点にも及ぶ資料を集めました。しかし彼は、生前はバチカンの掟に従って、沈黙を守り続けました。そして彼は、その膨大な資料を知人に預けて、次のように遺言を残したのです。

「この書類を公表すること。」

何が起きたのかを皆が知るように」

こうして彼の死後、2010年に『バチカン株式会社―金融市場を動かす神の汚れた手』というおどろくべき書籍が発刊されました。この書籍にはなんと、「バチカン銀行がマフィアとまで関係を持つばかりか、麻薬取引にまで深く関わっていた」という驚くべきことが記されています。

『スポーツライト 世紀のスcoop』という映画では、神父たちによる子どもたちへの性的虐待の真実が明らかにされて、世界中に衝撃を与えましたが、しかしバチカンがマフィアと関わり、しかも麻薬取引にまで関わっていたことが、もしも事実であれば、それはさらなる衝撃を世界に与えることでしょう。しかもこうしたバチカンの腐敗を正そうとしたがゆえに、ヨハネ・パウロ1世は、在位わずか33日で暗殺されたと、ささやかれ続けているわけです。

この「バチカンとマフィアによるヨハネ・パウロ1世暗殺説」を唱えているのが、イギリス人ジャーナリストのデビッド・ヤロップという人物です。彼が記した『法王暗殺』という書籍によれば、当時のバチカンの「ナンバー2」であった国務長官ヴィロー枢機卿、バチカン銀行総裁ポール・マルチンクス大司教は、なんと『イルミナティ』の隠れ蓑「P2ロッジ」

のメンバーであったというのです。だから新教皇となったヨハネ・パウロ1世は、この事実を知って2人の解任を決意し、そしてそのために暗殺されたと言うのです。しかもこの2人の背後には、同じく「P2ロツジ」のメンバーで、しかもシチリア生まれのマフィアであるミケレ・シンドーナという人物がいたそうです。「シチリア」、このイタリアの小さな島は、イタリア・マフィアで有名な島です。

実はこのヤロップというジャーナリストが1985年に描いた『法王暗殺』を、そのまま映画に取り込んだのが、世界的に有名なマフィア映画『ゴッドファーザー』です。フランシス・フォード・コッポラの『ゴッドファーザーPART3』（1990年）を見ると、誰もが不可解な気持ちにさせられるはずで、なぜなら世界的なマフィアのドンが、なぜかイタリアを舞台に、バチカンの聖職者たちと親密な付き合いをしているからです。

神を信仰するはずのバチカン、悪魔組織『イルミナティ』、そして麻薬と殺人さえ取り扱うマフィア、これらが深い関わりがあるかどうか、それはまだまだ真相究明の余地があると言えるでしょう。

しかし悪魔が蛇に化けてイヴに優しくそつと近づいて騙したように、『イルミナティ』の悪魔の毒水が、「P2ロツジ」を通じてバチカンに流れ込んだ可能性は確かにあります。それは蛇の姿を形取った「パウロ6世ホール」の外観と地獄的な内部を見ると良くわかるのではないでしょう。

アメリカのアリゾナ州にグラハム山という山があり、この山にはハッブル宇宙望遠鏡よりも10倍も性能が高い大双眼望遠鏡があります。ここはアメリカ政府とキリスト教イエズス

会の天体宇宙観測所として知られておりますが、この最新の双眼望遠鏡の名はなんと「ルシファー」です。

## 幕末から流れ込む毒水

すでに述べましたように、『フリーメイソン・イルミナティ』の日本への侵略は明治維新から、本格的に始まります。江戸末期の1853年、鎖国していた日本に開港を迫ったマシュー・ペリーが『フリーメイソン』のメンバーだったことは正式に記録に残っています。黒船で日本にやって来る約30年前、若きペリーは1819年にニューヨークの「ホーランド・ロッジ」というところで正式にメイソンに加入していました。

ですからたしかに幕末から日本にフリーメイソンのロッジが建てられます。フリーメイソンのメンバーが最初に集会を開いたのは、横浜の「港が見える丘公園」の中であつたと言われております。

トーマス・ブレック・グラバーが、メイソンメンバーだった正式な記録は発見されていません。しかし長崎にあるグラバー邸に行くと、そこには確かにメイソンのシンボルマークが刻まれた石柱があります。これを根拠に「グラバーもフリーメイソンのメンバーだった」と主張する人がいますが、どうやらこの石柱も戦後になって、長崎市が観光目的で、別の場所から移築してきたものだそうです。

しかしすでに述べたように、グラバーがロスチャイルドの傘下にいたことは間違いありません。

そのために明治維新が起こり、当時の日本政府が「世界の潮流」にならつて、金に裏付けられた紙幣を発行しようとして『日銀』を設立すると、トーマス・グラバーの指示によって、イギリスから印刷機が『日本銀行』に持ち込まれました。

幕末から悪魔勢力が日本に入り込んでいたために、『イルミナティ』最大の離反者レオ・ザガミは、「日本はイルミナティの計画を150年に渡って挫いてきた稀有な国であり、悪魔勢力は日本を『神の国』と認定して、最大敵国としている」と述べているわけです。そして第二次世界大戦の敗戦後、日本における『フリーメイソン』のグランドロッジが、東京タワーの麓に設立されました。

この「メイソン日本グランド・ロッジ」がある「東京メソニックビル」は、戦前は日本海軍士官たちの『水交社』の本部ビルでした。『水交社』とは、日本海軍士官の親睦団体であり、この名前は中国の古典の「君子の交わりは淡きこと水のごとし」に由来しています。

しかし敗戦後のGHQの解散命令によって、この『水交社』は解散させられ、この本部は空きビルとなります。その空きビルが、フリーメイソンのグランド・ロッジとして使用されるようになったわけです。フリーメイソンの正式なメンバーであったマッカーサーによって、『水交社』の跡地に、日本の『フリーメイソン』の中核となる「グランド・ロッジ」が創設されたわけです。

## 真の軍神の東郷平八郎

GHQの最高司令官であり、メイソンのメンバーでもあったマッカーサーによって、海軍士官の親睦団体『水交社』のビルに、フリーメイソンの「日本グランドロッジ」が設立されました。

しかし日本海軍には、何とも怪しさがつきまとうのです。

さて、政治の舞台裏を覗いたことのない方にとつては、衝撃的な話が続いておりますが、今なお根強くあるさらに衝撃的なある説について、お話ししたいと思います。それは「山本五十六フリーメイソン・スパイ説」です。

山本五十六元帥海軍大将とは、先の大戦における海軍トップです。現代の日本の首相や大臣でも、「郵政民営化」によって日本の国益を外資に明け渡したり、人材派遣会社『パソナ』という「貧困ビジネス」で儲けている者がいるのですから、今から数十年前にも、日本にそうした人物がいたとしても、何も不思議ではないはずです。

この「山本五十六スパイ説」は、わたくし与国の仮説が入りますが、どうぞお付き合いください。山本五十六元帥はアメリカに長く住んでおり、ハーバード大学で英語力を身につけ、アメリカで勤務もし、アメリカの文化、精神、産業などを見てきました。そして何よりも、彼はプロテスタントのキリスト教徒でした。

しかし本当にそれで良いのでしょうか？当時の日本は、神道を事実上の国教としており、神道といえは多神教ですが、しかしキリスト教は一神教で、なおかつ他の宗教に対して、とても排他的です。海軍のトップがキリスト教徒であるならば、山本五十六の目に、多神教を奉じる日本は、どう映ったのでしょうか？

当時のキリスト教徒たちの中には、「神道の国・日本」に対して、「悪魔の宗教を信じる哀れな国だ。だから日本を滅ぼしても構わない」と考えている人さえいました。もちろん山本五十六が、そこまで酷く日本を見てはいなかったでしょうが、しかし彼の戦時中の不自然な行動を考えると、どうやら彼には、侍精神が無かった可能性だけは、十分に考えられます。彼と同じく「元帥海軍大将」の東郷平八郎と比べてしまうと、やはりどうしても「山本五十六メイソンのスパイ説」に納得がいくのです。

「日露戦争」の際、日本の戦艦「三笠」は、「世界最強」と誉れ高いロシアの「バルチック艦隊」と戦いました。その際、東郷平八郎元帥は、軍艦の甲板の上に設けられた指揮所・艦橋に立って、敵艦を睨みつけて、「撃てっ！」と大声で叫ぶのみだったそうです。

そして東郷平八郎元帥が取った戦法が「T字戦法」でした。ロシアの艦隊は縦に二列の隊形を組んで航行していました。通常の戦い方では「敵艦に対して、自身の艦隊を縦にして撃つ」というものでした。なぜなら自身の戦艦

を縦にしていたほうが、こちら側の攻撃的が少なくなり、砲弾も当たりづらいからです。

しかし日本の艦隊は、いきなり敵艦の前で旋回して横向きになり、「世界最強」とまで言われるバルチック艦隊に対して横腹を見せたのです。つまり三笠は、相手との位置関係を「T字」の形にしたわけです。この作戦には、かなりの危険が伴うために、ほとんどの人が反対しました。

しかし横腹を見れば、こちらは前の砲門も、後ろの砲門も、側面にある砲門も、すべて攻撃に使えるようになり、敵の砲弾が当たる可能性が大きくなる一方で、自身の艦隊が使える大砲の数も敵より多くなります。まさに東郷元帥が取られた「T字作戦」とは、防御力は下がるが攻撃力は上がるために、相手を殲滅できるか、それともこちらが殲滅されるか、そのどちらかギリギリの作戦だったわけです。

そしてこの危険の伴う作戦の中で、東郷元帥は自ら戦艦の甲板に立ち、微動だにすることなく、「撃て！」と怒号を発し続けたわけです。元帥自ら先頭に立って戦う、これはまさに仲間の士気は上がります。戦において士気というものは、武器、弾薬、食料にも増して大切です。なぜなら士気が高ければ、兵は2倍、3倍、あるいはそれ以上の働きをなし、士気が低ければ兵は、本来の働きも出来ないからです。まさに士気は戦の要です。

こうして日本海軍は、世界最強のバルチック艦隊に大きな賭けにも似た戦いをしながらも、しかし高い士気で挑んだこともあって、「T字戦法」は大成功し、バルチック艦隊をほぼ全滅させ、日本は勝利しました。

この日本海海戦、バルチック艦隊との戦いによって、当然ながら「戦艦三笠」にも敵の砲弾が数多く当たりました。船は揺れ、波しぶきは甲板を襲い、ガラスは割れて飛び散り、まさに艦橋も激しい戦場となりました。数時間におよぶ激闘のあと、東郷艦長がいる艦橋も水浸しになっていたそうです。しかし、「戦いが終わって、東郷平八郎元帥がその場を去ると、彼が立っていた所だけは乾いたままで、足跡だけが残っていた」と言われています。これはつまり「東郷元帥が数時間、その場に立ちっ放しで、なおかつ微動だにしなかった」ということを意味してい

ます。東郷元帥自らが士気高いことを示して、仲間に見せられたわけです。

## 山本五十六スパイ説

さて、東郷平八郎氏と同じ「元帥海軍大将」の山本五十六氏は、アメリカとの戦争が始まる前、「半年や一年は暴れてみせるが、二年、三年となつては確信は持てない」などと述べていました。

山本五十六が「フリーメイソンのスパイだったのでは？」という疑問を抱かせるのは、やはり「暴れてみせる」と、彼が語っておきながら、しかし日本の連合艦隊が、アメリカ海軍を攻撃できるチャンスが何度あつても、彼自身がみすみす逃しているからです。

たとえば1941年12月8日の「真珠湾奇襲攻撃」は、山本五十六氏の発案でした。彼が「自分が陣頭指揮を執るから」と約束して、海軍全体の了解を得て、真珠湾奇襲攻撃は決行されたものでした。ところがいざ出陣になると山本氏は、見事にその「陣頭指揮を執る公約」を破り、連合艦隊司令長官でありながらも、「率先垂範の指揮」という日本海軍の伝統をも、完全に無視しました。

山本元帥は、空母六隻を出撃させても指揮を執らず、部下で「無能」と悪名高い南雲忠一中将に指揮を任せて、自分は瀬戸内海に浮かぶ「戦艦ホテル」と揶揄された戦艦大和にて、カード遊びに暮れる優雅な日々を過ごしていたのです。

また真珠湾攻撃において、山口多聞少将が「第3次攻撃隊」を出すように強く主張しても、上官の山本五十六氏、南雲忠一氏のような司令長官たちは、その提案をまったく受け入れず、ハワイにある空軍基地の攻撃も行いませんでした。「部下の提案を無視して、ハワイの空軍基地も叩かない」、実はこのことがその後の戦局を、アメリカ側

を有利にさせてしまいました。それが約半年後にやってくる1942年6月の「ミッドウェー海戦」です。

しかもこの「ミッドウェー海戦」では、真珠湾攻撃の時よりもっとひどい有様でした。山本五十六氏の指揮官、武将としての無能ぶり、あるいは臆病ぶりは、日本の戦史に前例がないほどです。なぜなら山本五十六氏は「ミッドウェー島攻略戦」の発案者であり、なおかつ最高指揮官で、有力な「戦艦大和」に坐乗さじようしているのにもかかわらず、空母四隻の前方に在るべき「戦艦大和」を、その空母四隻よりも、はるか400キロ後方に配置させて、「敵前逃亡」職場放棄」していたからです。そして山本氏の坐乗する戦艦「大和」は、主力部隊である戦艦「長門」、「陸奥」などとともに、高見の見物をしていました。

空母というのは燃料や武器を搭載し、なおかつ航空隊を離着陸させられる強力な戦艦のことで、「航空母艦」の略称です。空母から航空部隊が発進して、そして味方の航空戦力が敵の航空戦力を撃破、または抑制できれば「制空権」を取れるために、空母は非常に重要な兵器です。しかしその空母そのものは攻撃力が低いために、空母にとって航空機や戦艦の護衛は必須となります。にもかかわらず戦艦「大和」に坐乗する山本五十六氏は、主力戦艦「長門」、「陸奥」と共に、空母の護衛にあたらずに、後方で高見の見物をしていたわけです。しかも山本元帥は、わざわざ貴重な空母を一カ所に密集させて、敵の砲弾を当たり易くさせていました。なおかつ無能で、しくじることが分かっている南雲忠一中将、草鹿龍之助少将などを最も重要な機動部隊に起用していました。

この「ミッドウェー海戦」によって、四隻の空母のうち「赤城」、「加賀」、「蒼龍」の三隻が轟沈こうちんしていく時、山本五十六氏は「戦艦大和ホテル」の中で将棋をさしていた、という事実があります。そして轟沈の知らせを聴いても山本元帥は、東郷元帥とはまったく違った意味で微動だにせず、そのまま将棋をさし続けたそうです。日本海軍の伝統「率先垂範の指揮」を蔑ろにして、戦うことなく、「大和ホテル」で将棋をさし続ける彼の姿は、いったい現場で戦っている日本の兵士たちの士気を、どれだけ下げたことでしょうか。戦艦「大和」は今日でも「日本の

役人の税金の無駄遣いの象徴」として語り草になっています。

この「ミッドウェー海戦」では、実は日本海軍の戦力のほうが、まだ米軍よりも圧倒的に優勢な状態であり、空母を分散して、十分な戦艦による護衛をつけてさえいれば、貴重な空母三隻を失うこともなければ、まったく殲滅させられる必要性もなく、勝てた可能性さえありました。

しかも「ミッドウェー海戦」の1カ月前の珊瑚海海戦さんごかいにおいて、日本海軍の空母「瑞鶴ずいかく」、「翔鶴しょうかく」の2隻と、米軍の空母「レキシントン」、「ヨークタウン」が攻撃を交わした際、山本五十六氏は米海軍に対して、なぜか攻撃の手を緩めることで、米空母「ヨークタウン」を撃沈せずに引き揚げさせてしまいました。つまり山本五十六氏が率いる日本海軍は、米空母「ヨークタウン」にトドメをさすチャンスがあつたにもかかわらず、なぜか突然、攻撃の中止命令を出して、しかも日本海軍を北上させて、みすみす敵空母を逃がしているのです。この時に撃沈されなかつた空母「ヨークタウン」が、真珠湾の時に攻撃されなかつたハワイの海軍基地に帰って、わずかの間で修理されたことで、その後の「ミッドウェー海戦」に参加し、日本連合艦隊撃滅の立役者となってしまうのです。

そしてこの戦争開始から約半年後にあつた「ミッドウェー海戦」の大敗北が、実はその後の日本の敗北を決定づけてしまいました。この後、日本は陸軍、海軍ともに銃無し、弾無し、水無し、食糧無しという長く苦しい戦争へと突入してしまうわけです。

たしかに山本五十六氏は、「半年や一年は暴れてみせるが、二年、三年となつては確信は持てない」などと述べていたはずなのですが、しかし実のところ彼は、最初の真珠湾奇襲攻撃でも、半年後の珊瑚海海戦でも、そして第二次世界大戦の勝敗を喫するミッドウェー海戦でも、少しも暴れてなどいなかったわけです。

東郷平八郎と山本五十六、どちらも同じ「元帥海軍大将」でありながら、この歴然たる違いを見てしまうと、片方の軍人には「名将」とか、「軍神」という呼び名がふさわしい一方で、もう片方には「スパイ説」さえ疑問がわ

いてしまうわけです。

## 軍神の定説と真相の違い

しかも真珠湾奇襲攻撃の日には、アメリカの主力戦艦がハワイに一隻もない状態でした。米空母「レキシントン」は飛行機の輸送中であり、米空母「エンタープライズ」は飛行機を輸送しての帰路であり、米空母「サラトガ」もアメリカ本土西海岸にいたために、実は真珠湾奇襲攻撃において、米空母はすべて無傷だったのです。しかも真珠湾攻撃で被害を受けた米戦艦は、いずれも1910～1920年代に就役した旧式艦ばかりでした。さらに真珠湾の水深は十数メートルと浅いために、沈められた戦艦はほとんど引き揚げられて修理を行ない、なんとその後の戦線に復活していました。今も真珠湾に沈んでいるのは、戦艦「アリゾナ」くらいのもので、この戦艦が就役したのは1916年ですから、当時からすでにかなり旧式で、引き上げる必要が無かったわけです。

当時の日本海軍は、アメリカの旧式の戦艦4隻を撃沈し、4隻を損傷させて、合計8隻を撃破しますが、しかし修理施設を攻撃しなかったために、この8隻のうち6隻の戦艦が修理されて、すぐに戦線に復帰したのです。

ですから山本五十六氏が行った真珠湾攻撃は実は大失敗だったのです。にも関わらず戦後、「日本は侵略戦争を行った悪い国」という宣伝、教育が行き届いていくその一方で、なぜか戦中から現在にいたるまで、「真珠湾奇襲攻撃は大成功だった」と宣伝され、さらに山本五十六氏は「軍神」として、小説や漫画や映画などで英雄視されてきました。

実のところ、「軍神」、「名将」とされてきた山本五十六でしたが、近年、「真相」を語る書籍が次々に出版され、これまでの「定説」が覆りはじめており、「どこが軍神なのか?」、「どこが名将なのか?」という声が高ま

つてきつつあります。また、すでにアメリカに解読されていた日本海軍の暗号の変更を、あえて山本五十六が遅らせたのではないかとまで言われております。つまり当時の日本海軍は、秘密保持のために暗号を定期的に変更すべきところ、それを彼が怠っていたのです。そのために海軍が使用していた暗号の電報は、真珠湾奇襲攻撃をはじめアメリカに、すべて筒抜けだったと言われております。

しかも先の大戦からすでに、空軍の重要性が言われているにも関わらず、山本五十六は空軍の独立に反対しており、空軍を海軍の配下にしていました。そのために先の大戦で日本は、空軍の発展を遅らせることになり、これも日本の敗戦に大きな要因にもなりました。なぜなら先の大戦も現在も、空軍が重要であり、当時から日本には、世界最高峰の航空技術を持った有能なパイロットも大勢おり、なおかつ航空機を製作する技術も世界最高峰であったからです。

第二次世界大戦を題材にしたシミュレーションゲームに『提督の決断』というゲームがあります。このゲームをやってみればお分かりになります。日本海軍で「ミッドウェー海戦」に勝つのは、実はそれほど難しいことではありません。要は、後方の主力部隊である「戦艦」を前進させて、機動部隊の空母の援護に回せば良いのです。そんな単純なことを、なぜか山本五十六はやらなかったのです。

そして山本五十六の「ミッドウェー海戦」における最大の罪は、大敗北を「隠蔽」したことです。まず戦死者の戦死報告を1年間遅らせました。たしかに戦意高揚も大切でしょうけれども、しかし家族が父や息子の安否を気にしていた中、「ミッドウェー海戦」の戦死者が世の中に公表されたのは、翌年の4月22日であり、実に約一年近くも隠蔽されたのです。

そして山本五十六氏は、「ミッドウェー海戦」の敗北を隠蔽するためなのか、この戦闘によって負傷した兵士たちを軟禁状態にして隔離しました。そのために負傷兵は、こっそり死体のように覆い隠されて、病院の裏門から運

ばれました。しかも病室も完全に外部と遮断され、付き添いの看護人さえ許されず、外部との通信も禁止されました。つまり「ミッドウェー海戦」の戦傷患者たちは、完全な缶詰状態に置かれたのです。そのために病院周辺に住む人々は、捕虜の収容所と誤解する人さえいたそうです。そして中川八洋氏著『山本五十六の大罪』によれば、「ミッドウェー開戦」の敗北の原因調査は一切、禁止されました。そのためか「ミッドウェー海戦」で生還したパイロットたちは、あえて口封じのためか、非常に戦況の厳しい死地に配置されました。山口宗敏という方が書かれた『父・山口多聞 空母「飛龍」の最後と多聞「愛」の手紙』にはこうあります。

空母「飛龍」の主計長であった浅川正治氏が著者に語った話として、「（ミッドウェー）海戦終結後、防諜上の理由から、生存者の大部分は南方勤務となり、その内多くの者が戦死して内地の土を踏めなかった。なんとも痛ましく今も胸が痛む・・・」

中川八洋氏著『山本五十六の大罪』より

山本五十六の「快樂殺人」が実際に実行されたのが、ミッドウェー海戦の大敗北と、その後の措置である。

前者では、4隻の空母とともに三千数百名が戦死したが、「戦死させた」というべきだろう。

後者では、この海戦でかろうじて生還したものを、大敗北を知っているからと「口封じ」すべく、山本五十六は直ちに彼らの「殺害」を冷酷・沈着に実行していった。

まず、空母4隻から生還した第一級のパイロットたちには、上陸もさせず、休息も与えず、バラバラにして次々に遠方の前線に配属させた。

海戦の勇者である戦傷パイロットに対しても、病院に隔離して、家族にはむろん、友人の海軍軍人とすら面会謝絶を徹底させた。

無傷で生還した空母パイロットの配属先は、必死に至らしめる、新たな戦場に転属させたし・・・

〈中略〉

山本五十六は、パイロットの命を「虫けら」としか考えなかった。国家の財産である中型爆撃機1機など「ちり紙」としか考えなかった。

「ミッドウェーの戦い」について、「日本の機動部隊にあと5分の時間が与えられていれば、勝利の可能性もあった」という説があります。このミッドウェー海戦の敗因を「運命の5分間」とか、「魔の5分」と表現する研究者もいます。しかし山本五十六氏の忠実な部下たちが、彼を庇うためにが考案したものであり、あくまでも創り話であって、「魔の5分」などというものはありません。ミッドウェー敗北の最大の原因、それは誰がどう考えても、軍人にあるまじき山本五十六氏の言動にあると言えるでしょう。

そして山本五十六氏のさらなる罪として、彼の忠実なる配下の指揮官は常に固定されており、たとえどんなに失敗してもその罪を追求されることはなく、無能な指揮官たちが常に指揮を取り続けました。しかも山本の配下の指揮官は、極度な無能ぶりにもかかわらず、山本と同様に戦後さまざまな戦記作家によって、いづれも「名将」、「名参謀」と讃えられてきたのです。たとえば山本五十六の温情、私情によって、南雲忠一、草鹿龍之介、源田実らは、米国海軍ならばクビ間違いないと思われる失態が幾つあっても助かる一方で、「ミッドウェー海戦」で生還した青木泰二郎大佐は責任を問われ、沈んだ四隻の空母に乗っていた多数の罪のない下級士官や下士官兵たちは、「ミッドウェー海戦」大敗の口封じのためか、南海の遠い島々や僻地へまぢの最前線にとばされました。

つまり責任がある者が罪を問われず、責任ない者には罪を問う愚かな処置が行われ続けたのです。すなわち功績のある者には必ず賞を与え、罪を犯して罰すべき者には必ず罰するという、「信賞必罰しんしょうひつばつ」が山本五十六率いる日

本海軍には無かったわけです。

いや、実のところ山本五十六氏の部下が無能だったと言うより、「適材適所がなされていなかった」という点が大きいでしょう。さんざんの損害を出した南雲忠一中将は、指揮官としては実は猛将タイプだったようで、水雷戦術においては第一人者とされていたそうです。水雷とは多量の爆薬を詰めて、水中で爆発させて艦船を破壊する装置のことです。しかし彼は専門外の航空艦隊司令長官に任せられます。すなわち空母を基幹とする機動部隊であり、水雷の第一人者である彼にとっては、まったくの畑違いだったのです。しかも異動早々、彼が聞かされた作戦こそ、航空攻撃によって真珠湾の米艦隊を叩く計画「真珠湾攻撃」だったのです。ですから南雲中将が「愚将」であつたという前に、「適材適所」を実現できていない組織であつたことが、そもそも問題でした。山本元帥率いる日本海軍には「信賞必罰」も「適材適所」もなかった、これだけを見ても、彼が「愚将」であることが理解できると思います。

## 山本五十六生存説

たしかに山本五十六には、マレー沖海戦で、イギリス海軍の誇る最新鋭戦艦「プリンス・オブ・ウェールズ」、巡洋戦艦「レパルス」を撃沈するという戦果もありますが、しかしそれは日本海軍の戦果、優秀で有能なパイロット、整備士、設計士などの戦果であつて、山本五十六氏の「愚将」ぶりを見ると、どうしても私の目には彼の戦果には見えてこないのです。

しかも山本五十六は姿を消します。戦争開始から約1年半後の1943年4月18日、彼はブーゲンビル島上空でアメリカ軍に撃墜され、「戦死」したとされています。しかし彼が生き延びていた説も根強くあります。まず彼の機が撃墜される当日、山本五十六氏はまるでジャングルの中を歩き回るような、目立たない服装をしていたそうです。そして捜索班が、彼の撃墜された事故機を発見した時、第一発見者によれば、山本氏の遺体は座席に座つた

まま刀を持って凜としており、頭部や身体には、特に目立った外傷はなかったそうです。ところがその後、遺体を検死してみると、「山本氏は米軍の戦闘機から機銃で頭を撃ち抜かれ、背中を貫通していた」と、なぜか話がまったく変わってしまいました。頭を撃ち抜かれ、背中を弾が貫通していれば、出血しているために、第一発見の「外傷はなく刀を持って凜としていた」という証言にはならないはずで

さらに別の検死によれば、「死因は全身打撲の内臓破裂」となりました。機銃で撃たれて全身打撲ならば、衣服は相当乱れていたはずであり、やはり「外傷はなく刀を持って凜としていた」という第一発見の証言にはならないはずです。名前からおそらくユダヤ人でしょうが、ヤコブ・モルガンという方が書かれた『山本五十六は生きていた』という書物には、こんな記述があります。

日本人は（キリスト）教会の世界一の情報機関としての役割を少しも知りません。教会は情報機関だったので。だから山本五十六がニューヨークを歩いていたことがわかってしまったのです。

（部下の）うがきまじめ宇垣纏も生きていたことが教会関係者の情報でわかってしまったのです

※中略※山本五十六はキリスト教徒であり、異教徒をだますことなんてお茶の子さいさいです。

アメリカでの暮らしが長かった山本は、アメリカの生産力、物量を目の前で見ていました。そして彼には東郷平八郎元帥のように、たとえ圧倒的な不利な状況下にあっても、それを覆す勇氣と気概、アイディアありませんでした。織田信長の桶狭間の合戦、源義経のひよどりしえ嶋越の坂落し、東郷平八郎のT字作戦など、たとえ不利な状況下にあってもそれを覆すのが名将ですが、どうやら彼は名将の器ではなかったようです。「半年や一年は暴れてみせるが」と言っていた割に、彼はまったく暴れることなく、逃げ回ってばかりでしたから、もしかしたら彼は、「戦の勝敗とは物量によって決まる」と考えていたのかもしれない。

ですから彼は「アメリカと戦争になれば日本は必ず負ける」と、確信していたのかもしれませんが。そのために彼は「自分はどの道かならず死ぬ。戦中に死ぬか、戦後に戦犯として処刑されて死ぬか、そのどちらかだ。ならばスパイとなって生き延びよう」と考えたのかもしれませんが。もちろん真相は闇の中です。

## ちよつとだけ都市伝説を

「山本五十六はスパイとして生き延びたかどうか?」、この真相は定かではありません。

しかし確かな事実として、山本五十六率いる日本海軍が、真珠湾奇襲攻撃を企画し、そして実行に移したことで、ルーズベルト米大統領に「リメンバー・パールハーバー」と演説させることになりました。この演説によって「厭戦ムード」の強かったアメリカ世論は、「参戦ムード」に誘導されていきました。そして陸軍あがりの東条英機総理や多くの日本の軍人たちが、「東京裁判」で死刑判決を受けて処刑されていくにも関わらず、実は海軍で処刑された軍人は「ゼロ」です。

たとえば嶋田繁太郎海軍大将も、A級戦犯として巣鴨拘留場に入れられておりました。しかし彼は処刑されることなく、1948年11月12日、「終身禁固刑」の判決を受けております。そして1955年に彼は仮釈放され、その後、赦免、つまり罪を許されて、海上自衛隊の壮行会にも出席して挨拶までしています。この海軍大将の嶋田氏が亡くなったのは1976年、実に敗戦から31年も生き続けることができたのです。

この日本陸軍と日本海軍の違いは、果たして何だったのでしょうか?この違いに、自民党の経世会と清和会のよきな違いを感じ取るのは、けっして私1人だけではないでしょう。岸信介や正力松太郎など、戦後の日本において、CIA工作員として生きていく日本人は幾人かおりましたが、実は日本海軍にも怪しさがつきまわっているわけ

です。「日本海軍の怪しさ」ということで思い出していたんだけど、戦前の日本海軍士官たちの親睦団体『水交社』の本部ビルが、戦後に『フリー・メイソン』の「日本グランド・ロッジ」が設立されたという事実です。これは単なる偶然なのでしょうか？

「イヴをそのかした蛇のごとく、江戸時代より『フリーメイソン』は日本に入り込んでおりますから、戦前から山本五十六および日本海軍と『フリーメイソン』には、何かしらの繋がりがあったのではないのか？」と、そう疑いたくなくなってしまふのはけっして私一人だけではないはずですよ。

日本の『フリーメイソン』の中核「日本グランド・ロッジ」のすぐ真横に、昭和33年に333メートルの東京タワーが建てられました。信じるか信じないかはアナタ次第ですが、実は悪魔は「6」とか、その半分の「3」、もしくは6に3を掛けた「18」という数字を好んで使います。今でこそラジオはあまり聞かれませんが、戦後の日本において、ラジオは大変、貴重な情報源でした。では、偶然か必然か、日本のラジオの周波数をご覧になってみてください。このように日本のラジオの周波数というのは、偶然なのか必然なのか、かなり「18 || 6 + 6 + 6」となるのです。

また、悪魔が好きな数字には、「6」の他にも、「13」があります。この数字は映画『13日の金曜日』にもありますように、欧米では「忌み数」とも言われております。そして「サンシャイン60」の高さを調べてみると、これも偶然か必然か、屋上までの高さは「226.3メートル」、この「2 + 2 + 6 + 3」という数字を足すと「13」になります。

また東京タワーが「電波塔」としての役目を終えて、次に日本のテレビ・マスコミの「電波塔」としての仕事を担当しているのが、天まで届かんとしている「スカイツリー」です。この「スカイツリー」の高さは「634メートル」ですから、数字を足すとやはり「13」になります。単なる偶然か、必然なのか、なんとも厄介なものですが、

そもそも通貨発行権を持たない日本政府、そのために代わりにお金を発行しているのは『日銀』であり、小銭は『財務省』が発行しています。そして小銭を足すと、1円+5円+10円+50円+100円+500円+666円です。また紙幣を足すと、千円+二千元+五千元+壹万円=18000円です。

なお、イルミナティのシンボルの目をあらわすかのように、東京タワーの高さ306メートルの所には野球ボールが置かれ、しかも東京タワー、サンシャイン60、スカイツリーの位置は見事な三角形を現します。信じるか信じないかはアナタ次第です。

## 悪魔を出し抜け

元FBI捜査官テッド・ガンダーソンは、凶悪事件を捜査していて悪魔組織に出会い、そして彼は講演でこう断言しています。

「悪魔崇拝主義者は、現在の米国に約300万人いると思います。

私には情報提供者たちがいます。人口20万人のLAには3000人の悪魔崇拝者がいるようです。

ちなみに米国政府は悪魔崇拝主義を本当に宗教と認知しています。」

さて、様々なことを述べてきましたが、やはり重要なこととして、「悪魔なんて本当にいるの?」ということが言えるでしょう。世界には悪魔崇拝する人間はたくさんおりますが、その崇拝対象として、やはり「悪魔」という霊的存在がいます、悪魔崇拝者たちは述べているわけです。

現在はキリスト教に改宗されて、牧師をされているジョン・ラミレスも、元は悪魔崇拝者でしたが、彼は動画でこう答えています。「私は魔術の世界にリクルートされて、3番目の高祭司として、25年間、悪魔に仕えていました」と。彼は悪魔崇拝をしていた時、夜通し悪魔と語り合っていたと言います。

今から80年以上も前のことになりませんが、ナポレオン・ヒルという方がおられ、この方は成功哲学に関する多くの書物を書かれて、世界中の人々を啓蒙してきました。そして彼はある時、悪魔と対話して、その内容を一冊の書物にまとめました。しかし彼は家族から猛反対され、その悪魔との対話の書籍を販売することができませんでした。

しかし2013年になって、ナポレオン・ヒルの悪魔との対話は、『悪魔を出し抜け!』という一冊の書物となつてようやく販売されました。悪魔は傲慢不遜にも、自分のことを「陛下」と呼べと注文を付けたりしながら、悪魔が人間の意識をどのようにコントロールするかを事細かに語りました。

悪魔によれば、悪魔が人間をコントロールする最大の武器は、「人間の恐怖」であるそうです。そしてその「恐怖」とは以下の6つです。「貧困」、「非難」、「病気」、「失恋」、「老い」、「死」、悪魔は人間がこれらの恐怖心を抱く際、あたかもその人間自身が自分から恐怖を抱いているように見せながら、実のところその背後には、悪魔の暗躍が潜んでいると言います。そして悪魔がこの6つの恐怖の中でも、最も利用するのは、「貧困」と「死」だそうです。

そして実際に悪魔崇拝者の国際銀行家たちは、「バビロニア式借金奴隷制度」を敷いて、コロナパンデミックによつて、経済を止めることで、人々の「貧困への恐怖」を煽っております。あるいは今まさに世界中の人々の心に、「死への恐怖」も蔓延させております。

数十年前に書かれながらも、2013年に発売された『悪魔を出し抜け!』の中で、悪魔が述べていたことは、まさに現在の状況に当てはまることなくありません。その決定的なこととして、悪魔が最も好む人間のタイプがあると述べています。それは「流される者」であるそうです。

常識に流される、昨日までの自分に流される、世の風潮に流される、空気に流される、マスコミ報道に流される、政府の発表に流される、周囲の人たちに流される、この「流される」という言葉には多くのことが言えますが、そ

うした「流される人間」こそが悪魔は大好きだそうです。

では、悪魔が最も嫌いな人間はいかなる人間か？「流される」の反対は果たして何なのか？それが分かれば、私たちはまさに悪魔を出し抜くことができます。

悪魔が最も嫌いな人間、それは「考える人間」だそうです。自分の頭で考える、仲間と話し合って考える、自分で調べて考える、自分から情報を掴んでから考える、何を学ぶかを考える、何を信じるべきかを考える、こうした「考える人間」こそ、悪魔は最も忌み嫌うそうです。

ユダヤには、こんな寓話があります。とある村に、一人のラビが新しくやって来たので、そのことを祝う宴が行われることになりました。庭の真ん中には大きな樽が用意されました。あとは村人一人一人が、各家庭から一瓶ずつワインを持ち寄って、その樽の中に注ぐだけでした。

こうして宴が始まり、ワインを飲もうとすると、不思議なことに樽から出て来たのは赤いワインではなく、透明な水でした。皆が不思議そうに頭をひねっていると、ある村人が言いました。

「実は皆がワインを持つてくるのだから、自分1人くらい、水を持つて行っても分からないだろうと考えてしまったのです。」

すると別の村人も、「実は私もです」と謝罪し、次々に村人たちは謝罪しました。結局、誰もワインを持つてきていなかったのです。このユダヤの寓話は、「自分一人くらいは」と考えてはいけない、「他人任せではいけない」ということを教えています。

迫害の歴史をくぐり抜けてきたユダヤ人たちは、皆で多数決を取って「10対0」になると、「これは何か感情や空気に支配されて、正しい判断が出来ていないのではないか？」と考えて、もう一度、考え直してから多数決をやり直すことがあるそうです。しかし「和」を尊み、島国で迫害とは無縁で生きてきた日本人は、ユダヤ人とは逆で「空気」に支配され易く、もしも多数決を行って、「9対1」、もしくは「8対2」であった場合、少数の一人、

二人が皆の意見に同調することがよくあります。これが少数意見の人々に対して、暗黙のうちに多数意見に合わせるように誘導することとして、現在では「同調圧力」ということで少し問題になっております。真夏でも電車の中でも、マスクをする日本人が多かったのは、まさに「和を尊む国民性による同調圧力」が原因の一つと言えるでしょう。

しかしそれは本来の日本人のあるべき姿ではありません。江戸時代の幕末に、黒船が来航して日本の一大事となった時、吉田松陰という侍はじつと座していられず、死を覚悟で黒船に密航しようとして企てました。見聞を広めて欧米列強に植民地にされることのない、そんな日本を造り上げるためと言われております。しかし松陰の密航は失敗に終わりました。そして江戸に護送される途中、松陰は泉岳寺を通り過ぎる際に、赤穂浪士四十七士と自分を重ね合わせて、次のような句を詠んでいます。

「かくすれば かくなるものと知りながら 已むに已まれぬ 大和魂」

密航などしようとするれば、この様な結果になってしまうだろうと、自分でも十分に分かっていたけれども、しかし私のこの熱い「大和魂」だけはやむことが無く、囚われの身というこういつた結果になってしまった、松陰はそう詠んだのです。

日本人の本来の心、それは「大和心」であり、「大和魂」です。

『源氏物語』に出てくる「大和魂」という言葉は、我が子をどの様に育てたら良いのか悩んでいる主人公が、均整の取れた優れた心を身に付けさせてあげたいとして、その美しき心のことを、紫式部は「大和魂」という言葉で現しています。和歌を集めた『後拾遺和歌集』で使われている「大和心」も、軍国主義などとは、全く違う使われ方をしています。

なぜ多くの日本人が、「大和魂」という言葉に対して、暴力的で、軍国主義的な間違ったイメージを感じるのか、それは「W・G・I・P」、「パネルDジャパン」、「3S政策」などによる洗脳です。

すなわち「和」を何よりも貴み、小さな「和」を打ち崩して、「より大きな調和」を打ち立てようと「大調和」を追い求める心、これこそが日本古来より伝わる「大和の心」であり、かつて「大和の民」と呼ばれた国の心であり、青き山々が連なり、「真秀ろば」とも称された美しき我が国の精神なのです。

この「大和魂」があつたからこそ、この「日本」という名の龍の落とし子のような形をした国は、これまでの弱肉強食の時代において、いつでも外国の脅威を打ち破つて、そして国を発展・繁栄させて、歴史を刻んでくる事ができたのです。それはつまり、およそこの日本に生きる者の中で、大和魂の恩恵に預からない者はいない、という事です。

そしてかつて「大和」と呼ばれた我が国を、悪魔勢力は最大敵国として認識し、なおかつ悪魔は「流される人間」を好み、「自分で考える人間」を忌み嫌う、そして大和の心、大和魂とはまさに悪魔が嫌う精神そのものである、これらのことから今を生きる私たちは「大和魂」を取り戻す必要があると言えるでしょう。

## 特攻隊の真意「其の壱」

自分で考えて行動するという、悪魔が忌み嫌う「大和魂」を取り戻すためにも、私たちは「大和魂」を知る必要があると言えるでしょう。実は先の大戦中、当時の米国、英国、ロシア、中国には「日本を分割統治する」という案までありました。「日本分割統治計画」です。つまり日本人もハワイの人々のように、国を完全に失ってしまう可能性が確かにあつたのです。すなわち日本が完全に滅びてしまう可能性が、たしかにあつたわけです。

しかしもしも日本を分割統治すれば、命知らずの侍たちによる反乱が日本各地で起こり続けて、甚大な被害が出続けて、結果的には「日本統治は不可能である」と考えられて、この「日本分割統治案」は無くなったと言われています。命を惜しまない侍たちによって、日本は滅びずにすんだわけです。

それは真の侍が、「いかに死ぬか」ということに、大きなこだわりを持っていたからです。侍は「死に対する美学」を持ち、ゆえに彼らは、人に命を取られることを由とせず、時には切腹して自らの命を閉じました。真の武士は、名誉や官位に執着せず、食事や衣服にもこだわりませんが、「死に様」にだけは大きなこだわりを持ったのです。

そんな彼らだからこそ、先の大戦において戦局が悪くなり、なおかつ日本完全消滅の危機さえ感じ取ると、彼らは「神風特攻隊」として、爆弾を積んで敵戦艦に突撃を行ったのです。つまり特攻攻撃の第一の目的は、「敵艦を叩いて退ける」ということでありましたが、第二の目的として「侍の真の強さを見せつけて怯ませる」ということもあったわけです。

あえて米軍は特攻攻撃の被害を小さく発表しているようですが、全体で見ると二十パーセントぐらいが、敵艦に飛行機ごと命中しており、途中の空中戦で墜とされたものもあるために、それを差し引くと特攻での命中率は五十パーセントだったそうです。ですから米軍はそうとうな被害を受けており、実は何百隻もの戦艦が撃沈、もしくは大破させられました。「屈強な肉体」を持つ米兵の中には、日本の侍たちの「屈強な精神」がまるで理解できず、ノイローゼになる者さえいました。

しかしこの特攻攻撃の元は、鎌倉時代や南北朝時代に遡ります。「侍の鑑」と誉れ高い楠木正成は、足利尊氏と対決しました。足利尊氏軍3万5千の兵に対して、楠木正成軍の兵はたったの700騎、その戦力差は実に約50倍以上でした。誰もが、簡単に勝敗がつくと思いましたが、しかし楠木正成軍は50倍の軍勢に対して、鬼気迫る勢いで16回にも及ぶ突撃を繰り返しました。それでもやはり多勢に無勢、突撃の度に、楠木正成軍は減り続け、6時間の激闘の末、残った者はわずか73騎でした。

楠木正成は生き残った73名の部下と共に、死出の念仏を唱えて火を放ち、自刃しました。享年42歳です。この時の彼の言葉が、世に有名な「七生報国」です。つまり、「七度、生まれ変わろうとも、自分は天下国家に報

いる」ということでした。こうした楠木正成の侍精神、特攻精神は、その後、日本中に根付いていき、明治維新の志士たちにも、先の大戦にも、「楠公精神」として受け継がれていきました。

かつての侍たちは、「真の強さとは『生への執着』を断ち切り、『死の恐怖』を克服するものである」ということを追求していたことから、時には命さえ惜しまない特攻を行ったわけです。

## 特攻隊員たちの手紙①

確認されている特攻隊員は14,009名です。私たち人間という生き物は、想像力の欠如からなのか、「十万人」とか、「十万人」とか、「百万人」とか、そうした言葉を聞くと、何かぼんやりと捉えてしまいがちです。しかし十万人ならば十万分の人生がたしかにありました。泣いたり、笑ったり、怒ったり、喜んだり、落ち込んだり、嬉しくなったりする人生がたしかにあったのです。そしてたしかに14,009名分の人生が、日本のために自ら幕を閉じました。

その中の一人に、穴沢利夫少尉という方がいました。穴沢氏は、幼い頃から読書好きで、夢は故郷に児童図書館を作ることだったそうです。そうしたことから彼は、文部省の図書館講習所を卒業して、中央大学に進学しました。彼は図書館で働きながら勉強しました。その図書館に昭和16年の夏、図書館講習所の後輩たちが実習にやってきました。そこで彼は運命の出会いをします。それは孫田智恵子さんという女性です。

二人の交際は昭和16年の暮れから始まりました。学生の男女が付き合うことを、「はしたない」とされた時代であったために、二人の交際は大半が手紙でした。やがて二人は結婚を望みます。しかし穴沢氏の兄は、都会の娘である智恵子さんとの結婚に反対しました。そしてその兄の意見に引きずられる形で、両親も結婚に反対しました。

戦争の真つ只中であつたために、穴沢氏は戦時特例法によつて、大学を繰り上げ卒業し、そして熊谷陸軍飛行学校校模教育隊に入隊した。昭和20年3月8日、穴沢氏は自分が属する隊の隊長から、特別休暇をもらつて帰郷すると、結婚に反対していた両親を説得します。そしてようやく彼は、智恵子さんとの結婚の許可を得ました。大喜びした穴沢氏は翌3月9日に、さっそく東京の智恵子さんの家を訪ねて、結婚の報告をしました。

こうしてようやく結婚が決まつたその日、彼は目黒にある親戚の家に泊まりました。しかし何とも皮肉なことに、翌日の3月10日は歴史上悪名高い、死者を10万人以上だし、東京の3分の1を焼き尽くしたあの「東京大空襲」でした。民間人への軍事攻撃は国際法違反ですが、米軍は焼夷弾の雨を東京中に降らせ、町中至るところが火事となり、死傷者が町中に溢れかえる大惨事となりました。

穴沢氏は、婚約者の安否を心配して、まだ夜が明けきらないうちに親戚の家を飛び出して、彼女の実家へと向かいました。同じ時、彼女も彼の身を案じて目黒に向かいました。携帯電話の無い時代ですから、会えるかどうかの確信がなく、ただただ、愛する人の身を案じて、二人の若者は火災の町を走りました。

そして二人は奇跡的に、大鳥神社のあたりで出会うことができました。しかし穴沢氏は、大宮の飛行場に帰らなければならなかつたので、彼女と共に電車に乗り込みました。しかし電車は、空襲のあとで避難する人々で溢れかえり、あまりの混雑の息苦しさに、智恵子さんは池袋駅で電車を降りてしまいました。

これが二人の最後の別れとなりました。皮肉にも結婚が決まつた翌日が、二人の最後の別れとなつたのです。それから1ヵ月後、彼女の元に穴沢氏から手紙が届きました。以下がその手紙です。

二人で力を合わせて努めて来たが、終に実を結ばずに終わった。

希望を持ちながらも、心の一隅(いちぐう)であんなにも恐れていた「時期を失する」と言うことが実現してしまつたのである。

去年十日、楽しみの日を胸に描きながら、池袋の駅で別れたのであつたのだが、帰隊直後、我が隊を直接取り巻

く情況は急転した。

発信は当分禁止された。(勿論、今は解除)

転々と処を変えつつ、多忙な毎日を送った。

そして今、晴れの出撃の日を迎えたのである。

〔中略〕

今は、いたずらに過去における長い交際のあとをたどりたくない。

問題は今後にあるのだから。

常に正しい判断をあなたの頭脳は与えて進ませてくださいと信ずる。

しかし、それとは別個に、婚約をしてあつた男子として、散つて行く男子として、女性であるあなたに少し言うて征きたい。

「あなたの幸を希う以外なにもない」

「勇気を持って、過去を忘れ、将来に新活面を見出すこと」

「あなたは、今後の時々々の現実の中に生きるのだ。穴沢は現実の中には、もう存在しない」

極めて抽象的に流れたかも知れぬが、将来生起(せいき)する具体的な場面々々(ばめんばめん)に活かしてくれる様、自分勝手な、一方的な言葉ではないつもりである。

純客観的な立場に立つて言うのである。

当地は既に桜も散り果てた。

大好きな嫩葉の侯がここへは直きに訪れることだろう。

今更、何を言うか、自分でも考えるが、ちよつぴり慾を言ってみよう。

1 読みたい本

万葉、句集、道程、一点鐘、故郷

2 観たい画

ラアフェル「聖母子像」、芳崖「悲母観音」

3 智恵子、会ひたい、話したい、無性に。

今後は明るく朗らかに。

自分も負けずに朗らかに笑って征く。

昭和20年4月12日 智恵子様

福島県出身 中央大学卒

陸軍特別操縦見習士官1期

陸軍特別攻撃隊 第20振武隊

昭和20年4月12日沖繩周辺洋上にて戦死 23歳

穴沢氏の特攻の日と手紙の日付は同じですから、この手紙は死の直前に書かれたものです。「神風特攻隊」という言葉を聞くと、暴力的にとらえてしまい、已むに已まれず特攻を行った侍を、まるで「狂人」か何かのように考えてしまう人もいるかもしれません。しかし、こうした自分をかなぐり捨てて戦う日本男児の不撓不屈の侍精神を見せつけることによつて、『日本分割案』は消し飛んだのです。

豪華客船タイタニック号よりも巨大な戦艦大和も、沖縄県民を助けにいくために救出に向かいましたが、あの時、戦艦大和の一室の黒板にはこう書かれてあつたそうです。

「総員、死に方、用意」

## 特攻隊員たちの手紙②

大和心・侍精神を持っていたのは、何も男たちだけではなく、女性たちも例外ではありませんでした。

藤井一少佐という侍は、陸軍飛行学校において、「真の侍たる軍人とは如何なるものか」と、武士道について教えていました。そして敗戦色が濃くなり、なんとしても日本を護り抜かんとして、特攻隊の神風が吹き荒れると、彼も特攻隊に志願しました。なぜなら彼自身が、「事あらば敵陣に、あるいは敵艦に自爆せよ、私も必ず後から行くから」と、生徒たちに侍精神を教え、そして生徒たちと約束していたからです。しかし彼には妻子がいたこと、彼が長男であったこと、そして彼自身がパイロットではなかったこと、これらの理由から、彼の特攻隊の志願は二度にわたって却下されました。

藤井少佐は仲間との約束を破り、裏切ることには耐えられず、苦しみ続けました。そうした彼の苦しむ心を理解した妻・福子さんは、幼い二人の子どもを背負い、「一足お先に逝って待っています」と手紙を残して、荒川に入水自殺したのです。こうした経緯によって、彼の三度目の特攻隊の志願は、ようやく受け入れられました。死出の旅に出る藤井氏を囲んで、送別会が開かれたようですが、参加した人々は皆、彼を氣遣って亡くなった福子さんや子どもたちのことを口にする者はなく、しかも悲しい雰囲気でもなく、むしろ笑顔でさわやかに酒が酌みかわされたそうです。

『古事記』や『日本書紀』の神話にある日本武尊やまとたけのみことと弟橘媛おわたちはなひめにも、この話と似たものがあります。神代の時代、日本武尊が東国に攻め入る時に、海の神が暴れて、波が荒れ狂い、船が危険にさらされました。その時、弟橘媛が代わりに海に身を投げて、海神を鎮め、波を静めたのです。このように国の益荒男たちは、神話の時代よりずっと、強く美しい大和撫子たちによって支えられてきたわけです。

### 特攻隊員の手紙③

それでは特攻隊の手紙として、18歳で亡くなられた相花信夫少尉あいはなのぶおの手紙をご紹介します。

母を慕いて 母上様御元気ですか。永い間本当に有難うございました。

我六歳の時より育て下されし母。継母とは言え世の此の種の母にある如き不祥事は一度たりとてなく 慈しみ育て下されし母。有難い母 尊い母。俺は幸福であった。

ついに最後迄「お母さん」と呼ばざりし俺。幾度か思い切って呼ばんとしたが 何と意志薄弱な俺だったろう。母上お許し下さい。さぞ淋しかったでしょう。今こそ大声で呼ばして頂きます。

お母さん お母さん お母さんと

第七七振武隊 相花信夫少尉

昭和20年5月4日出撃 戦死

## 特攻隊の真意「其の弐」

特別攻撃隊の編成、そして出撃命令を初めて発した人物を大西瀧治郎中将と言います。この大西瀧治郎中将こそ、「特攻隊の父」と呼ばれている方です。しかしこの大西中将は、日本海軍の中にあつた「特攻思想」に対して、「統帥の外道とうすい げいどう」と称しておりました。「統帥」とは軍隊を指揮監督することであり、「外道」とはまったく道から反れているという意味です。つまり大西中将は特攻攻撃に対して、大反対の立場にあつたわけです。しかしその彼が「特攻隊の父」となるわけです。『日本海軍航空史(1) 用兵編』には、大西瀧治郎について次のような記述があります。

「1944年10月、大西が第一航空艦隊司令長官としてフィリピンに向かう前のことである。

大西は多田力三(りきぞう)中将(軍需省兵器総局第二局長)に特攻構想について話した。多田が『あまり賛成しない』と述べたところ、大西は『たとえ特攻の成果が十分に挙がらなかったとしても、この戦争で若者達が国のた

めにこれだけのことをやったということの子孫に残すことは有意義だと思う」と話した」

また『一億人の昭和史3』には、「特攻の父」大西瀧治郎について、海軍に従軍していた毎日新聞記者の新名丈夫という方の証言もあります。

「大西は『もはや内地の生産力をあてにして、戦争をすることはできない。戦争は負けるかもしれない。しかしながら後世において、われわれの子孫が、先祖はかく戦えりという歴史を記憶するかぎりには、大和民族は断じて滅亡することはないのである。われわれはここに全軍捨て身、敗れて悔いなき戦いを決行する』と話していた」

これらのことから何が分かるでしょうか？それは特攻攻撃の目的というものは、「第一には敵艦を叩くことであり、第二には侍の強さを見せつけ、米兵を怯ませて、日本分割案を退ける」ということでありましたが、それだけではなく実は「子孫に対して、先祖がいかに勇敢に戦ったかを教えることで、『真の強さ』を後世の日本人に伝えて、大和民族が減びないようにする」というさらなる大目的もあった、ということなのです。

特攻攻撃の精神、それは日本民族に対する、「民族的遺産」でもあったわけなのです。

後世に生きる私たち日本人に対して、「本当の強さとは何か？」を伝えるという目的も、実はあの特攻攻撃には含まれていたわけです。私たちの魂を目覚めさせるためにも、特攻攻撃は行われていたのです。

今、ほとんどの日本人が、自分たちに対して国際銀行家が行っている金融詐欺に何も気づいておりません。それは侍魂が失われたからです。それは「武士の心」が失われ、「大和魂」が失われたからです。

しかしすでに述べたように、あの特攻攻撃は私たちの魂を目覚めさせるためにも、実は行われていたのです。ならばこそ真実の歴史を直視し、特攻隊員の精神にも目を向けて、心の奥で眠っている大和魂を目覚めさせて、金融詐欺を終わらせ、大繁栄の扉を拓く以外に、私たちが成すべきことではないはずなのです。

## 国家にも武士道精神を

悪魔勢力に操られていたGHQは、戦後の日本において、「道」と名のつくものすべてが対象となる「武道禁止

令」を出しました。ですから剣道まで全面的に禁止されたのです。そんな中、笹森順造と言う国会議員が、剣道を復活させようとG H Qと交渉を重ねました。彼自身も剣術家であり、彼はG H Qに掛け合い、「剣道は人を殺すことを目的に技を磨くのではなく、その最終目的は、人と人がお互い戦わなくても済むように剣を置くことだ。剣道とは日本の精神的、歴史的な文化である」と説きました。すなわち笹森氏は「剣道とは武道であり、武道とは活人剣である」と説いたわけです。

しかしG H Qはこの申し出を聞き入れず、遂には、「では、実際に試合をして、お前の言っていることを証明して見せる」と言ってきました。つまり「試合してみせて、本当に剣道が人殺しの道具ではなく、平和の道具であるその証明を見せる」というわけです。

そしてG H Qは、米海兵隊の中で最強の男を選び出して、日本人との試合を提案しました。しかし米兵は本物の銃剣を使い、対戦相手の日本人を殺しても構わないが、しかし日本人は木刀を使い、防具も着けさせない、「剣道が活人剣であることを証明しろ」と、何とも酷い条件を突きつけてきました。

しかし笹森氏は、このG H Qの条件を潔く受け入れて、そして國井善弥くにいぜんやという一人の侍を選びました。國井善弥は、鹿島神流の十八代の宗家です。鹿島神流とは茨城県の鹿島神社に古くから伝わる古武術流派であり、彼は「今武蔵」とまで呼ばれていました。そして侍と米兵との間で、日米の誇りをかけた戦いが行われました。

体格の大きな米兵は本物の銃剣を手にし、國井は木刀を手にして対峙しました。米兵は殺気に満ちていたようですが、一方の國井はいたって冷静で、静けささえ漂っていたと言います。

國井が礼をして、木刀を中段に構えようとした、その次の瞬間、米兵は銃剣を國井の喉元目がけて突きだしてきました。しかし國井は半歩下がってこの攻撃を見事にかわしました。すると米兵は、そのまま突進を続けながら銃剣を回転させて、國井の側頭部を銃剣の底で打とうとしました。屈強な米兵による重く硬い銃底での即頭部の殴打、もしもこれが当たれば即死です。

しかし次の瞬間、國井は半歩前進して、この銃底の攻撃をまた見事にかわしました。すると今度は逆に、突き進む米兵の後頭部に柔らかく木刀を当てて、そのまま突進する米兵の力を上手く利用して、相手を床に押し倒してしまいました。殺気立つ米兵は、四つん這いになって床に手つきました。さらに冷静な國井は、そのまま米兵の後頭部を木刀で柔らかく押さえました。四つん這いになった状態で、上から頭を体の内側に向けて押さえつけられると、人間は身動きができません。

「勝負あった！」の聲がかかりました。すべてが一瞬の出来事でした。國井善弥という侍は圧倒的な実力差で、一切相手と剣先を合わすことも、相手を傷つけることもなく、見事に海兵隊最強の米兵を制してみせたのです。すなわち彼は本当に、「剣道は人殺しの道具ではなく、平和の道具であり、活人剣を目的する」ということを証明してみせたわけです。この事実は、GHQ内部に衝撃を与えました。これがきっかけで、「武道禁止令」が解除になった、と言われています。

しかし戦後の七十年の様々な洗脳工作によって、武士道は解体されてしまいました。その結果として、「日本人が暴力と武力の違いが分からなくなった」という悲劇があります。「暴力」とは、何も生み出すことのない破壊の力であり、憎むべき悪であり、何としてでも拒否していくべきものです。しかし「暴力反対!」とか、「暴力が嫌いだ!」とか、「平和が大切だ! 平和を求めよ!」と、いくら声高に叫んだところで、理想だけでは暴力は無くありません。やはり現実には警察が必要であり、そして世界は未だに戦国時代の様相があります。

ですから「暴力」を抑止し、拒否するためには「武力」が必要です。そして「武力」とは、「武」という文字が、<sup>ほこ</sup>「戈(矛)を止める」と表記するように、そして「戈」とは、古代の中国で使われた戦争の道具であるように、「戈を止める」とはすなわち、「暴力を止める」ということに他ならないわけです。

つまり真の剣道・武道の極意が、「人を生かす剣」、「活人剣」であるように、武士道および武道の中で得られる「武力」とは、その憎むべき「暴力」を抑え、平和を守って人を生かすための力のことを言うわけです。

合気道の達人である塩田剛三という武道家は、弟子に合気道の極意とは何かと訊かれて、「合気道の極意とは、自分を殺しに来た人間と友達になることである」と述べています。また合気道には試合さえ存在しません、その合気道開祖の植芝盛平という方は、「合気とは愛気であり、宇宙と調和することが大切である」といったことも述べています。すなわち「暴力」というものが破壊する力であるのに対して、「武力」とは調和の力なわけです。そして武道とは、そうした調和の力を磨くために、心技体を鍛錬するものなわけです。

包丁が人を殺める道具にもなれば、料理をやることで人を生かす道具にもなるために、包丁そのものは価値中立であるにも関わらず、しかし戦後の日本は、武士道および武道が廃れたことで、結果的には「包丁は悪である」といった結論を導き出してきました。

単純に言って、武器商人でもある悪魔勢力に動かされるアメリカが、世界の指導国であり、米国に続く中国が暴力的であるために、未だに世界は核兵器をはじめとする軍事力に基づいて動いているのです。ですから日本が繁栄の扉を開き、日本がアメリカを超える指導国になれば、世界はより美しくなると言えるでしょう。

## 悪魔の手先「自民党」を粉碎すべし

そして日本を金融植民地から解放するためには、もはや国際銀行家の傀儡と成り果てた自民党政権を粉碎する必要があると言えます。もちろん自民党にも、良い政治家は、過去にも現在にもいるでしょうが、しかし自民党が岸信介以来、悪魔勢力の操り人形であったこと、さらにこれまで日本人が自民党に期待をかけて、そして裏切られ続けた戦後七十数年であったことを考えれば、やはり日本国民は、もういい加減、自民党に見切りをつけなければなりません。

これまで「通貨発行権」について、一度も議論して来なかった自民党に、「通貨発行権」を取り戻せるはずが無

いのです。自民政権時代に、石井紘基元議員は「特別会計」の問題で殺された可能性が高いのですから、その自民党に「特別会計」を廃止できるわけがないのです。むしろすでに述べましたように、菅自民政権がこのまま続けば、さらに消費税は上がり、中小企業が減って大企業が増え、正社員が減って派遣社員が増えます。そして「国民年金」と「生活保護」を廃止して、一人当たり月額7万円のベーシックインカムが始まれば、日本中にほーほームレスが増えて、最悪な時代となっていくことでしょう。

私たち日本国民が、リビア以上の豊かな暮らしを求めるならば、私たち日本国民一人一人が「意識」を変えて、自民政権を粉砕しなければなりません。しかしだからと言って、自民党と対立しているその他の政党が、すべて良いかと言えば、けっしてそうではありません。なぜなら他の政党の中には、アメリカを敵視するあまり、国防意識が並外れて低く、中国共産党の脅威をまったく考慮していない政党もあるからです。

なぜ日本が、これまで悪魔勢力の傀儡であるアメリカを通じて、悪魔勢力による金融侵略を許してしまったのか、その理由は実に簡単です。それは日本が先の大戦に敗れて以来、アメリカの属国状態にあるからです。敗戦後の占領期間中、悪魔勢力の道具であったGHQを通じて、日本は憲法を押し付けられることで、いつの間にか日本はアメリカの属国になりました。そしてその押し付けられた憲法は、9条に代表されるように、「自分の国は自分で守る」という当たり前の気概がありません。

9条とは、「武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない」というものです。まともな頭で、この日本語を読めば、日本では自衛隊さえ認められていないわけです。実際に日本では、自衛隊は違憲とされてきました。

ここまで読まれてきた方ならば、もうお気づきでしょうが、日本の小中高といった学校は、ある意味における洗脳機関です。そのために日本の学校では、「かつて日本は侵略戦争という罪を犯した。しかし戦後の日本には憲法

9条があるから、日本の平和が守られている」という嘘を教えて、日本国民を洗脳しています。しかし悲しいかな世界は未だに、核兵器をはじめとする軍事力に基づいて動いております。ですからどんなに正しい意見、正論であっても、その背景に軍事力の担保が無ければ、諸外国と外交を行うことができません。

たとえば貴方が車に乗っていて、交通事故を起こしたとして、相手のベンツに傷をつけてしまったとします。そしてその相手がヤクザであったとしたら、通常ならば5万円の修理代で済むところ、100万円、200万円をふっかけて請求してくることでしょう。すべての国がそこまでするとは限りませんが、しかしそういったことが当たり前にまかり通っているのが、現在の地球の悲しき状況なのです。だから北朝鮮は日本人を拉致しても、強気の姿勢を崩しませんし、中国も平然と嘘の「南京大虐殺」を主張して、日本からさんざんお金をむしり取ってきたのです。

しかし交通事故を起こして、相手がヤクザであったとしても、もしも貴方が警察官であったり、弁護士や裁判官などの国家権力を持っていれば、相手のヤクザは「高額なお金を請求するどころか、自分のほうが恐喝で逮捕されてしまうかもしれない」と考えて、ふっかけることを諦めるものです。この国家権力に相当するものが、「自分の国は自分で守る」という国家としての当たり前の気概なのです。しかし日本にGHQより押し付けられた現憲法には、その当然の気概が無いために、日本人は自分たちの生殺与奪の権を、すべてアメリカに委ねてしまっている状況にあるわけです。

だから日本には北海道から沖縄まで米軍が展開し、東京の横田空域をはじめ日本の上空には、日本の領土でなく、アメリカの領土となっている地域がたくさんあるわけです。こうしたことから「日米合同委員会」という会議が毎月、開催されて、この会議で決められたことは、国会で決められたことをすべて上回ってしまうのです。そのため日本は、アメリカの言いなりとなって、郵政を外資化させたり、派遣法を改悪させられたり、水道をも外資化させてきたわけです。

しかしリンカーンやケネディのことを考えれば分かりますように、アメリカは日本よりも遙かに先に、悪魔勢力によって侵略を許してしまった悲しき国です。ですから日本人はアメリカを敵視すべきではなく、アメリカもまたディープ・ステートの被害者であることを忘れてはならないでしょう。しかしたしかに日本は、アメリカの属国となることで、悪魔勢力からの金融侵略を許してしまったわけです。

ですから日本が金融植民地から解放されるためには、まずは現在のアメリカの属国状態をやめることです。しかし北海道から沖縄にまである米軍基地を追い出したところで、それでは日本の防衛力の低下を招き、繁栄の時代を到来させる前に、中国共産党の侵略の門をただ開いてしまうことになります。

ゆえに私たちの祖国日本が、悪魔勢力から利益をかすめ盗られる状況を脱して、なおかつ中国共産党からも防衛するためにも、「自分の国は自分で守る」という当たり前の国家へとならねばならないわけです。それはすなわち戦争や侵略のためではなく、平和と繁栄のために憲法改正をしなければならぬ、ということなのです。

それはすなわち、個人として侍精神を持って、繁栄の時代を切り拓くために立ち上がるべきですが、国家にも侍精神が必要不可欠であるということです。「戦わないために鍛え抜く、平和のために精進する」、こうした侍精神が個人と国家の両方に求められているわけです。

現在の日本は、中国共産党から自国を守るだけの力があっても、しかし現憲法で、わざわざ自分たちの力を落とさなければならず、だから日本は米軍に依存しなければなりません。そのために憲法改正を掲げる自民党は、これまで国防意識の高い日本国民から期待をかけられてきたわけです。しかし自民党はその国民の期待をことごとく裏切り、むしろ自民党は、日本の国益を海外に垂れ流してきました。

ですから日本を金融植民地から解放し、日本に大繁栄の時代を築くためには、もはや国際銀行家の傀儡と成り果てた自民党を粉砕して、その上で日本は憲法を改正する必要があると言えるでしょう。むしろもしも自民党に憲法を改正させて、自衛隊を防衛軍にしたら、その防衛軍は悪魔の手先と化してしまうか、あるいは現在の米兵のよう

に大量の自殺者を出してしまうかもしれません。

## オウムが悪魔の手先の可能性

敵は悪魔勢力です。ならばこちらは天使の軍勢、もしくは神の勢力とならねばなりません。だから「武士道が大切である。侍精神が大切である」と、私は想い、それを訴え続けているわけです。なぜなら「武士道とは神儒仏の融和」と言われているように、武士道とは日本の神道、中国で始まった儒教、インドで興った仏教、この三つの宗教が、この日本という和の国で、奇跡的に融和することで伝えられてきたものだからです。武士道から日本の精神とも言える「侍精神」が培われてきたからです。

神道とは、八百万の神々を信じ仰ぎ奉りながら、神へと通じる道、つまり随神かんながらの道を歩むことで、自らもまたこの日の本から世界を、より素晴らしくせんとする日本独自の宗教です。

儒教とは、仁や義や礼や勇といった徳目を大切にして、徳高き君子を目指し、天下国家のために戦う中国で始まった道徳的な宗教です。

仏教とは、自らがあの世からこの世に生まれてきたことを知り、この世におけるあらゆる執着を断ち切って、無我の境地を目指し、偽物の自分を捨て、本物の自分、すなわち真我を見出し、インドで興った悟りの宗教です。

人間を「家畜」と考えたり、「物質の塊」と考えたりする悪魔思想を持つ者たちに勝利するためには、まず私たち一人一人が現代の武士道を歩んで、そして壊された精神を立て直して、侍精神でもって悪魔勢力に立ち向かっていくことが大切です。なぜなら「自分たち以外はゴイムである」などという悪魔的な思想に打ち勝つには、「生きとし生ける者、皆が尊く、すべての人に悟りの可能性がある」という仏教的な思想でもって戦うべきだからです。

悪魔勢力が最も忌み嫌っているもの、それは私たち人間の神仏への信仰心であり、そして信仰の中で精進して、自らの精神を鍛え上げ磨いていくことです。

しかし先の敗戦を一つのキッカケに日本人の信仰心は薄れ、そして戦後七十年、日本人の神仏に対する信仰心はさらに廃れてきました。そして精神医学の流行と共に、武士道精神も失われてきました。そしてそれには「オウム」という宗教を騙った組織が、「サリン事件」などの社会的事件を起こしたことも理由の一つであり、そしてこれも実はけっして偶然ではないでしょう。

なぜなら実はオウムが、悪魔勢力と繋がりがあつた可能性があるからです。たとえば石井紘基氏ここうきは本名は尹白水いんはくすいという暴力団員の在日朝鮮人に殺されましたが、オウム幹部の村井という男性も、徐祐行そゆうへんという暴力団員の在日朝鮮人に殺されております。在日朝鮮人の右翼が、オウム幹部を殺害する理由は何でしょうか？

ドナルド・ユーン・キャメロン博士という人物は、「世界精神医学会」の会長も務めていました。そして彼は「人間の脳にLSDの投与や電気ショックを与えて白紙の状態、無意識の状態にして、その状態の中で命令を下せば、人間をマインド・コントロールできる、つまり人々を洗脳できる」と考えました。そしてこのドナルド・キャメロン博士を中心に、アメリカとカナダの両国のあいだで、「洗脳実験」、「マインドコントロール実験」が繰り返されていきました。

この恐ろしい実験の名を「MKウルトラ計画」と言います。「MKウルトラ計画」は、CIAが極秘に実施していた非人道的な洗脳実験のコードネームで、1950年代初頭から少なくとも1960年代末まで、被験者にまったく内緒で行われてきました。1973年、当時のCIA長官リチャード・ヘルムズという人物が関連文書の破棄を命じたものの、しかし辛うじて残されていた数枚の文書が、1975年にアメリカ連邦議会で初公開され、そして世間を騒がせました。ですから「アメリカとカナダの両国でMKウルトラ計画という洗脳実験が行われていた」ということは、公然たる歴史的事実なわけです。

そしてこの「MKウルトラ計画」の研究は、『拷問と医者』という一冊の書籍にまとめられました。そしてさらに何とも厄介なことに、この洗脳を徹底的に研究した書物が、オウムの幹部で医師でもあった林郁夫の手もとに渡ります。オウムの付属医院の医師であった林郁夫は、自著『オウムと私』という本の中でも、あるいは裁判の中でも、この『拷問と医者』という書籍について触れています。こうして単なるヨガ団体であった『オウム神仙の会』は、CIAが徹底的に研究したマインドコントロール技術を駆使して、エセ宗教団体へと発展していったわけです。おそらく幹部の村井は、何らかの口封じのために殺されたのでしょうか。

では、オウムには、いったいいかなる秘密があるのでしょうか？元陸上自衛官の陸将補であられた池田整治氏は、次のように述べておられます。

「地下鉄サリン事件を起こしたオウムの背後には、実は北朝鮮がいて、その背後にはCIAがいて、CIAを操っていたのは国際権力であった」

この池田氏の発言も動画でご覧になれます。元自衛官の陸将補の池田氏が述べる国際権力とは、本書で述べている悪魔勢力のことです。世間を騒がせ続けている北朝鮮ですが、金正恩はスイスに留学していたことが分かっています。そしてスイスとは国際銀行『BIS』のおひざ元であり、『成長の限界』を書いた『ローマ・クラブ』の本拠地でもあります。ですから北朝鮮と悪魔勢力に、何らかの接触があった可能性は、十分に考えられます。そしてニセ札作りからドラッグの製造、そして拉致など、北朝鮮とオウムにはかなりの類似性があります。

そしてオウム事件あたりの90年代から、日本ではマスコミを通じて、「心の風邪」などと称して、「うつ病キヤンペーン」が大々的に繰り広げられて、駅という駅、町という町に精神科クリニックが立ち並んでいきました。こうしていつしか心疲れた多くの人々が、「宗教は怖いが、しかし精神医学は良い」という価値観にもとづいて、精神科クリニックに通うようになっていきました。つまり「オウム事件」によって、日本人の精神はさらに破壊されたわけです。

さて、信じがたいことは重々、承知であります。しかし緻密で狡猾な悪魔勢力は、もしかしたらオウムまで使って、日本国民に宗教に対する誤解と偏見を植え付けて、武士道精神を破壊していた可能性もあります。そうやって彼らは、日本人から武士道および侍精神、そして神仏への信仰心を奪い取ったのかもしれない。もちろんこれは私の推測です。

しかしCIAによってLSDを使用した「MKウルトラ計画」が現実にあつたこと、その計画をまとめた『拷問と医者』という書籍をヒントに、オウムがLSDを使用してマインドコントロールを行っていたこと、元陸上自衛隊の陸将補の池田整治氏が「オウムの背後には北朝鮮がいて、そのさらに背後に国際権力(悪魔勢力)がいた」と述べていること、さらには「オウム事件」あたりから、日本で精神科が流行り、日本の精神が破壊されてきたことは事実です。そしてこれらの事実と、これまで本書で述べてきたことを総合して考えてみると、やはり「オウムは悪魔勢力の手先であり、日本の精神を破壊した」という結論にいたるのも、少しはご理解いただけるはずです。

## 新たなイデオロギーの創設

かつてユダヤ人を自称するカール・マルクスという人物が、1848年に『共産党宣言』という書を世に出すと、世界は「資本主義」と「共産主義」という2つのイデオロギーに別れて争っていきましました。

資本主義は「自由な経済体制」を重視するイデオロギーのことであり、「資本」とは、事業などをするためにに必要な基金、土地や建物といった元手のことです。明治維新以降、日本にも『日銀』が創設されて、日本は資本主義国家となりました。悪魔勢力である国際銀行家によって、「資本」の源流となる中央銀行が支配されている現代を見れば分かりますように、資本主義はけっして完全でなく、むしろ実は問題だらけでした。なぜなら一歩間違えば「資本主義」は、「拝金主義」にも、「銀行主義」にもなりかねないからです。

一方の共産主義では「私有財産」が禁じられ、すべての財産は共有で、なおかつ国が経済全体を管理して、「平等」を目指すイデオロギーのことです。他にも「社会主義」というものがあり、共産主義よりは少し緩やかで、財産の保有も一部は認められています。しかし工場などの生産手段は、すべて国有です。「資本主義から共産主義を目指す過程に社会主義がある」、という見方もあります。

日本やアメリカなどの資本主義社会では今、「拝金主義」となり、かなり酷い超格差社会が展開しているために、一見すると「平等」を目指す共産主義のほうが、理想的にも見えます。しかし共産主義国家はソ連から東ドイツ、カンボジア、中国や北朝鮮と、どこもかしこもまったく「平等」にはならず、「貧乏の平等」を実現させるばかりか、独裁国家となって骸骨の山を築き上げ、世界を驚かせました。

しかも共産主義では「家族制度」さえ否定するために、かつてのカンボジアでは地域が子どもたちを育てました。そのためにカンボジアの子どもたちは、自分の両親に対しては、「おばさん」、「おじさん」と呼ばされ、地域の見知らぬ大人に対しては、「お父さん」、「お母さん」と呼ばねばならない狂った状態でした。同じく共産国家であったルーマニアでも、子どもたちは親元から強引に引き離されて、劣悪な施設に入れられました。すでに述べましたように、単純に言って資本主義の根底にはタルムード思想があり、共産主義にはユダヤ人を自称するマルクス思想があり、これらの二つの思想は同じく悪魔的です。

つまり資本主義にも、共産主義にも明るい未来が無い以上、人類は共産主義を完全に否定しつつも、しかし資本主義にも終止符を打つべく新たなイデオロギーを欲しているわけです。それはまさに資本主義でもない、共産主義でもない第三の選択です。

むしろ逆に、人類が第三の選択を行えなければ、日本をはじめ世界は滅びることでしょう。なぜなら国際銀行家から「通貨発行権」を取り戻して、「バビロニア式借金奴隷制度」を終わらせなければならず、そして「通貨発行権」を取り戻せば、もはやその社会は「資本主義」ではないからです。またもしも日本が共産主義を選び取れば、

日本は中国や北朝鮮のような国家となつて、中国共産党によつて日本をはじめ世界が侵略されていきます。ですから資本主義でも、共産主義でもない第三の選択が今、人類には迫られているわけです。

第三の選択、それはまさに「はたらく」という言葉の意味そのものが変わります。諸説ありますが「はたらく」という言葉の語源には、「畑を楽にする」という意味と、「傍（はたわり）を楽にする」という意味の2つがあるそうです。そして人間の理想は、やはり「誰かに自分が必要とされて、周りの人々を幸せにするために働く」という意味での「はたらく」ではないでしょうか？「生活のため、お金のために働く」のではなく、「他の人々の幸福のために働く」、それこそが人間の理想ではないでしょうか。

「お店に来てくれる人を幸せにする」、「商品を使ってくれる人を幸せにする」、「サービスを提供する人やその奥にいる人々を幸せにする」、「社会を幸せにする」、「地球人類を幸にせする」、そういった意味での「はたらく」へと私たちは確かに変えていけるのです。「はたらく」という一つの言葉を、私たちの魂でもって変えていける、いや、この「はたらく」という言葉を、私たちは変えていかねばならないのです。

ゆえにこそ侍精神を取り戻して、共産主義を完全に否定しつつも、資本主義にも終止符を打たねばなりません。「国際銀行家による金融侵略からの解放、中国共産党の覇権主義を終わらせる、そして大繁栄の時代の扉を開く。そして『はたらく』という言葉の意味そのものを変える」、今を生きる私たちには、これを成していく使命があります。

私たちには「希望の未来」と「絶望の未来」、この二つの未来が用意されているわけですが、私たちは積極的に「希望の未来」を選ばなければならないのです。

## 世界維新に向けて

本書の冒頭で、「真の英知は己の無知を認めることである」というソクラテスの言葉をご紹介いたしました。そして「本書で書かれていることは、世界中のどの一流大学でも教えられていない、とても大切なことである」という話もいたしました。しかしそれでもプライドが邪魔して、「自らの無知」を素直に認められない人は、世の中に大勢おります。

今から二千五百年くらい昔、哲学者ソクラテスの友人がアポロンの神殿に行つて、「ソクラテスに勝る知者はいるか」とお伺いをたてたところ、巫女は「ソクラテスに勝る知者はいない」という神のお告げ、いわゆる「神託」をその友人に伝えました。しかしその神託を友人から聞いたソクラテスは、自分のことを「無知である」と考えていたために、「そんなはずはない。しかし神託にウソがあるはずがない」と考えて、当時のギリシャで知者として有名な知識人たちを回つて、いろいろと質問してみました。するとソクラテスは一つの結論に達します。「知識人と言われている彼らは、たしかに様々なことは知っていた。

そのために彼らは知っているつもりになっている。

しかし私が彼らに愛とか、正義について質問すると、ただ言葉を詰まらせるばかりだった。

そして私は『自分は知らない』ということを知っている。

『無知の知』という点で、どうやら彼らより私のほうが知者であった。

ゆえに神託は正しかった」

これが有名な「無知の知」です。しかし「無知の知」を受け入れられない人はいます。実際にソクラテスも、「知っているつもりになっている知識人」たちから恨まれ、妬まれ、「若者たちを惑わしている」と疑いを掛けられて、処刑されてしまいました。しかしソクラテスはなぜ殺されたのでしょうか？

ソクラテスの弟子プラトンは、師の処刑について「洞窟の比喻」を用いてこんな説明をしています。

人間という生き物は、生まれた時から洞窟の底で手かせ、足かせ、首輪をつけられ、後ろを振り返ることもできず、ただ前方を見たままの状態で固定された囚人のようなものである。

囚人たちの背後には火が燃えていて、その火と囚人のあいだを、いろいろな道具や人形が通り過ぎ、囚人たちは壁に映し出されたそれらの「影」だけを見せられている。彼らは「影」のみを見て、「影」を「真実のもの」だと思いついでいる。そして囚人たちが、「影」について色々議論しているうちに、「影」の次の動きを予測できる囚人には、様々な称賛と名誉が与えられた。

しかし彼らが見ているものは、どこまでいってもただの「影」に過ぎず、彼らは何も「真実」が見えていない。そこで、一人の囚人の束縛を解いて、強引に後ろを振り返らせれば、彼はこれまで自分が「真実」と思っていたものが、実は「影」にしか過ぎなかったと知ることができる。

さらにその囚人を洞窟の外へと連れ出せば、彼は太陽に照らされた美しき世界を知ることができる。もはや彼は囚人ではなく、自由人である。

そして真実を知った彼は、「真実」を仲間へ伝えて、束縛された彼らを地上へ連れていこうと、再び洞窟の底へと戻ってくる。

しかし束縛された囚人たちは、ソクラテスの時と同じように、「自分は知らない」ということを素直に認められず、「自分が間違っていた」ということを頑固に拒んで、自由人の話には耳を傾けない。

囚人たちは、自由人の話を信じないばかりか、皆で彼を捕らえて殺してしまうであろう。

ソクラテスの処刑、そしてプラトンの『洞窟の比喩』にもありますように、「自分にも知らないことがあった」、「自分には間違いがあった」、これを素直に、謙虚に受け入れることは、なかなか困難なことです。しかも無知であるにも関わらず、影だけを見ながら多くの称賛が与えられると、その称賛の分だけ、自分の無知を認めたくなくなりす。

しかしコロナによるワクチン接種、これによる人口削減、そして始まっている『ムーンショット計画』の危機を乗り越えて、繁栄の時代を築くためには、「自らの無知を素直に受け入れる勇気」が大切です。それを教えてくれるこんな話があります。

奴隷は、奴隷の境遇に慣れ過ぎると、驚いた事に自分の足を繋いでいる鎖の自慢をお互いに始める。どっちの鎖が光って重そうで高価か、などと。そして鎖に繋がれていない自由人を嘲笑さえる。だが奴隷たちを繋いでいるのは実は同じだった一本の鎖に過ぎない。そして奴隷はどこまでも奴隷に過ぎないのだ。

過去の奴隷は、自由人が力によつて征服され、やむなく奴隷に身を落とした。彼らは、一部の甘やかされた特権者を除けば、奴隷になつても決してその精神の自由までも譲り渡すことはなかった。その血族の誇り、父祖たちが築いた文明の偉大さを忘れず、隙あらば逃亡し、あるいは反乱を起こして、労働で鍛え抜かれた肉体によつて、肥え太った主人を血祭りにあげた。

しかし現代の奴隷は、自ら進んで奴隷の衣服を着、首に屈辱のヒモを巻き付ける。

そして、何より驚くべきことに、現代の奴隷は、自らが奴隷であることに気付いてすらいない。

いや、それどころか彼らは、奴隷であることの中に、自らの唯一の誇りを見出しさえしている。

リロイ・ジョーンズ(Leroi Jones) 1968年、NYハーレムにて

テレビをつけると、芸能人やスポーツ選手がよく自宅自慢をしておりますが、あれなどはまさに「奴隷の鎖自慢」と言えるでしょうが、しかしこの奴隷の鎖自慢の話が、悲しいほどにあてはまってしまうのが、現代の私たちです。大切なことは、やはり「無知を受け入れる勇氣」です。なぜならソクラテスが述べましたように、そこから「真の英知」へと繋がっていくからです。

そして私たちが、素直な心で「無知を受け入れる勇氣」を持ち、「真の英知」へと繋がっていく時、日本は夜明

けを迎え、世界も夜明けを迎えて、「世界維新」が起きていくことでしよう。

冒頭で述べましたように、「コロナと戦うか」、それとも「コロナの闇と戦うか」、この二つの戦いから私たち人類はもはや逃げることはできません。もはや私たちは逃げも隠れもできないわけです。どちらにせよ、私たちに戦うしか道が残されておりません。

そして真実を知り、世界の闇を見たならば、「コロナの闇との戦い」にこそ、私たちは立ち向かわねばなりません。「自分一人が戦ったところで・・・」、そう考えていては、絶対にこの戦いに勝利はありません。むしろ「周りがやらないのならば、我こそは」と想い、現代の武士道として、勇気をもって1人でも立ち上がってこそ勝利が見えてきます。

我らは必ず勝ちます。正義は必ず勝利します。なぜなら悪魔は神仏に勝てないからです。神仏に勝てる悪魔など存在しないのです。光に勝てる悪は、この世に存在しないのです。例えば、太陽の光は、極めて強い光です。しかしその太陽の光でも、手をかざしただけで簡単に影ができます。薄いボール紙一枚でも太陽の光を遮ることはできます。ただ、それによつてできた影は、決して太陽の光と互角に戦えるようなものではないのです。ですからどうか「神に抗える、神に戦いを挑んで勝つことができる悪魔など、この地球には存在しない」という事実を、強く知っていただきたいのです。

これを読まれる貴方が、現代の武士として、神仏の戦士として、共に悪魔と戦って下さることを、心より願ってやみません。

どうか共に世界維新を起こしてまいりましょう。

## あとがき

日本が「米国証券取引委員会」に登録されたのは、一番古い記録では2003年ですから、小泉政権の時です。つまり小泉・竹中の政権の時に、「郵政民営化(実質は外資化)」を問う選挙が2005年に行われたわけですが、すでにその2年前には、日本そのものが株式会社化していたことになりました。

どれだけ世の中は嘘だらけなのでしょう？

嘘だらけなのですから、「無知」で当然なのです。

日本から「誠の心」が忘れさられているのです。

そして現代が嘘だらけならば、我らは現代の侍として、誠の心を求める必要があります。

かつて西郷隆盛という方はこう言われました。「人を相手にせず天を相手とせよ、天を相手にして己を尽くして人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ぬべし」と。つまり世の人々を相手にするのでなく、天こそを相手にして、自分の心に誠の心があるかどうか、これこそを追求していくべきである、西郷隆盛は述べたわけです。

また吉田松陰という方は「至誠にして動かざる者、未だ之れ有らざるなり」という儒教『孟子』の言葉を信条とされました。これは真の誠に至ることができたのなら、人々の心も、時代も、国家も動いていくものであり、「至誠」によつて動かないものは存在しない、という意味です。さらに吉田松陰は、「至誠神を感ず」と述べています。

「至誠」は神様をも感動させる、という意味です。

真の誠に動かないものはなく、悪こそ打ち破ることができます。

ならば我らは「現代の侍」として、誠の心をこそ追究し、この嘘だらけの世を誠の心でもって、ひっくり返していくべきではないでしょうか？本書を読まれた貴方が、我々の同志となり、世をひっくり返す仲間となってください。心より願ってやみません。

## 与国秀行著 書籍紹介

『武士道を行く』

[https://www.amazon.co.jp/dp/B077Z5SKLX/ref=cm\\_sw\\_em\\_r\\_mt\\_dp\\_pWpOFb61PHFX6](https://www.amazon.co.jp/dp/B077Z5SKLX/ref=cm_sw_em_r_mt_dp_pWpOFb61PHFX6)

侍精神、大和魂とは何かを語りかけ、失われた武士道を取り戻す書籍です。

『大和魂の復活』

[https://www.amazon.co.jp/dp/B08154M14X/ref=cm\\_sw\\_em\\_r\\_mt\\_dp\\_hXpOFb620ZW14](https://www.amazon.co.jp/dp/B08154M14X/ref=cm_sw_em_r_mt_dp_hXpOFb620ZW14)

敗戦後の日本が、いかに国際権力の属国になっていくかを明らかにした書籍です。

『貧困繁栄国家』

[https://www.amazon.co.jp/dp/B085L3DYP4/ref=cm\\_sw\\_em\\_r\\_mt\\_dp\\_bYpOFb95P30J8](https://www.amazon.co.jp/dp/B085L3DYP4/ref=cm_sw_em_r_mt_dp_bYpOFb95P30J8)

繁栄国家日本が、どのようにして、

貧困国になったかを明かす書物です。

『神秘の国』 1000 E

[https://www.amazon.co.jp/dp/B08153D58L/ref=cm\\_sw\\_em\\_r\\_mt\\_dp\\_IYpOFb3MBPXVX](https://www.amazon.co.jp/dp/B08153D58L/ref=cm_sw_em_r_mt_dp_IYpOFb3MBPXVX)

日本人とユダヤ人の不思議な関係。

この一冊に日本人の使命が説かれています。

— 一般社団法人 武士道のご紹介 —

わたしたちは、日本人の“武士道精神”を  
目覚めさせる 啓蒙団体です。

一般社団法人 武士道 代表理事  
与野 秀行



日本を「終わらせない」ために  
真実を知り、  
「武士道精神」を  
取り戻さなければなりません。

人のために生きられる“優しく、勇ましい精神”、それが

## 武士道精神

“武士道精神”を持った“現代の侍”が、“大和(大いなる平和)”を  
世界に広げていく、「世界のリーダーとしての日本」、「伝統的な日本」の復興を目指しています。

主な活動：啓蒙活動をしながら、武士道精神を持った仲間を増やしていきます。

### 啓蒙活動

- 動画配信  
55,000fans  
**YouTube**
- 街宣・セミナー  
都内を中心に  
定期開催中!

### メンバー交流

- オンラインサロン  
全国どこから  
でも参加OK!
- イベント  
BBQ、神輿、  
格闘技etc...

“仲間”と出会える活動の場

武士道 オンラインサロン

Q検索

メンバー募集!



ご寄付にご協力お願いいたします

● ゆうちょ

記号 10160  
番号 91838801  
名前 シャ)アシドウ

● ゆうちょ銀行

支店名 ゼロイチイチ  
口座番号 〇ーハ  
普通:9183880  
口座名 シャ)アシドウ

各種  
クレジットカード  
5000円

